
真説・漆黒の狂襲姫

アサルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真説・漆黒の狂襲姫

【Nコード】

N0640Q

【作者名】

アサルト

【あらすじ】

銀河の遙か彼方にある惑星Zi。そこには優れた戦闘能力を持つ金属生命体『ゾイド』が存在した。

ゾイドは自ら戦う意思を持ち、惑星Ziの戦いにおいて最強兵器として君臨していた。

大戦 と呼ばれる、現時点において最後の戦争終結から約半世紀。軍隊と呼べる規模の軍事力は未だ回復の兆しを見せず、事実上、無力化していた。

『もはや戦後ではない』と言われて久しい現在において、人々は日々を生きていた。

飢餓や目に余る程の貧困は無くなったものの、戦争をするほどの余裕は無い——危い均衡を保っていた惑星Z・iだが、概ね平和と呼べる世界。

しかし、それでも人は争う事をやめることが出来ずにいた。

そして、その争いの場には常にゾイドが在った。

ゾイドが在るから戦うのか、戦うが故にゾイドが必要とされるのか——

惑星Z・iの大陸のひとつ、東方大陸。

かつては都が置かれていた中規模都市、ミヤコノ・シティに住む青年がいた。

クスノセ機獣派遣事務所 に籍を置くゾイド乗り、アサト・タチバナ。

漆黒の狂襲姫 の異名を持つコマンドウルフ——愛機 ヤミヒメ を駆り、アサトは“ なにか ”を探して、今日も生きていた。

第一話『漆黒の狂襲姫』

銀河の遙か彼方にある惑星Z・iズイー、そこには優れた戦闘能力をもつ金属生命体『ゾイド』が存在した。

ゾイドは自ら戦う意思を持ち、惑星Z・iにおける戦いにおいて最強兵器として君臨していた。

現時点で最後の戦争である 大戦 は終わり、人々の間には束の間の平和が訪れた。

しかし、戦争が終わっても人々の間に争いが無くなる事はなかった。

生きる事は戦う事であり、行き続ける限り戦う事をやめる事も出来ないのだらう。

——恐らくはヒトも、ゾイドも……。

×

×

×

第一話『漆黒の狂襲姫』きょうしゅつき

東方大陸の北西部、ヒュウガノダ港とミヤコノ・シティを結ぶ街道を移動するものがあつた。全高七メートルを越す巨大なオオカミ型の戦闘機械獣——ゾイドだ。

機種はコマンドウルフ・タイプ。

かつてヘリック共和国軍で正式配備された、高速戦闘並びに情報収集・隠密作戦と幅広く運用された機体であり、その運動性能の高さと扱い易さから根強い人気を持つゾイドである。

軍で使用されていた機体のほとんどは共和国の象徴である白で塗装されているが、この機体は闇色の漆黒に塗られ、紅あかいラインが各所にアクセントとして加えられている。右の首元には逆十字のマークが入ったプレートが装飾品として飾られ、左の首元には二条の傷跡が確認出来る。

他に通常機との違いを挙げるなら、腰部から突き出た一对のプレート状のユニットだろう。ハイブリッド・スラスター・バインダー（HTB）と呼ばれる装備である。

この巨大なオオカミ型の機体の正式名称は コマンドウルフDF C ——通称 ヤミヒメ と呼ばれている。

闇色の姫。

故に ヤミヒメ である。

その頭部に設けられたコクピットには一人の青年が座っていた。

伸ばし気味の黒髪と、眠たそうな黒い瞳。やや痩せ型の体軀^{たいく}。年齢は二十代前半くらいだろう。

美形という訳ではないがそれなりに整った顔立ちをしており、十人も女性が居れば一人二人は興味を持ちそうな容姿をしているのだが……いかんせん、何かに疲れたような物憂げな表情が限りなくその数をゼロにしていた。

青年の名前はアサト・タチバナ。

ヤミヒメ のパイロットである。

「……ふう。街を出て三時間か、いい加減出てきてくれないもんかね」

『目標の出没時間や位置に法則性がありません。恐らく常に移動して、獲物を見つけては襲っているものと思われます。』彼ら』が食いつくまで待つしかないかと』

アサトのぼやきにそう答える機械音声は、マシン・ヴォイス ヤミヒメ に搭載されたサポート・ユニット『クノキ』のものだ。アサトの事を『マスター』と呼び、ヤミヒメの操縦のサポートや情報管制等も担当している。

「判っちゃいるんだが、どうにもな」

そう言っアサトは中途半端に伸ばした髪を鬱陶しげに掻き、仕事の内容を思い返す。

ゾイドに関する仕事ならなんでも受け付ける——という触れ込みで『なんでも屋』稼業を営むゾイド乗りであるアサトは、現在『仕事』の真っ最中である。

東方大陸の貿易の要所の一つであるヒュウガノダ港と、アサトの住むミヤコノ・シティを結ぶルートには二つの選択肢がある。一つは航空機による空路。もう一つは地上を行く陸路だ。

経済的な事情もあり、よほど急を要さない限り、ほとんどの人間が陸路を利用するのだが、そこにゾイドを使って通行人を襲撃し、金品を強奪する連中が現れた。

長きに渡る 大戦 と呼ばれた戦争が終結して約半世紀が経過していた。とはいえ、それで全てが丸く収まる訳ではない。戦争によって利益を得ていた者、戦争の中でしか生きられない者もいる。

全ての人間が同じ『平和』を享受出来はしない。

戦争に敗れた者。

平和に馴染めない者。

平穏を望まない者。

それぞれの価値観が違う以上、様々な軋轢あつれきや不満が発生するのは仕方がない事かもしれない。そして万人が納得するような対応・政策が採れない以上、どうしても少数派の人間は切り捨てられる。

仕方がないことではある。

しかし、『仕方がない』で割り切ることなど出来はしない。そういった人間の不満はいつか爆発し、また争いが起こる。

恐らくはどこまで行ってもその繰り返しだろう。

（——くだらない人間の、くだらない事の繰り返しか……）

『マスター？』

アサトの無言をどう思ったのか、クノキが声を掛けてきた処ところでアサトの思考は中断した。

「ん、なんでもない。クノキ、盗賊団のデータを出してくれ」

『了解しました』

落ち着いた女性の声を彷彿とさせるクノキの応答と共に、モニターに映像が映し出される。映像には盗賊団の規模と所有する装備、被害報告等が記載されていた。

ここ一ヶ月の被害件数は報告されているだけで十件。治安警察に届けは出されているものの、担当区域外である町の外の事件に対して積極的な動きを取れずにいた。そこで治安警察に見切りをつけたミヤコノ・シテイの災害課が、アサトの所属するクスノセ機獣派遣事務所へ盗賊退治の依頼をしてきたという訳だ。

報告されている盗賊団の戦力はモルガ・タイプが六機。

モルガは突撃戦用に開発され、桁外れの生産台数を誇るイモムシ型ゾイドである。分厚い装甲と突進能力を持ち、後部のコンテナは様々な装備を換装できる高い汎用性を持つ。

かつては常に部隊の先陣を切って戦った機体である。

ちなみに現在のヤミヒメの武装はホーミング・レーザーが計六基、背部のAZ二連装二五〇ミリ・ロング・レンジ・キャノンが一基。あとは格闘戦用のツメとキバ。

数の優位性が揺るがない以上、近接戦闘は避け、相手の射程範囲外からの狙い撃ちを見越した装備だ。

盗賊団のデータと戦術プランの再確認にも飽きが来た頃――

——ピピッ

短い電子音と共にアサトは瞬時に臨戦態勢に移行する。

「——掛かったか！」

モニターに表示されていたデータ映像が消え、代わりに望遠カメラが捕らえた六つの機影が映し出された。幸い、向こうは ヤミヒメ の接近には気づいていない。ただでさえ モルガ は索敵能力が著しく低いのだ。

「数は情報どおりだが…… キャノリー がいるな」

モルガ・キャノリー —— 最大数の量産機である モルガ を多様に生かすため開発された長距離用のキャノンを装備した機体である。

『恐らく強奪した物資にあったものを、現場で取り付けたものと思われるわね』

「被害報告には無いな、そうなると密輸品か」

どんな法にも抜け道はある。そういった方法のひとつに密輸があるが、正規の手段を講じずに運んでいたものを警察に届けられるはずもない。

「やっかいだな」

キャノリー　二機を中心にして同心円上にノーマル・タイプ四機が周囲を固めている。

『敵の索敵圏外から狙撃できるのは、こちら側に近いノーマル・タイプ二機のみです』

「それで残り四機が、　キャノリー　の射程はどのくらいだと思う？」

『正規の装備でない事、正規の整備手順を踏んでいない事を考えると、有効射程は本来の四割減と推測されます』

「判った——まずはこちら側の二機を潰す。次に　キャノリー　だ。上手くすれば残りのノーマル二機と合流される前に叩けるだろう。あとはどうとでもする」

『了解しました。戦闘態勢に移行します』

「ん、サポートよろしく」

そして気負うでもなく、高揚するでもなく、『もう一人の相方』に声を掛ける。

「待たせたな　ヤミヒメ　——出番だ」

——ウオオオオオオンッ！

「落ち着けよ。本当の（・・・）出番はまだだ」

待ちかねたように咆哮する ヤミヒメ をなだめつつ、アサトは狙撃用のバイザーを降ろす。

面倒な照準と補正はすべてクノキがやってくれるが、引き金を引くのはパイロットであるアサトの仕事だ。

「まず一機」

空気を切り裂く轟音と共に射出された砲弾は、正面左側にいたモルガ のコクピットを一撃で貫いた。

「——次」

そして一機目の撃墜を確認する間もなく、二つ目の標的を捉え、更に引き金を引く。

吸い込まれるかのように二機目の モルガ のコクピットに砲弾は引き寄せられ、鋼鉄の機体は無骨な鉄くずと化した。

「よし、次は キャノリー だ。クノキ、射程内に捕らえたらすぐに撃て、俺は操縦に専念する」

『了解。火気管制システム（FCS）を一時お預かりします』

バイザーを座席後部の定位置に戻し、操縦桿を握りなおす。

「向こうはまだ状況に気づいていない。一気に畳み掛けるぞ」

『了解。御武運を』

「お互い様だろ」

苦笑しつつ、アサトは ヤミヒメ を次の目標^{キャノリー}に向かわせた。

● ● ●

盗賊団の一番下っ端—— モルガ 六番機に乗る男は、何が起きているのか状況が理解できないでいた。

自分と同じくノーマル・タイプの モルガ で警戒をしていたはずの内、二人から定時連絡が来ない。恐らく昨夜の酒が抜け切らずにコクピットで眠りこけているのだろうと気にもかけずにいると、突然の警報^{アラート}がコクピットに鳴り響いた。

反応のある方向に機体を向けると、ものすごい速さで盗賊団のリーダー^{ーダー}の乗る一番機—— モルガ・キャノリー に迫る漆黒の機体がモニターに映った。

黒いカラーリングに見慣れない装備をした コマンドウルフ に何の抵抗も出来ず、二発の砲弾を頭部装甲とコクピットに受けて沈

黙するリーダー機。

やっと有効範囲に入っただのか、背部のキャノリー・ユニットで応戦する二番機だったが、長距離戦用というのが災いした。一度は有効射程内に敵機を捕らえたものの、黒い コマンドウルフ の圧倒的な加速性能をもって近接戦闘距離に持ち込まれた二番機も、為す術なくコクピットに鋭利なツメ（ストライク・クロー）の直撃を受け沈黙した。

男は混乱した。

何が起こってる？

あの黒い コマンドウルフ はなんだ？

奴の現れた方向にいたはずの三番機と四番機はどうした？

……そもそも自分は何をしているのだ？

そんな現実逃避にも等しい思考のループに陥^{おちい}っている内に、勇敢にも正体不明の敵機に突撃した五番機が、機体の側面に二連装キャノンの直撃を受け横転する様を、男はただ呆然と眺める事しか出来なかった。

すでに自分が次の標的となっっていることにも気づかず――

•
•
•

戦闘は順調だった。

首尾よく二機目の モルガ・キャノリー を墜とした時点で ヤミヒメ の損害はなし。残る二機の モルガ の内、一機はまったく動きを見せない。

「びびって動けないのか？ …… 悪いが仕事だからな」

勇敢にもこちらに突進してきた モルガ を直前で避け、アサト は モルガ の無防備な側面に至近距離からの砲撃を浴びせる。モルガ は五回六回と横転し、左脚——と言うのだろう多分——の車輪を派手に吹き飛ばした処でようやく停止した。

「あとはあいつか…… クノキ、あの モルガ に通信を繋がられるか？」

『了解。強制的に通信回線を開きます』

——ザザッ、という短いノイズの後通信回線が開く。

「聞こえるか？ こちらは クスノセ機獣派遣事務所 所属の『アサルト』だ。武装を解除して投降するなら命の保障はする」

•
•
•

なにも出来ないでいた男はただ　モルガ　のコクピットで震えていた。

次の瞬間には砲撃で、もしくはコクピットごとツメで潰されるかもしれない恐怖で彼の頭の中はパンク寸前だった。

そこへ急に通信が繋がると、聴きなれない男の声がノイズ混じりに聴こえてきた。

『聞こえるか？　こちらはミヤコノシティ所属の『アサルト』だ。武装を解除して投降するなら命の保障はする』

混乱した頭で通信の内容を理解するのは困難だったが、命の保障はするという言葉に徐々に男は冷静さを取り戻しつつあった。

しかし、冷静になった男の脳裏には新たな不安が生まれつつあった。なにかモヤモヤする。

目の黒い　コマンドウルフ　と『アサルト』というコール・サインに、男は思い当たる節があった。

それは三年前に起きたとある事件――

ソイテック
ZOITEC　社のある研究機関から逃走したゾイドが、追跡した数十機のゾイドをすべて振り返り討ちにして行方を眩ませた。

その際、数十キロにも及ぶ爆発が観測されたのだ、逃走したゾイドが姿を変えたのだと、無責任な噂が一人歩きし、すでに事件は都市伝説と化している。

ZOITEC はこの事実を否定し、同時期に行っていた実験による小規模な『事故』があったとだけ発表。しかし、実験の内容に関する発表は行われず、全ては人々の記憶の奥に消え、噂だけが人々の間に伝播していった。

大概是眉唾まゆつばものの、一笑に付すような内容だったが、いくつか噂話に共通して出てくる内容があった――

曰く、逃走したゾイドは黒い コマンドウルフ だった。

曰く、逃走したゾイドのパイロットは『アサルト』のコール・サインで呼ばれていた。

曰く、逃走したゾイドには少女の亡霊が取り憑いていた……。

これらの共通する内容から、事件に登場するゾイドに付いた仇名が―― 漆黒の狂襲姫きようしゆぎ。

いつしか、実在するかも判らないゾイドはそう呼ばれるようになっていた――

この事を思い出した男は再び恐慌状態となった。

一度冷静になった分、混乱はよりまともな思考を遮断する。

いま目の前にいる敵は件の『亡霊ゾイド』ではないのか？

だとすれば、投降した処で命の保障などあるのか？

男は改めて噂話のゾイドの名を整わぬ呼吸で口にした。その名を唱えれば、もしや目の前の悪夢が消えるのではないかと一縷の望みを託して……。

「——し、漆黒の狂襲姫 ……！」

● ● ●

国際法に則^{のっと}った定型文を伝え終えて、アサトは相手からの応答を待った。

あまりの恐怖に気を失っていない限り、何らかの反^{リアクシヨ}応があるはずなのだが……時計の針が半周するだけ待っても モルガ のパイロットからの応答は無かった。

再度通信を試みようとした時——

『——し、漆黒の狂襲姫 ……！』

通信機から聴こえた搾り出すような応答にアサトは言葉を失った。

突然の応答に驚いた訳では無論ない。

その呼び名——忌み名とも言える ヤミヒメ のもうひとつの呼称……。

——ウウウウオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

押し殺したような、呟きともとれるアサトの声——もしくは彼の心情——に呼応するように ヤミヒメ は咆哮を上げた。

過ぎ去った過去を嘆くように――

•

•

•

次の瞬間には全てが終わっていた。

あまりに一瞬の出来事に、盗賊団の最後の一人は何も判らないままに一生を閉じただろう。

—— 漆黒の強襲姫。

その名を口にした途端、堰^{せき}が切れたように男の中の恐怖が溢れ出した。

恐怖に追い詰められた人間の行動はその場から逃げ出すか、破れかぶれの決死攻に出るかのどちらかだが、男の行動は後者だった……。

敵を倒せば脅威は払拭できる。

生き残るための生存本能——もしくは自己防衛本能——がさせた行為だろうが、『脅威』との力の差は歴然であり、事態を一変させるには奇跡が必要だった。

かくして都合よく奇跡が起こる筈もなく、当然の結果のみが残った——

「目標の制圧を確認。生存者は無し。場所は——」

クライアントに任務完了の旨を伝え、状況と場所を伝える。数時間後には街の治安警察が事後処理に来るだろう。

淡々とした口調で報告を終えたアサトは、最後に撃破したモルガの残骸に目を留めて呟いた。

「言っただ……俺は投降しろって」

『マスター……』

次の指示を求める声音には機械音声には含まれるはずの無い、どこかアサトを氣遣うようなニュアンスが感じられる。

「……ん、さつさと帰って休もう。おつかれさん、クノキ、ヤミヒメ」

『おつかれさまです、マスター』

——クウウウン。

返事を返すクノキと、喉を鳴らすヤミヒメ。

二人の相方の反応にどこか満ち足りたようにしばし目を閉じ、帰路に就こうと操縦桿を握りなおしたその時、救難信号（SOS）を告げる電子音がコクピットを包んだ——

つづく

第二話『鋼鉄の慟哭』

何故生きているかと問われれば、『ただなんとなく』としか応えられない。

死ねなかったから生きている。

そう——俺は死んでいないだけだ。

ただの死に損ない。

そんな俺が生きていると言えるのか？

——
否。^{いな}

それはただ死んでいないだけ。

それは生きているとは言えない。

何故生きる？

何故生きねばならない？

その答えを探している。

それが俺が生きている理由だ。

だから生きる。

だから戦う。

生きる意味を探しながら、死に場所を探しながら。

それでも――

×

×

×

第二話『鋼鉄の慟哭』

盗賊団の掃討を完了し、帰路に就こうとしたその時、コクピットに救難信号（SOS）の受信を告げる電子音が響いた。

「——救難信号？」

呟くのはどことなく気怠い雰^{けだる}囲気を漂わせた青年だ。

中途半端に伸ばした黒髪と同じく黒い瞳。やや痩せ型という以外は特に特徴のない容姿だが、逆に言えば欠点と言える部分もない。それなりに整った顔立ちと言える。

アサト・タチバナ。

それがこの青年の名前だ。

年の頃なら二十代前半だが、年齢に似つかわしくなくどこか疲れ

たような印象がある。

「近いな。クノキ、映像拾えるか？」

『はい。映像出します』

そう応じるのはアサトの搭乗するゾイド ヤミヒメ に搭載されたサポート・ユニットであるクノキだ。

スピーカーを通して聞こえる無機質なはずの女性の機械音声は、マシン・ヴォイスしかし聴く者の気持ちを落ち着かせる響きがある。

小さな電子音と共に正面右のモニターに二十センチ四方の表示窓ウインドウが開かれ、望遠カメラが捕らえた映像を映し出す。映し出された映像にはふたつの機影。どちらもゾイドで、一方がもう一方を追い立てている。

「救難信号を出してるのは追われてる グスタフ か」

グスタフ。

強固な装甲と高い積載能力を誇り、民間でも輸送用ゾイドとして広く使われているダンゴムシ型の機体だ。

対して、それを追い回しているゾイドは――

『ライブラリー照合―― ジェノザウラー です』

「『Dの遺産』か……」

ジェノザウラー。

かつての 西方大陸戦争 において、ガイロス帝国が進めていた
デスザウラー復活計画。その過程で偶然発生したティラノサウ
ルス型ゾイドが ジェノザウラー だ。

当時、帝国・共和国ともに躍起になって研究が進められていた
オーガノイド・システム を実験的に組み込まれた本機は絶大なパ
ワーを発揮したが、それ故に乗りこなせるパイロットは少なく、
オーガノイド・システム の効果を制限して小数が生産されるにと
どまった。

ちなみに本来は黒を基調にしたカラーリングが施されているが、
ウインドウに映し出されている機体は発掘された『化石』を思わせ
る白系統のカラーリングが施されていた。

「あんなものが他にも残ってたとはな」

ジェノザウラー を愛機にしている、とある人物の顔を思い浮か
べて、アサトは気分を害した。

「クノキ、どう思う？」

「ジェノザウラー の正確なスペックが記録されていないので確
かなことは言えませんが、ゾイドコアの活性値が異常です。初期生
産型かどうかは判りませんが、普通のゾイドではありません」
ファースト
・ロット

「とはいえ、ほっとく訳にもいくまい…… ヤミヒメ の状況は？」

『機体に問題はありません。弾薬にも余裕があります』

「ん—— ヤミヒメ ！ まだ行けるか？」

—— ウォン！

『まだやりたりない』とでも言うように ヤミヒメ も応える。

「よし、なら行こう」

そう言って ヤミヒメ の背部に装備されたA Z二連装二五〇ミリ・ロング・レンジ・キャノンの照準を追いかけっこ（ドッグファイト）をしている二体のゾイドの中間に定め、引き金を引いた。

照準どおりに、威嚇を兼ねた牽制の砲撃が ジェノザウラー の眼前に着弾する。

ヤミヒメ の存在に気づいた ジェノザウラー が動きを止め、徐々に グスタフ との距離が開いていく。

「クノキ、通信を」

『了解——どうぞ』

「その グスタフ 、聞こえるか？ こちらは クスノセ機獣派遣事務所 所属の『アサルト』。黒い コマンドウルフ で援護する」

国際法に則った定型文を告げると、グスタフのパイロットからも応答があった。

『——こ、こちら Z O I T E C 所属の グスタフ301。救援に感謝する!』

多少ノイズ交じりだが、音声のみの通信からはパイロットである男性の安堵の表情が窺えた。

「なんで追われている?」

『……判らない、突然現れて襲ってきたんだ!』

男の必死の形相がアサトの目に浮かぶ。

「……了解した。この先にミヤコノ・シティという街がある。そこに逃げ込め」

そう言っアサトは グスタフ のパイロットの礼を聞きつつ、動きを見せない白いティラノサウルス型へ意識を集中させる。

「ジェノザウラー は応答なしか」

『通信回線が繋がりません。話を聞くつもりはないのでしょうか』

「ま、期待はしてなかったさ。グスタフ を追う気配はないが……なにが目的だ」

盗賊の類であれば邪魔者を消して、すぐにでも獲物を追いたい処

だろうが、そんな動きを見せる様子はない。

グスタフ が去った方向へ目を向ければ、すでにその姿はだいぶ小さくなっていた。走行に支障が出るような損傷はなかったのだろう。

「さて、どうするかな……」

記録されているスペックだけを見ても白兵戦は避けたいと思わせるが、何よりも気になったのは『荷電粒子砲』の存在だ。

恐らくはゾイドが単体で運用する火器としては最大の威力を持つであろう兵器。対峙している白い機体の実装しているかは不明だが、発射までに要する時間が判らない以上うかつに近づくのはためられた。

「……ん、接近戦は避けて距離を取る。適当に時間を稼いで、頃合を見て逃げるぞ」

『賢明な判断です』

アサトの作戦に賛成するクノキだが、 ヤミヒメ だけは不満げに喉を鳴らす。

「そう言っな。あんなのとやり合うような武装は今日は積んじやいないんだ」

そう。今回の仕事は モルガ の掃討であり、イレギュラーに対

応でできるような装備はない。

「だいたい、 カヅチ を壊したのはお前だぞ。 あれならなんとか なったかもしれんがな」

なおも食い下がる愛機に駄目押しするように、多少恨みがましい ニュアンスを込めて告げると、さすがにぐつの音もでないのか引き下がる ヤミヒメ。

「また次の機会にな」

苦笑しつつ相方にフォローを入れると、操縦桿を握りなおしアサトは正面の敵を見据えた。

「さて、どう来る？」

•
•
•

「——見つけた……」

白い ジェノザウラー のコクピットで、自分と対峙する黒いコ
マンドウルフ・タイプ—— ヤミヒメ を見ながら『彼女』はそう
呟いた。

そこに居たのは、年の頃なら十二、三歳の少女だった。

鮮血を思わせる紅い髪と瞳。

その決して人間には出るはずのない紅い色が、透けるような白い肌とのコントラストで目に痛い位に良く映える。

小柄な体格に細い手足。その多分に幼い少女特有の身体の未成熟さには、ある種の美しさがあった。芸術的と言ってもいい。

整った愛らしい顔には、どこか蠱惑的とも言える表情を浮かべている。

私には欲しいものがある。

私だけを見てくれる、私だけのパートナー。

ずっと探していたもの。

ずっと欲しかったもの。

もうすぐ手に入る。

私だけの……。

「もうすぐだよ、 シラヒメ ……」

そう言って、少女は外見からは不釣り合いとも思えるどこか恍惚と

した表情を浮かべながら、モニターに映る ヤミヒメ のコクピット、その奥に居るであろうパイロットを想う。

——オオオオオオオン……。

少女の呼びかけに応えるように シラヒメ と呼ばれた白い ジ
エノザウラー は低く唸り声を上げる。

「ふふふ……お前も早く逢いたいよね。じゃあ行こうか、 シラヒ
メ」

妖しくも——しかし年相応の無邪気な笑みを少女が浮かべた次の
瞬間—— シラヒメ のコクピットから少女の姿は淡い紅い光にな
って消えた。

●
●
●

変化は突然現れた。

白い ジエノザウラー の眼が発光したかと思えば、次の瞬間に
は全身の装甲と装甲のつなぎ目から紅い光が漏れ出した。パネルライン 心臓の鼓
動のように光を明滅させる姿は全身から血を流している様にも見え

る。

そして ヤミヒメ を睨み付けると、出血の痛みから自分を鼓舞するように ジエノザウラー は咆哮を上げた。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

「——！　なんだ……この感覚！？」

アサトが違和感を感じた瞬間、同時に ヤミヒメ のいくつかのプログラムが勝手に起動を始めた。

（まさか、DFCが共鳴したのか？）

DFC、スタンバイ。パイロットノ承認ヲ要請シマス

そう告げるクノキの声には、普段のようなアサトを氣遣う温度はなく、無機質な機械音声のそれではなかった。

「どうしたクノキ、しっかりしろ！」

「パイロットノ承認ガ確認サレマセンデシタ。プロセスヲ中断。システムヲ再起動シマス」

「こんな時に……」

システムの再起動時、一度シャットダウンしたシステムが再度立ち上がるまでゾイドはパイロットから一切の指示を受け付けない。しかも敵を目の前にしながらこの状況は、手足を縛られているのも同然だ。

こちらの状況を知ってか知らずか、脚部の装甲を展開し、スラスターを露出させる ジェノザウラー。機体を浮かせる程の出力によりホバー走行に移行し、一気に ヤミヒメ に肉薄する。

距離にして残りわずか五メートル。

システムは未だ復旧していない。

残り一メートル。

白いティラノサウルス型が腕部のツメを振り上げる。

ヤミヒメ はまだ動けない。

(ここまでか……………割と早かったな)

アサトはその状況を他人事たじんじの様に感じていた。

死がそこまで迫る。だが恐怖はない。

むしろ不思議と落ち着いてさえいた。

(これで何もかも終わりだ……………)

次に来るであろう衝撃に目を閉じて、死を受け入れようとした時

『
×××××
』

アサトの脳裏に、こちらを振り返りながら薄く微笑む、紅い髪と瞳の少女の姿がよぎる。なにごとか口になっているが、その声を聴き取る事は出来ない。

「———」

まだ死ねない———そう思い返して、無駄だと知りつつ、それでも操縦桿を握りしめる。

そして、次に来るはずの衝撃は———来なかった。

直上から振り下ろされた ジェノザウラー のツメ（ハイパー・キラ・クロー）を、 ヤミヒメ は首を左に振って紙一重で回避。続けて、勢いを乗せた尻尾しっぽによる殴打が迫る。

だが ヤミヒメ はこれを避けず、受身を取りつつ跳ね飛ばされる力を利用して ジェノザウラー との距離を取った。

その際、空中で身をひねり一回転。相手を正面に捕らえつつ軽やかに着地した。

「……………」

ヤミヒメの挙動に驚いたような反応を見せる ジェノザウラーだが、もっと驚いていたのは当のアサトである。

『—— ヤミヒメの自己防衛本能』

「！ クノキ………今のはお前か？」

アサトは何もしていない。ただ想っただけだ——『動け』と。

『いいえ。今のはゾイドが持つ本能—— ヤミヒメの意思です』

「………そうか。ゾイドにとっての一番の足枷^{あしかせ}は、人間なのかもな………」

そもそもゾイドとは人間が捕獲し、操縦席を設け、武装を施したものだ。

そこにゾイドの自由意思が介入する余地はない。

自由を奪ったことを恨まれ、人間という異物に支配される事を疎^{うと}ましく思っ^うていてもなんら不思議はない。

アサトはそう考える事があった。

しかし——

『それは違います』

クノキの、心なしか熱のこもった声にアサトの言葉は否定された。

『自分たちは兵器ではない。身体を改造されても、心までは兵器になれない。だから自分の事を理解してくれる乗り手と出逢えることは幸せだ』

「……………」

アサトは呆けたようにクノキの言葉を聞いていた。

『ヤミヒメ はそう感じています。そして、それは私も同じです』

アサトは以前に読んだ文献の一節を思い出していた。あれは誰の言葉だったか――

ゾイドはヒトを感じる。乗り手が望めばゾイドはそれに応えてくれる。

だから楽しい。

だからゾイド乗りはやめられない。

（………… そうだったな。だから俺は ヤミヒメ に乗っている）

それはゾイド乗りにとって最も原初的な感情であり、だからこそ忘れがちになってしまう事だった。

「——クノキ、もう大丈夫なんだな」

『はい。ご心配をおかけしました、マスター』

クノキの声を聞き、普段どおりだとアサトは確信する。

「なら、少し本気出そうか。プラン変更だ——クノキ、
D F C
限定起動」

『了解。第一段階、ファースト・リミッターセーフティ・リリース
安全装置解除』

アサトの要請に従い、クノキによるプログラムのリミッター解除が行われる。

そして、先の ジエノザウラー の異変と同様の現象が ヤミヒ
メ にも起こった。

キヤノピーの奥にある双眸そうめいを妖しく光らせ、機体の各所からも紅
い輝きが漏れ始める。

その光は黒い機体色のせい、白い ジエノザウラー より一層
強く深紅の輝きを増している様に見える。

ゾイドコアの出力も上がっていく。

アサトは自分の身体を通して、 ヤミヒメ に力が漲みなぎってくるの
を感じた。

「——行くぞ、 ヤミヒメ ！」

——ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

ヤミヒメ が咆哮を上げ、 ジェノザウラー も呼応するかのよ
うに咆哮を上げた。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

睨み合う二体のゾイド。

奇しくも『姫』の名を持つ二体の機獣が、まるで姉妹同士で戦わ
なければならぬ事実^{じつじ}に慟哭^{どうく}するように……。

先に動いたのは ヤミヒメ だった。紅い光の尾を引きながら駆
ける。

腰部のハイブリッド・スラスター・バンダー（HTB）に内蔵さ
れたホーミング・レーザーが発射され、左右あわせて六条の光が
ジェノザウラー に殺到する。

ヤミヒメ を支点にコンパスで反時計回りに円を描くように回避行動を取る ジェノザウラー 。

しかし、ホバー走行による高速移動を持つてしても光の速さで迫るレーザーをかわしきることはできず、二本がかすり、三本のレーザーが直撃した。

だが――

「低出力とはいえ、装甲を焦がす程度か」

更にレーザーを照射。次は時間差で左右から三条つつの光が白いティラノサウルス型ゾイドに迫る。

先行した三本のレーザーを全てかわし、時間差で迫る更に三本のレーザーも、踵に装備したアンカーによる急停止と反復飛びでかわす――が、そこに狙い済ましたような砲撃が着弾した。

そもそも光学兵器は大気中では威力が減衰してしまうため、高出力でないと攻撃としての効果は得られない。とはいえ高出力の照射は機体に掛かる負担が大きいため、アサトは主に牽制や、ミサイルの迎撃として利用している。

これもその応用だ。見た目に派手なレーザーで牽制し、本命のキヤノンを撃ち込む。

「少しは効いたか？」

期待を込めたアサトの呟きは、しかし着弾の煙の中から現れた無傷の敵機の姿によって裏切られた。

「……クノキ、あんな装甲があるのか？」

『着弾の瞬間に目標付近に高エネルギー反応が感知されました。恐らくEシールドを使用したと思われます』

主の質問に明瞭な回答を返すクノキ。

「やっかいだな」

Eシールド自体は特に珍しい技術ではない。装備している機種はそう多くはないが——光学兵器と同じく機体に掛かる負担が大きいため、搭載できるゾイドは限られている——ある種のエネルギーによって形成される障壁は絶大な防御力を発揮する。

だが、砲弾を防いだという事は当たればそれなりのダメージを受けるという事だ。

時計に目をやると、グスタフを見送ってから充分な時間が経過していた。

「頃合だな。仕掛けるぞ」

『撤退ではないのですか？』

「プラン変更って言ったろ。それに荷電粒子砲は潰しておきたい」

撤退した処を後ろから狙われる可能性もある。未だ装備の有無は確認できない——ジェノザウラーの荷電粒子砲の砲身は口腔内^{くわうくわうない}に収納されているため発射体制を取るまで外部から視認できない——

―が、危険要素は潰しておきたい。

『了解しました』

アサトの考えを酌み取ったクノキは即座に同意する。

「――ヤミヒメ！」

その呼びかけに短い咆哮で応え、漆黒の機体が駆ける。

アンカーの様に射出された、ワイヤーで上腕と繋がった ジェノザウラー の右腕を寸での処で右に回避し、加速の勢いで横滑りしながらホーミング・レーザーと二連装キャノンを斉射する。

しかし、頭部に殺到した攻撃は全てEシールドに阻まれ無効化されてしまった。

「この距離でも駄目か……ならッ！」

更に速度を上げて敵に肉薄する ヤミヒメ。

迎撃に打ち込まれた――今度は左側――ワイヤー・アンカーを真上に跳躍して避け、ワイヤーの線上に着地する。

射出したアンカーを巻き取る最中だった シラヒメ は逆にワイヤーに引っ張られ、前のめりに態勢を崩す。

なんとか姿勢を保とうともかく敵機に、眼前にまで迫った ヤミヒメ に対応する術はなかった。

ワイヤーを踏みつけて相手の動きを封じた ヤミヒメ は、背部の二連装キャノンの一門を ジェノザウラー の口腔内に突き入れ

「——クノキ！」

『フルオート
連続発射』

アサトの意図を読み取り、射撃モードを切り替える。

「全弾もっていけ！」

操縦桿の引き金^{トリガー}を引くと共に、弾倉内の全ての砲弾が ジェノザウラー の口内に飲み込まれていく。

爆発と同時に後方へ飛び、距離を取る ヤミヒメ 。

見れば、さすがに零距离^{ゼロ}での連続発射には耐えられなかったようだ。二連装キャノンの左側の砲身が半ばから破裂していた。

一方の ジェノザウラー は……動きを停止して口内からもくもくと煙を吐き出してはいるものの、頭部自体は健在だった。

「……頑丈だな。だが荷電粒子砲は撃てないだろう——撤退するぞ」
今ならとどめをさせるかもしれないが、無駄な戦闘行為を行うほどアサトは血気盛んではなかった。

一刻も早くこの場を離れようと ジェノザウラー に背を向けた時——

——グオギヤアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアッ！

突然活動を再開した ジェノザウラー が断末魔の叫びにも似た
咆哮を上げ、残った右のワイヤー・アンカーを ヤミヒメ に向け
て射出した。

すでに DFC を待機モードにしていた ヤミヒメ は一瞬反
応が遅れた。

アンカーは ヤミヒメ の右前脚の肩部装甲を掴み、そのまま力任せにワイヤーを巻き戻す。

ジェノザウラーの右眼はすでに光を失っており、左の眼だけに爛々と光を宿していた。

狂気を孕んだ隻眼せきがんで ヤミヒメ を見据えている。

先ほどまで全身から漏れ出ていた紅い光は、
ヤミヒメ 同様消えていた。

踏ん張りきれずに ヤミヒメ は横倒しになり、右側面を地面に引きずらせながら徐々に ジェノザウラー に引き寄せられていく。

「この——乙女の柔肌にッ！」

アサトはキャノンを旋回させ、残った右側の砲身で間近に迫った白い ジェノザウラー の頭部に照準をつけ、薬室に装填済みだった最後の砲弾を発射した。

――！

驚く間こそあれ、避ける距離も――ましてEシールドを展開する余力もない ジェノザウラー は左側頭部に直撃を受け、今度こそ沈黙した。

「……よし、離脱する…… ヤミヒメ、もうひとがんばり頼む」

――ウウウ……ウオオオオオオオオンッ！

力を振り絞り立ち上がった漆黒のオオカミは自分を鼓舞するように一鳴きすると、すでに力を失いながらも肩に組み付いたままのワイヤー・アンカーを忌々しげに払い落とした。

「いい子だ……それじゃあ、今度こそ帰ろう」

主の賛辞に気を良くした ヤミヒメ は、さっきまでの戦闘などなかったかのように意気揚々と駆け出した。

すでに周囲は夕方から夜へと変わろうという時刻になっていた。

アサトがぼんやりと、空に浮かぶ二つの月を見上げていると――

『マスター、街まで時間があります。少しお休みください』

クノキの申し出に、アサトは自分がうとうととしている事に気がついていた。

「……ん。そうさせてもらっわ」

『はい。おつかれさまです、マスター』

聞き慣れた――耳に心地いい、落ち着いた声のアサトを労^{おづ}つ。

「……クノキ」

ふと思いついたように言葉が出た。

『はい』

クノキも自然と応じる。

「……いや、なんでもない」

『……はい、マスター』

つづく

第三話『その日、クスノセ機獣派遣事務所』

『健全な精神は健全な肉体に宿る』という言葉がある。

広くは、身体からだを鍛えれば精神も健康になる——と都合よく解釈され使用されているが、実際は古い詩の一節である。

だがもしこの解釈が真理であるなら、歪いびつな身体を与えられたわたしが、歪こころな精神しか持てないのも道理だろう。

わたしの精神は身体と同様に歪んでいる。

そうでなければ、あなたを好きになるはずがない。

こんな感情はわたしには許されない。

歪な身体と歪な精神。

届かぬ想いと叶わぬ願い。

いや、そんなものは言い訳だ。

そう考えて自分を納得させたいだけなのだ。

だって、わたしの願いは叶うはずがないのだから。

あなたの中には彼女が居て。

そこにわたしが入り込む余地など最初から無い。

いや、それもまた言い訳だ。

ただ自分が傷つくのが怖いだけ。

あなたに拒絶されたら、わたしはもう生きていけないから。

きっと死んでしまいたいくらいに自分が嫌いになるから。

それでもわたしは——あなたが好きです。

この気持ちはもう止められない。

×
×
×

第三話『その日、クスノセ機獣派遣事務所』

都市、ミヤコノ・シティ。

かつては名前の通り『都』が置かれており——東方大陸の政治・経済の中心だったが、約半世紀前の 大戦 による被害を受け、現在はベルタ・シティに遷都されている——名前はその名残である。

多くのヒトで賑わいを見せるシティの中心部から離れた、廃工場跡などの空き地が目立つ、極端に人気の少ない区画にその建物はあった。

クスノセ機獣派遣事務所 —— そう書かれた来客用の入り口の看

板の下には、『ゾイドが入り用のお仕事、お引き受けします』と書かれている。

特に古くも新しくもない、三階立ての一軒家という感じだ。来客用の入り口から見れば何かの事務所に見えなくもない。

その建物の二階の一室にて眠る青年が居た。

やや長めの黒髪と黒い瞳——今は閉じているが——で特に美形という訳ではないが、それなりに整った顔つきをしている。

アサト・タチバナ。

それがこの青年の名前だ。年の頃なら二十代前半。やや痩せ型の体躯と不健康気味の顔色が特徴だが、特に病的といった印象は無い。時刻は昼を回っており、まっとうな人間なら勤務先なり教育機関に出向いている筈だが……起きる様子は見られない。

そこへ——

「アサト？ 入りますよ？」

こんこんとノックの後、反応が無いのを確認して声の主が部屋へ入室してきた。

アサトと同じ黒髪と黒瞳の娘である——といっても二人に血縁関係は無く、東方大陸ではもっとも一般的な組み合わせである。

胸元まである豊かな黒髪は手入れが行き届いており、アサトの無

頓着なそれとは比べるべくもない。美人ではあるが積極的に訴えかける様な派手さは皆無で、しかし気付けば目で追ってしまう様な、控えめで清楚な印象が強い。

「アサト。いい加減に起きないと、またカスミちゃんにダメ人間って言われちゃいますよ?」

そう言いながら黒髪の娘がアサトの身体を揺するも、一向に目を覚ます気配は無い。

「困りましたねえ」

言葉に反して特に困った表情を浮かべるでもなく——むしろ穏やかな微笑のまま——娘はアサトの耳元に顔を近づけ……。

「起きないと……キス、しちやいますよ」

「——ッ!」

官能的な響きすらこもった、囁く様な口調に、アサトの意識は瞬時に覚醒した。

しかし——

——ごん、というにぶい音と共に、覚醒したアサトの意識は額ひたいの鈍痛と共に一時機能を停止した。

「~~~~~おおおお……」

額の痛みに唸りながら視線を右にずらせば、自分と同じように額

を押さえてうずくまる娘の姿があった。

「……………おはよう………所長」

「……………はい……………おはようございます」

額をぶつけた相手を半目で見やるアサトと、涙目になりつつも微笑を浮かべたまま——恐らくこれが地なのだろう——返事を返す『所長』と呼ばれた娘。

娘の名前はハルカ・クスノセ。

クスノセ機獣派遣事務所　の所長にして、そこに所属するアサトの上司である。

「……………たく、性質^{タチ}の悪い冗談はやめると言っただけだ」

「急に跳ね起きるとは思いませんでしたので。それに起きないアサトが悪いんです。照れなくてもいいんですよ？」

「嫌がつてるといふ発想はないのか」

「大丈夫ですよ。ちゃんとお姉さんが教えてあげますから」

安眠を妨げられた恨みを抗議する低血圧不健全男と、それを受け流す微笑の黒髪美人。見た目、年齢不詳のハルカだが、実際アサトより二つ年上なのである。

「なにがお姉さんだ……………」

「あら、なにか言いたい事でもあるんですか？」

「いんや、別に」

不毛な言い争いに飽きたのか、もしくは眠気が完全に取れてしまったのか——恐らくはその両方だろう——観念してベッドを降りるアサト。

「早く着替えて来てくださいね。愛しのお姫様が帰ってきちゃいますよ」

「……そうか、ヤミヒメがオーバーホールから帰ってくるんだっとな」

「そうですよ。自分の考案したプランが実装されて来るっていうんで、カスミちゃんも朝からそわそわしてるんですから」

そう告げて部屋を出ようと扉に手を掛けて、アサトに背を向けたままハルカは思いついたように続けた。

「——アサト。わたしがもし……」

「んー？」

上着を着替えつつ、投げやりに相槌あいづちを返すアサト。

「いえ——すみません、なんでもありません」

思い詰めていた事をごまかす様に普段の調子に戻り、部屋を後にするハルカ。

「……………」

閉じられた扉を見つめて、後を追うべきかしばし黙考してアサトは着替えを再開した。

● ● ●

白い ジエノザウラー との遭遇戦から約一週間。 ヤミヒメ は定期検査の時期でもあり、傷ついた外装の修復やシステム・チェックも兼ねてオーバーホールに出されていた。

通常のオーバーホールだけなら三日もあれば完了するが、今回は新装備の実装と調整も行うため、事務所は事実上、開店休業中である。そうでなくてもアサト・タチバナが規則正しく寝起きする事は稀だが……。

顔を洗い、身だしなみもそこそこに——『しゃんとすればそれなりにいい男なのに』とはハルカの弁である——ダイニング・ルームに行く二人の姿があった。一人はこの事務所の所長——つい今しがたアサトを起こしに来たハルカである。そして彼女とテーブルを挟んだ対面には少女が座っていた。

灰色がかった銀髪に、同じく灰色がかった黒い瞳。東方大陸ではあまり見ない色の組み合わせだが——父親が他大陸の出身らしいが、詳しい事はアサトは聞いていない——小柄な少女にはよく似合って

いた。彼女が先程のアサトとハルカの会話に出ていた『カスミ』だ。

カスミ・シノザキ。

年齢は十六歳だと聞いているが、一見ただけではもつと幼く見える。

ハルカもカスミもかなりの器量良しで『美人』の一語で事足りるが、その雰囲気はまるで正反対だ。二人とも『動』と『静』で言うなら『静』だが、ハルカを太陽に例えるならカスミは月といった処か。

「おはよう、カスミ」

「……お昼過ぎに『おはよう』もない気がします」

あくび混じりのアサトの挨拶ににべもなく応える少女——カスミ。

こちらを振り向いた際に、肩に掛かるか掛からない位の長さのショートボブがさらりと流れる。ただでさえ感情の起伏が少ない上に、やや長めの前髪に隠れて表情はよく判らない。

（……『そわそわ』ねえ）

カスミがここ　クスノセ機獣派遣事務所　に事務員として働くようになってから約半年になるが、この無口な少女の心情はアサトにはいまいち掴みきれない。

「……なんですか」

アサトの無言をどう思ったか、居心地悪そうに身をよじるカスミ。無口というよりは単にコミュニケーションが苦手なだけなのだろう。

「ん、なんでもない。ハルカ、俺もコーヒー頼む」

「はい。ちょっと待ってくださいね」

言うが早いか、キッチン・ルームに向かう事務所の最高責任者。

「あ——ハルカさん、私やりますから」

「いいんですよ。手、痛むでしょう？」

そう言つて立ち上がるうとするカスミを制してコーヒー・メーカーを操作するハルカを横目に見つ——いわゆるシステムキッチンになっている——カスミの手元を見ると、右手の袖口から包帯ガーゼが見えた。

「右手、どうかしたのか？」

「あ……これは、その……」

咄嗟に右手を隠して答えに窮する少女。

「ぼーっとしていて、ヤカンで火傷しちゃったんですよ」

コーヒーを持って現れたハルカは苦笑しながら付け加える。

「いつも冷静なカスミちゃんが珍しいでしょう？」

確かに、少なくともアサトは彼女がぼーっとしている姿を見たことがない。もっとも理由は見当がつくが。

「それだけ気になるってことだろ」

それ以上は突っ込まずに、ハルカから受け取ったコーヒーに角砂糖を一つ二つと投入していくアサト。

「……砂糖、入れすぎです」

五つ目の角砂糖を入れた処でカスミから物言いが入った。その表情はすでに普段の無表情なものに戻っている。

「苦いコーヒーなんぞ飲めるか」

彼女の物言いには取り合わず、更に二つの角砂糖とミルクを入れて掻き混ぜる。相当な甘党である。

「……コーヒーに対する冒流です」

そう言っただけの手元のコーヒーを飲むカスミ。こちらは砂糖もミルクも入れないブラックである。

そんなやり取りをにこにこしながら眺めるハルカはミルクのみという——自称・穏健派である。別に派閥争いをしている訳ではないのだが。

これが クスノセ機獣派遣事務所 の主なメンバーの日常である。

●
●
●

アサトの起床から約一時間。まったくとした空気に電話の呼び出し音が響いた。

「——はい、お電話ありがとうございます。クスノセ機獣派遣事務所、所長のクスノセです」

特に誰が出てても問題はないのだが、事務所にかかって来る電話は十中八九仕事の依頼なので、電話にはハル力が出るのが定例となっている。

「はい、ではお待ちしています」

電話の受話器を置き、一同——と言っても二人だが——を振り返る所長。

「ムラサメ・ファクトリーからです。間もなくこちらに到着するそうですよ」

ムラサメ・ファクトリーはアサト達が**ひいき**にしているメーカーのひとつで、ゾイドのメンテナンスから関連部品の製造・組み立てまで一手に請け負う大手企業だ。惑星Ziを二分する ZOITEC社のグループ企業でもある。

「そんじゃ、 ヤミヒメ を迎えに行こうか」

二杯目のコーヒーの残りを飲み干し、腰を上げたアサトにハルカとカスミが続く。

一同が目指すのは事務所兼住居である本部棟——今までアサト達が居た建物——と同じ敷地内にある格納庫、通称『ハンガー』である。

ちよつとした体育館ほどの規模で、中型ゾイドを格納するには十分すぎる広さを誇っている。ついでに言えば人気の少ない——人通りが少ないため人目に付きにくい——場所に事務所を構えているのも、このハンガーがあるためだ。

アサトは手馴れた手つきでハンガー入り口のパネルを操作し、搬入用シャッターを開く。内部には天井を移動するタイプのクレーンや重量物を運ぶためのキャリアー、所々にはジャンク・パーツや工具の類が整理されて置かれている。

「 ヤミヒメ が居ないだけで、ずいぶんと寂しくなるもんだな」

『そこにあるべきものが無い』——そんな空気がハンガーの中には漂っていた。

「そうですねえ。何かを『格納』するからこそその格納庫ですから」

相槌をうちながら、なぜかアサトの背後にしな垂れかかるハルカ。

「その寂しい心のスキマ、わたしが埋めて差し上げましょうか？」

背後からアサトの首に両腕を回し、抱きつく様にして耳元でささやくハルカ。普通の男なら思わずどきっとしそうなシチュエーションだが――

「結構だ……くつつくな、鬱陶しい」

焦るでもなく、しかし邪険にするでもなく淡々と言い放つアサト。

「つれないですねえ」

「うつさい」

そんなやり取りを同じく呆れた様子で見守る人物がひとり――当然、同行してきたカスミである。

ここ――クスノセ機獣派遣事務所 に来て約半年。最初は驚いたものだが、今ではこの光景も見慣れたものである。

（ハルカさんは明らかにアサトさんに好意をもっている。アサトさんもそれは気付いているはず。だけど二人は恋人という訳じゃない）

ここに来てすぐの頃、ハルカの口からそれは聞かされている。

（ただの所長と従業員……それだけじゃない。友達というのもし少し違う気がする。男と女だからって恋愛関係しかないとは思わないけど……）

人生経験――こと、色恋沙汰に関して言えば絶対的に経験値が足りないカスミは、この二人の関係性がいまいち掴みきれずにいた。

そこへ――

「お？ 来たか」

ハルカを引き剥がしつつ振り返るアサトの向く方向に目を向ければ、トレーラーが一台向かってくるのが見えた。連絡のあったムラサメ・ファクトリーのものだ。

ハンガー内に停車したトレーラーから降車してきた職員の書類にハルカがサインをすると、アサトは早速トレーラーの貨物庫を開けてもらう。そこには一週間^あぶりに逢う愛機が居た。

漆黒のカラーリングが施されたオオカミのシルエットを持つゾイド――ヤミヒメだ。

通常のコマンドウルフ・タイプと仕様が違っているのは色と、スモークデイスチャージャーの代わりに両腰に張り出している一対のブレード状の突起――ハイブリッド・スラスター・バインダーの存在だろう。仔細に観察すれば右首のプレート状の飾りや、左首の傷も確認できる。

アサトがコクピットのある頭部に近づくと、ヤミヒメは主人に頭を撫でてもらうとする犬のように姿勢を低くし、顔をすり寄せてきた。

「――おかえり、ヤミヒメ」

そう言いながら愛機の装甲を撫でてやると、ヤミヒメは気持ちよさ気に喉を鳴らしてキャノピーを開いた。

アサトがコクピットに搭乗すると、それを認識したようにモニターを始めとしたシステムが起動を始めた。

『搭乗者のバイタル・サインを確認。全システム正常に起動——おはようございます、マスター』

スピーカーから聴こえてくる、聴き慣れた女性を思わせる機械音^{マシン・ヴォイス}にアサトは優しく返事を返す。

「ああ、おはようクノキ」

クノキ——それは ヤミヒメ に搭載されているサポート・ユニットであり、有り体に言えば人工知能のようなものである。

「もう昼過ぎだけだな」

『大方、貴方がカスミに言われたんじゃないですか？』

ここに技術者の類が居れば驚愕しただろう。ここまで柔軟なコミュニケーションが可能で人工知能などあるはずがないからだ。

「ご明察。さ——外に出ようか」

『了解』

機体を貨物庫から出すとその全容がようやく把握できた。

先程の特徴以外にも一般的な コマンドウルフ との差異が確認できる——背部の武装だ。

しかも左はライフル、右は大振りの『剣』がアタッチメントを介して左右非対称のシルエットを構成している。

「どうだ、感想は？」

ヤミヒメのキャノピーを開け、無心に——いや、感極まって声が出ないのだろう——愛機を見上げている少女に、アサトは声を掛けた。

「——あ、はい……すごくいいと思います……」

カスミは上手く言葉がまとまらず、思ったままを口にした。

「それは結構。それじゃあ試してみるか」

カスミの感想を確認すると再びキャノピーを閉じ、アサトはハンガーの外へ愛機を進ませた。

● ● ●

新装備のテストは良好だった。

射撃も接近戦もそつなくこなせる汎用性にアサトは満足し、ヤミヒメは近接戦闘用の試作兵器——以前の戦闘で破損したカヅチを改修したもの——カグツチがいたく気に入ったようで、あとはアサトに合わせて微調整を済ませるだけでテストは完了した。

時刻は夜。クスノセ機獣派遣事務所のメンバーは夕食を兼ねたちよつとした宴会状態だった。

「それでは――ヤミヒメの全快とカスミちゃんのプランの成功を祝して乾杯ーい！」

ハルカが乾杯の音頭を取り、宴が開始された。

そもそも、ヤミヒメの新装備開発にあたって決め手となつたのがカスミのアイデアである。ムラサメ・ファクトリーから提供されるカグヅチを、如何に機体のバランスを崩すことなく装備できるか。

出力はDFCを備えているため問題ではなかったが、問題は単純にどう配置し、飛び道具はどうするかだった。

そこへ前回の戦闘で破損したAZ二連装二五〇ミリ・ロング・レンジ・キャノンを改修した『二五〇ミリ改』と、これらをヤミヒメ本体に設置するためのアタッチメントの設計図をカスミが提出したのだった。

「レッドホーン等の重量級ならまだしも、高速戦闘をするゾイドに左右非対称の装備とは考えませんでしたねえ」

「ん、左右の武装で重心が変わるから、普通はやらないわな。まさに『コロンブスのエッグ・スタンド』か」

「……それ、立ちやすいです」

など他愛も無い会話をする年長者二人と未成年が一人。ちなみにアルコールはない。道徳を重んじている訳ではないが、カスミには背伸びをする趣味も無く、アサトは全く酒が飲めない。

そんな訳で唯一まともに酒が飲めるハルカは自重し、ノンアルコールのビールを飲んでいた。

ノンアルコールなので酔うはずは無いのだが……。

「——んふふ、あ・さ・とお」

料理も食べ終わり、そろそろ片付けを始めようとした頃……異変は起こった。酔う筈の無い飲み物で酔っ払っている黒髪美人がひとり——居た。

「ねえ、わたしのことお、きらいですかあ？　ぬふふ、ねえ、あさ」と

「離れる——酔っ払い」

押し倒す様に迫ってくるハルカをなんとか防ぎながらアサトが言った。

「だれがあ、よっぱらってるんですかあ？　ごまかさないでください」

普段の清楚な装いからは想像もつかないハルカの豹変振りに、カスミは言葉を失くしていた。ハルカの顔はほのかに朱色に染まり、とろんとさせた瞳はわずかに潤んでいる。

「……よくまあ、ノンアルコールでこうも見事に酔っ払えるものだ」

「え、これ……酔ってるんですか？」

正面から首に手を回して迫ってくるハルカを抑えるアサトと、それを見て驚愕するカスミ。

「酒は飲めるが弱いんだよ、こいつは。……ハルカ、しっかりしろ」

「……わたしじゃ、ダメですかあ？ ……んう」

アサトは、猫のように自分の胸元に顔をすり寄せ、そのまま寝入ってしまったハルカを抱き上げた。

「部屋に送っていくから、片付けは明日にしてもう休んでいいぞ」

「……わかりました。あ——お水持っていきます」

「ん、頼む」

• • •

本部棟の二階——たった今まで食事をしていたダイニング・ルームとアサトの個室も同じフロアにある——のハルカの個室に辿り着く。扉を開け、ベッドに部屋の主を寝かせるアサト。

住人の性格を表したような部屋だ。雑多な感じはなく、それでいて殺風景でもない。調度品には白を基調としたものが多く、清潔感がある。

壁のボードにはたくさんの写真が貼っており、アサトと出会ったばかりの頃のものもある。迷惑そうなアサトの腕に、自分の腕を絡ませて笑っているハルカの姿は本当に楽しそうだ。そんな写真を見つけて苦笑し、部屋を出ようとしたが、何かがアサトのシャツの裾すそを掴んでいるのに気がついた。

ハルカの細い腕がアサトを行かせまいと裾を握っていた。

「何だ、目が覚めたのか？」

アサトが振り返る。

一方、ハルカは俯うつむいていて顔が見えない。

「——きです……」

「あ？」

呟く様なハルカの声がアサトは聞き取れなかった。

「好きです！ あなたのことが……！」

「……………」

アサトは驚かない。そんなことはとっくに知っているから。

「——わたしが男だから（……）ですか？」

顔を伏せたまま、かけられたシーツの間から腕だけを出してアサトを引き止めるハルカ。

「ハルカ——」

「——わかってるんです。そんな事じゃないんだって。けど、わたしまだ酔ってるみたいで……そんな風に思っちゃうんです」

アサトの言葉を遮って続ける。

「……わたしじゃ、クノキさんの代わりになれませんか？」

言葉がわずかに震えている。表情は見えないが、先程のような妖艶な響きは無い。真摯^{しんじ}な、それでいて拒絶される事を恐れている口調だ。

——そう、ハルカ・クスノセは男である。

先天的なホルモン・バランスの異常で女性的な外見をしているが、生物学的には男性なのである。

しかし精神は肉体に引っぱられるものなのか、物心つくころには彼女——正確には『彼』と言うべきか——は女性として振る舞うよ

うになり、それ故か自分・他人を問わず『男女』というものの区別がハルカには希薄になっていた。

そういった意味では彼女の『好き』というのは真実の愛と^{アガペー}呼べるかもしれない。

「……………」

アサトは無言——いや、どう応えていいか判らなかった。

自分は誰かに好かれるような人間ではない。

自分にはそんな資格が無い。

そう思っていたから。

……………。

沈黙だけが場を支配する。

やがてハルカがゆっくりと口を開いた。

「……すみません、困らせてしまいましたね。もう落ち着きましたから——カスミちゃんも、驚いたでしょう?」

いつから居たのか、開け放したままのドアの入り口に水を運んできたカスミが立っていた。

「……あ、あの……驚きました、けど、その……」

単純に動転しているのだろう。しどろもどろになっているが、その表情に嫌悪や奇異の色は無いのに安心してアサトが助け舟を出す。

「——水、持ってきてくれたんだろ？」

「……あ、はいっ」

我に返ってトレーに乗せたコップを手渡すカスミ。

「ありがとうございます。本当にもう落ち着きました。いけませんね、お酒は自重しないと」

そう言っ水の水の礼を言うハルカに――

「……私は、そんな事でハルカさんの事を変な目で見たり、嫌いになったりしませんから」

カスミの言葉に不意打ちを喰らったように一瞬ぽかんとした後、そつと彼女の頭をなでるハルカと恥ずかしげに顔を伏せるカスミ。

「ありがとうございます。カスミちゃん」

こうして見ると歳の離れた姉妹に見える。

「そんじゃあ、もう行くぞ。おやすみ」

「おやすみない、ハルカさん」

アサトに続いて、名残惜しげにカスミも部屋を出ようとする。

「——アサト」

ハルカがアサトへ呼びかけた。

「ん？」

「答え、待っててもいいですか？」

普段と変わらぬ微笑で。

「好きでいても——いいですか……？」

期待はしていませんから——そんな風にも見える表情で。

「……好きにしろ」

少し困った様に苦笑で返し、アサトは扉を閉めた。

「——驚いただろう？」

ハルカの部屋を出たアサトは一息つくと、カスミに視線を向ける。

「……さっき言ったとおりです。驚きましたけど、それだけです。他人から拒絶される辛さは、少しは解かるつもりです」

そう答えた少女の顔はいつもどおりの無表情で。

「……そうか」

やはりアサトには少女が何を思っているかは判らなかった。

だが、無表情の中に僅かに優しいものが含まれているようにも感じた。

「そうか」

だからもう一度だけそう呟いた。

つづく

第四話『残酷でただ美しい青空』

雨は嫌い。

憂鬱になるから。

大地を潤す雨も私の心を癒してはくれない。

晴れの日も嫌い。

無遠慮な太陽の日差しが私を照らすから。

雲ひとつない青空は陰気な私の心をあざ笑っているように感じる。

人間も嫌い。

他人は私に優しくないから。

ヒトの中に居ると自分が独りなのを実感する。

私は嫌いなものが多い。

けど一番嫌いなのは私自身だ。

この世界に順応できない自分が嫌いだ。

だからこの世界も嫌いだ。

このどうしようもなく残酷で、

どうしようなく美しい世界が、

私は大嫌いだ――

×

×

×

第四話『残酷でただ美しい青空』

感応者^{かんのうしや}。

それはゾイドと心を通わせる事が出来る者達の総称だ。

機体に触れる事で——もしくは一定の距離まで近づくことでゾイドの心を感じ取る事が出来る。この能力の高い者はゾイドの感情の変化だけでなく、より具体的なメッセージを『言語』として受け取る事も出来る。

例えば彼女のように——

「……左前脚の付け根……それから左後脚の第二関節を見て欲しいそうです」

格納庫然とした空間に黒いゾイドが一体鎮座^{ちんざ}していた。オオカミ型のフォルムを持つその機体は コマンドウルフ と呼ばれるタイプだ。

その機体に右手を触れ、静かに目を閉じる少女の姿があった。

年齢は十五、六歳。灰色がかった銀色の髪と、同じく灰色がかった^{アッシュブロード}

た黒い瞳。

抜けるような白い肌と相まって全体的に色素の薄い印象がある少女だ。

カスミ・シノザキ。

ここ クスノセ機獣派遣事務所 の所員であり、見習いのエンジニアでもある。

「どちらも、恐らくアクチュエーターの金属疲労だと思います」

抑揚に乏しい声でそう告げる顔には、声と同じく、何の表情も刻まれていない。

面識のない者が見れば機嫌が悪いのかと思うかもしれないが、これが彼女の地である。

綺麗な少女だが、まず第一に周りを寄せ付けないような硬質な雰囲気がある。

「どっちも左か、やっぱり癖が出てんのかね」

カスミの発言に応じる声は黒いゾイドの腹の下から聞こえた。

どこか気怠^{けたる}いような、明らかに元気とか覇気という言葉からは縁遠い男の声だ。

声の主は提示された箇所をざっと確認してカスミの横に並んだ。

アサト・タチバナ。

若干伸び気味の黒い髪と黒い瞳。

やや痩せ気味の体躯と色白の肌が不健康そうな雰囲気醸し出している。

よく見ればそれなりに整った顔をしているのだが、年齢に不釣合いな、何かに疲れたような表情が印象的な青年だ。

「癖なんですか？」

隣に並んだアサトが工具箱を開くのを眺めながらカスミは尋ねた。

「ん、前々からな。 ヤミヒメ は左足で踏ん張る癖があるんだよ」

カスミは改めて ヤミヒメ と呼ばれた黒いゾイドを見上げる。

漆黒に彩られたカスタム・タイプの コマンドウルフ。

正式名称 コマンドウルフDFC。

愛称は ヤミヒメ。

闇色に染まった姫——故に ヤミヒメ 闇姫 である。

通常のものとは違うのは色だけでない。スモーク・ディスチャージヤーの代わりに両腰にはハイブリッド・スラスター・バインダーが装備され、背部にはライフルが一丁と試作型の『剣』がそれぞれ備わっている。

「……………」

綺麗だと思う。 ヤミヒメ を見る度にカスミは胸の鼓動が高鳴るのを感じる。

加えて、現在の ヤミヒメ の装備のアイデア——アタッチメントのみだが——が自分の考案したものということもあり、その感慨もひとしおだ。 手前味噌なのは判っている。 それでもカスミは特別な気持ちで一杯だった。

——ちいん……。

「——？」

金属製の部品が何かが床に落ちる音でカスミは我に返った。

音の発信源を探して視線を動かすと工具棚とコンテナの間の、ちよつどヒトが一人通れそうな隙間に視線が釘付けになる。

「……………」

隙間は苦手だ。どうしても嫌な事を思い出してしまう。

カスミが クスノセ機獣^{（メカビースト）}派遣事務所 に来るきっかけになった些細な事件の事を……。

●
●
●

カスミは学校で浮いていた。

最初はイジメと言うほど具体的な嫌がらせを日常的に受けていた訳ではないが、学校のクラスメイトとは折り合いが悪く、教室に居ても居心地が悪かった。

ヒトは社会性の動物だ。群れを成し、助け合わなければ生きていけない。

なのにヒトが三人以上集まれば争いが起きる。

必ずはじき出され、犠牲に——『生贄』になる者が出る。

ヒトの社会は必ずしもそうだ。

誰もが他人を疑っている。それはヒトが嘘をつくようになってから——いや、知恵を得た瞬間から他人に対する恐怖は始まったのかもしれない。

誰が『敵』になるか判らない。ひょっとしたら自分が『敵』にされるかもしれない。なら自分たちで『敵』をでっちあげればいい。

理由など何でもいい。そんなものは口実だ。

『生贄』に供される者が出る事で安心する。少なくとも自分がその位置に置かれる事はなくなるから。

そういった意味では『生贄』とは社会を形成する上での必要悪なのかもしれない。

だが、だからと言ってその立場に納得など出来るはずがない。

初めはただの隔絶だった。

無口でヒト付き合いの苦手だったカスミは当然、積極的に友人を作る事をしなかったし、それでも当面は何の問題もなかった。

しかしカスミは綺麗な女の子だった。いつそ美少女と呼んでも誰も文句などつけられないくらいの美貌を持っていた。

それは同性からは憧憬どうけいの対象となり、異性からは好意の対象となった。だが、それも最初だけだった。

学年を問わずカスミに交際を申し込んだ男子生徒は全て振られ、それを知った女生徒は『高慢な女だ』と反感を強め、振られた男子生徒の中には腹いせにカスミに嫌がらせをする者も出てきた。

教師陣も実質これを黙認し、和解の努力など端はなからする積もりも無かったカスミはハイスクールを入学三ヶ月目にして不登校となった。

何か目標があった訳でもなく、ただ同居している叔母おばの建前で入学しただけだ。学校に行かない事に不満はなかったし、自暴自棄に

なりかけていた事もあり、不安の類もカスミには無かった。

だから街を歩いていて見知らぬ三人組に路地裏に引っ張り込まれた時も、特に何も感じなかった。

「よお、久しぶりだな」

両脇を連れの男二人に羽交い絞めにされると、正面の男に話しかけられた。どうやらカスミを知っているようだが、当のカスミには見覚えはなかった。

「なんだよ、つねねえなあ？ 俺達の事なんて覚えてませんってか」

『へへへっ』

正面の男に続いて、左右の男達も下卑た笑い声をあげた。

「……………」

カスミは無言で正面の男を見た。その表情には恐れも怒りも浮かんでおらず、ただ無表情に男を見ていた。その態度が気に入らなかったのか、男は上着のポケットから折りたたみ式のナイフを取り出した。

「どうした？ 怖くて声もでないか？ ああッ!？」

「———!」

男がナイフを振り下ろすと、カスミのシャツは下着ごと裂かれ、彼女の胸元が露になった。

鎖骨から腹部に掛けての艶かしい曲線が、処女雪を思わせる白い肌と相まって見るものを惹きつける。

決して豊満ではないが、成長途上故の侵し難い神聖さと、それを汚す背徳感を思うと、男は背筋に興奮が走るのを抑えられなかった。

「なあ、さすがにそれはまずいんじゃないか？」

カスミを押さえている片方の男が気まずそうに言った。

「なにびびってんだよ。どうせこいつは何も言えやしない」

「そうだな、それにここまできて止めるのもなあ」

三人目の男も興奮気味に正面の男に同意する。

「……………」

カスミはそれでも無言を通した。

「これでもだんまりか。まあいい、すぐに『ああっ、イイ』って言わせてやるよ」

そういつて男がカスミのスカートに手を伸ばした時――

「――あら。そんなにすごいんなら、お姉さんの相手をしてもらいましょうか？」

「ぐえッ！」

「かはッ！」

場違いに穏やかな声の介入と同時に、カスミを羽交い絞めにしていた男二人が前のめりに倒れてビクビクと痙攣けいれんしている。

「いけませんねえ。女の子には優しくしろって親御さんに教わらなかったんでしょうか？——あら？」

カスミの背後から現れたのは穏やかな微笑を浮かべた妙齡の娘だった。何か武器を使った形跡はない。カスミを背に庇うように前に出ると男達の容姿に何か気が付いたようだ。

「な、なんなんだよ？ あんたは！？」

一瞬で仲間が倒され、状況が判らず慌てた男はナイフを娘に向けて怒鳴った。

すると――

「――！」

「……誰でもいい。取り合えずナイフを捨てろ」

ナイフを持った男が後頭部に金属の筒状のものを押し付けられたのと、その背後から声が聞こえたのは同時だった。

「ひいつ！」

拳銃――そう確信した男はナイフを取り落とし、要求もしていな

いの両手を挙げた。

「撃っちゃダメですよ、アサト。この子達、まだ未成年みたいですから」

自分が倒した男二人の顔を確認しながら娘が声を掛けると、アサトと呼ばれた銃を持った人物も、両手を挙げた男の容姿を確認する。どう見ても二十歳は超えてないだろう少年だ。

「……倒れてる仲間を連れてさっさと行け。それから、今後はこの辺りをうろつかない方がいい（・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・）」

アサトが銃を仕舞いつつそう告げると、倒れた仲間を引きずるようにして少年達は慌てて路地裏を去っていった。

「やれやれ」

ため息をついて少年達を見送った男——アサトが連れであろう娘に目を向けると、彼女はカスミに声を掛けていた。

「もう大丈夫ですよ。怪我^{けが}はしてませんか？」

妙齢の女性が優しく問いかけてくる。

（……もう大丈夫？）

カスミは掛けられた言葉を頭の中で繰り返す。するとようやく事態を呑み込めたのだろう。今更のように体が振るえ、その場に座り込んでしまった。

「そっちはどうだ、ハルカ？」

「気が張っていたんでしょ。緊張が解けて立っていられなくなっ
たみたいです」

アサトの呼びかけにハルカと呼ばれた娘が応える。

「……私……あのまま……」

「大丈夫……もう大丈夫ですよ」

震えるカスミをそっと抱きしめると、ハルカはなだめる様に優しく声を掛けた。

• • •

「——ミちゃん、カスミちゃん？」

ようやく自分が呼ばれている事に気付くと、カスミの正面に、つい今しがた思い描いていた娘が居た。

ハルカ・クスノセ。

カスミが住み込みで働いているクスノセ機獣派遣事務所の所長であり、カスミと同じ所員であるアサトの上司だ。

つややかな長い黒髪と黒い瞳。常に微笑を浮かべた穏やかな表情が特徴的な美人だが、彼女には大きな秘密があった。それは彼女が本当は男であるという事。

殊更^{けんてん}喧伝している訳ではないので、彼女の正体が男である事を知っている者は限られるが、生物学的には正真正銘男性である。

この事実はカスミも先日知ったばかりだが、それ以降もハルカとの関係に変化は見られず、隠し事が一つ無くなった分、より親密になれたとカスミは考えている。

「——あ、はい！　なんですか」

慌てて返事をするカスミの視線の先に気付いて、ハルカが気遣わしげな視線を向けてくる。

「……大丈夫、もう大丈夫ですから」

そう言って初めて出会った時のようにカスミを抱きしめるハルカ。

泣きたくなった。あの時の事を思い出すからではなく、こうして自分を気遣ってくれるのが、ただ嬉しくて……。

•
•
•

今思えば、先程の少年達にわずかに見覚えがあつた。どれも学校でカスミに交際を申し込んで振られた男子生徒だ。

そんなことを考えていると自分を助けてくれた娘——ハルカが声を掛けてきた。

「もう落ち着きました？」

後になって知った事だが、彼女はある種の格闘技の経験者らしい。そんな風にはまるで見えない穏やかな微笑を浮かべてハルカが訊いてくる。

場所は街の大通りに面したカフェ・テラス。四人掛のテーブルに空席が一つ。カスミから時計回りにハルカともう一人——アサトと言うらしい青年が座ってメニューを眺めている。

ついでに言うと、今カスミが羽織っているジャケットは彼の物だ。カスミが穿いているスカートには合わないが、破られたシャツのまま歩く訳にもいくまい。

「……はい、もう大丈夫です。ありがとうございます、助けて頂いて」

精一杯笑顔を取り繕ったつもりだが、出来ていたかは自信がない。ここの処笑顔をつくった記憶がない。

そんなカスミの不器用な笑顔に気を悪くした様子もなく、ハルカは別の話題を振って来た。

「食欲はありますか？ 食べられるなら食べた方がいいですよ、じ

やないと、こんな不健康な大人になっちゃいますから」

そう言われて話を振られたのはカスミの正面の青年だ。

男としてはやや伸ばし気味の黒髪と黒い瞳。覇気だとか生氣と言った言葉とは真逆に位置する場所にいるかのような、気怠げな雰囲気をもっている。

「大きなお世話だ。お前も人のこと言えた義理か？」

「はて、何の事でしょう？」

とぼけたような調子のハルカには取り合わず、ウェイトレスの女性に注文をするアサト。

「クラブサンドのセットを三つ。コーヒー二つに——君はコーヒーと紅茶どっちがいい？」

『君』と言つのが自分だと気付くのに数秒を要したカスミは慌てて返事をする。

「——え、あの、私は……」

「いいんですよ、遠慮なくて。ちなみにわたしのオススメはコーヒーです」

「あ……じゃあ、コーヒーで」

ハルカの笑顔に^お圧される形で二者択一する。

「ん、じゃあコーヒー三つで」

「かしこまりました。クラブサンドのセットを三つ、お飲み物はコーヒーですね」

注文を確認すると一礼して厨房へ下がるウェイトレスを見ながら

「可愛い制服ですねえ、目の保養になります。日によっては『猫耳デイ』というのもあるそうですよ」

「なんだそれ？」

ハルカの発言に適当に相槌あいづちを打つアサト。

「文字通り猫耳をつけて接客するそうですよ。『いらっしやいませにゃん』と言った風に」

「恐るべし、しのぎを削るサービス産業か」

猫のポーズをとるハルカとは対照的に、興味なさげに返事を返すアサト。

自分を置いて他愛のない会話をする二人を『この人達は何なのだろう』とカスミが思案を巡らせていると、注文したメニューがテーブルを占拠した。鶏肉やベーコンやチーズ、野菜などをはさんだクラブサンドにホットコーヒーがそれぞれ三つずつ。

「さて、いただきますでしょうか」

「ん」

「……あ、いただきます……」

どうするべきかカスミが二人の動きを見張っていると、アサトは
備え付けの角砂糖を次々とコーヒーに投入した……七つも。

「……………」

「彼、甘党なんですよ」

言葉を失ったカスミにハルカが解説した。

「苦いコーヒーなんぞ飲めるか」

さらに備え付けのミルクも入れてかき混ぜると、満足げにコーヒ
ーをすするアサト。

一言いつべきか逡巡して、断念したカスミはなにも入れずブラッ
クで一口飲むと――

「――美味しい……」

思わず声に出してしまった。

「でしょう？ ここのコーヒーはこの辺りでも美味しいと評判なん
ですよ」

ミルクのみを入れてコーヒーをかき混ぜるハルカが微笑を浮かべ
て言ってくる。

「あなた、コーヒーには一家言いっかげんある方ですか？」

『あなた』と言われて、まだ名前も名乗っていない事にカスミは氣付いた。

「……あの、カスミ・シノザキと言います。コーヒーはブラック派です……」

「ああ、いけませんね。名前も言ってますでした。わたしはハルカ——ハルカ・クスノセと言います。コーヒーはミルクのみ。で、甘党の彼がアサト——アサト・タチバナです」

「——ん？ よろしく」

ハルカの紹介にクラブサンドを咀嚼そしゃくしながら応えるアサト。よく見ると皿の上にはクラブサンドから抜かれた野菜が載っている。

（野菜、嫌いなのかな？）

無作法な態度の筈だが、彼がやると不思議と愛嬌があるとカスミは思った。

●
●
●

「ハルカ、昼食は……。どうした？」

ヤミヒメの陰からアサトが出ると、うら若い娘が二人、抱擁ほうようし合っている場面に遭遇した。

「なんでもありませんよ。ちょっとしたスキンシップといった処で
しょうか？」

「……はい。なんでもありません」

カスミの目元が赤いのが気になったが、当人同士が何でもないというなら何でもないのだろう。

「そうか？ いや——天気もいいし、昼食はそこで食おうかと」

言って格納庫ハンガー入り口の近くに設置されたテーブルを指す。

「いいですね。ではそうしましょうか」

そう言つとハルカは食事の用意のためハンガーを後にした。

•
•
•

カフェ・テラスで食事をしながらカスミ達は小一時間ほどの時を過なごした。ハルカとアサトがゾイドに関する仕事を生業なりわいにしている事。カスミ自身の事。

自分の事を話すのは苦手だったが、不思議と出会ったばかりの相手とは思えない程、カスミは素直に自分の事が話せた。

カスミの話をハルカは終始笑顔で、アサトは聞くとともにしに無言で聞いてくれた。

そして――

遅い昼食を終えると一同はゾイドの整備工場に居た。

ゾイドに興味があるというカスミは二人が向かうという工場へ同行する事となったのだ。

大型ゾイドでも十機以上は格納できそうな広い整備場には武装と装甲を外された ガンスナイパー や整備のため脚部を丸ごと外された ブラストルタイガー、いくつもの戦場を駆け抜けたであろう年季を感じさせる レッドホーン などがあった。

工場の整備員の後続き、カスミ達が目的のスペースに着くと、漆黒のカラーリングを施されオオカミ型のゾイドが居た。

コマンドウルフ だ。

「これがアサトの麗しの姫君―― ヤミヒメ です」

ハルカの紹介を受け、カスミは黒い機体を見上げた。

「――綺麗……」

カスミは感じたままを言葉にした。

それは見た目だけではなく、そう思わせる高潔さがこの機体にはあつたからだ。

「気に入ってもらえて何よりだ。しかし、『綺麗』——か」

カスミの隣に立ったアサトは彼女と同じように ヤミヒメ を見上げて言った。

「……やはりおかしいでしょうか。女がゾイドに対して綺麗と言うのは」

迂闊^{うかつ}なことを言ってしまったかと、カスミが少し後悔しながら訊ねると、

「いや、前に同じ感想を言った奴がいたなと思ってね」

そう言つとアサトは正面を向いたまま優しげに表情を崩した。

(……こんな顔もするんだ)

それはカスミが今日初めて見る、アサトの無表情以外の顔だった。

「——ん？」

暫く^{しばしば} ヤミヒメ を見上げているとアサトが何かに気付いた。

「どうかしました？」

「いや、なんか不快そうにしてるな——どうした？」

アサトが一步前に出て ヤミヒメ に近づく。

「——左脚に何かあるのか？」

無論ゾイドが人の言葉を話す訳もなく、 ヤミヒメ は低くうなり声を上げたただけだ。

左脚——外から見る分には前脚も後脚も異常は見られない。

「……タチバナさん、ちょっといいですか？」

「ん？」

カスミはアサトに断ると、 ヤミヒメ の機体に手を触れて目をそっと閉じた。アサトとハルカ、それに整備員が不思議そうにその様子^{うかが}を窺う。

「……左後脚の冷却タンク……」

目を開けると、カスミは自分が口にした部位を見た。

「ふむ。ちょっと開けて見て貰えます？」

アサトが催促すると整備員は今ひとつ納得できないような表情で脚部のメンテナンス・ハッチを開くと、何か液体が滴^{したた}り落ちてきた。

「うわ、冷却液のタンクが液漏れを起こしてますね。すみません、ここは新人がチェックした筈なんです……すぐに取り替えますんで」

整備員は慌ててその場を離れるが、アサト達の視線はカスミに集中したままだった。

「……シノザキさんだっけ、君はゾイドの心が判るんだな」

その言葉は疑問形ではなく、事実を確認するような口調だった。

「……はい」

実際、事実だった。物心ついた頃にはゾイドの心の声が聞こえていた。

しかし自分にしかその声は聞こえていないらしく、周りの子供には嘘つきと呼ばれ、大人達も誰も相手にしてくれなかった。

唯一信じてくれた当時は健在だった母親も、それはカスミだけに聞こえる声だから人には言っではいけないと言われた。その母も二年前に他界してしまった。

思えば、自分が人間不信になったのもこの能力のためだったかもしれない。今となってはどうでもいい事だが……。

「そうか、なら君は 感応者 かもしれない」

驚いた事にこの青年はカスミの言う事を笑うどころか、聞きなれない呼称で自分を呼んだ。

「—— 感応者 ？」

「ゾイドと心を通わせる事が出来る人間をそう呼ぶ。人によって能力の差はあるが……君の力はたぶん俺より強いだろう」

「……………」

アサトの言葉に、不思議な感情がカスミの心に溢れた。

——嬉しい。久しく感じる事のなかった感情。どんな理由でもいい、評価された事に対する喜びを感じた。

そんなカスミを見て、ハル力は名案を思いついたように口を開いた。

「カスミちゃん、私の事務所で働きませんか？」

「…………唐突だな」

呆れ顔のアサトとは対照的に満面の笑みを浮かべて彼女は続ける。

「『思い立ったが吉日』と言いますし、これはお得な買い物かもしれませんよ？」

「にしても、本人の前で言うかね」

「どうですかカスミちゃん？」

思考がまとまらなかった。自分が必要とされている——その実感が沸かなかった。

誰にも必要とされず、自分は必要のない人間だとずっと思ってい

たから……。

「——と言ってるが、どうする？」

歓迎するという訳でもないが、迷惑でもないといった様子でアサトが訊ねてきた。

（私は……）

カスミは思った。

この人達なら自分を変えてくれるかもしれない。

自分は変われるかもしれない。

だったら——

「……………はい」

その日からカスミの日常は変わった。

●
●
●

ハンガーを後にしたハルカの背中を見送って、カスミはひとつの

疑問を口にした。

「……あの、感応者 って——」

「ん？」

床に落ちていたボルトを拾いながら応じるアサト。

「私達的能力って、何なんでしょう？」

「さあな。定義も曖昧だし、科学的に立証できない。ただ、昔からゾイドと会話するようにコミュニケーションを取れたゾイド乗りの記録は多い。もっと昔は当たり前にあった能力なのかもしれない」

アサトは淡々と事実を述べる。

「俺に言えるのは、君が俺より優れた 感応者 だという事だけだ。俺が心を通わせられたのは ヤミヒメ と……」

曖昧に言葉を切るアサト。

「？」

「——この力が嫌いかな？」

話題が変わったのか、それとも延長線上の話なのか判断しかねてカスミは言葉を濁した。

「……是非はありません。ただ、同じ人間とすら解かり合えないのについて思う事があるんです」

「確かに。 感応者 には社会不適應者が多いらしい——俺やカスミみたいな」

アサトは皮肉げに笑う。

「ただ、 感応者 だったから今こうしている。 過去はどうあれ、俺は今の生活にそれなりに満足してるのかもしれない」

「……私は——」

どうだろう。 昔は確かにこんな力無ければいいと思っていたけど、今は？

「二人とも、 食事の用意が出来ましたよー」

ハンガーの入り口に設けられたテーブル・セットからハルカの声が聞こえた。

「ま——すぐに答えが出るものでもないし、答えなんか無いかもしれない。 なら、結果的に良かったと思えばいいさ」

カスミを一瞥してアサトはそう宣^{のたま}うと、 食事^{いちべつ}にありつくべくハンガーを出た。

（……結果的に良かったと思えば——か）

考えても仕方がない。

今すぐに答えを出さないといけない訳でもない。

なら結果的に良かったと思えばいい。

少なくとも『今』は幸せだ——そう思える。

「本当にいいお天気ですねえ」

雲ひとつない青空を見上げて、ハルカが気持ちよさそうに言った。

昔は青空が——この世界が嫌いだった……けど、今は——

「……そうですね」

今はこの青空も綺麗だと思える。

この残酷で、ただ美しい青空が。

つづく

第五話『オーバードーズ（前編）』

初めて自分の手首を切ったのはいくつの頃だっただろうか。

もうずっと昔の事の様で覚えていない。

リストカット。

自傷行為。

水を張ったバスタブに左手を入れ、カッターナイフで自分の手首を切った。

電気が走ったような痛み。

傷口からは血が浮かび上がり、赤いインクのように水面で広がった。

茫洋^{もうよう}とした意識であたしはそれを眺めていた。

痛みを感じる事で許されている様な気がした。

血を流す事で生きている様な気がした。

だから、あたしは自分を傷つける。

生きている事を実感するために――

×

×

×

正午をやや過ぎた時刻。

場所は クスノセ機獣派遣事務所 の事務室。

長方形の部屋の中央に島をつくる様に配置された事務机と椅子が四組と、入り口から島を挟んだ向かい側——窓を背に、部屋全体を見渡せる位置に大きな事務机と椅子が一組置かれている。席は計五つ。現在はそのうち二つが埋まっている。

大きな事務机——所長用の席に座っているのは長い黒髪の娘だ。黒い瞳はとろんとしており、穏やかな微笑を浮かべて作業に集中している。

ハルカ・クスノセ。

クスノセ機獣派遣事務所 の所長であり、この事務所内に限って言えば絶対的な発言力と権力をもつ存在であるが、その容姿には重役とか責任者といった雰囲気は皆無だ。花屋の店員や喫茶店のウェイトレスと言われた方が万人が納得するであろう、のんびりとした空気をまとっている。

もつとも彼女が見た目どりの娘ではない事を知っているのはごく限られた者だけだ。

そのハルカの席から見て、左手前の席——入り口から見れば右奥の席に座っているのは、年の頃なら十五、六歳の小柄な少女だ。灰色がかった銀色の髪を肩口で揃え、同じく灰色がかった黒い瞳。肌の色も白く、全体的に色素の薄い印象がある。

カスミ・シノザキ。

無表情に黙々と目の前の作業に没頭するカスミの姿は、普通の神経の者であれば声をかけるのを躊躇^{ちゅうちよ}してしまうような頑^{かたく}な雰囲気がある。

この年頃の少女であれば学校に通うのが当たり前だが、とある事情で彼女はここ、クスノセ機獣派遣事務所 で事務員兼エンジニア見習いとして働いている。

働くといってもこの事務所の主な業務内容はゾイドとそのパイロットを提供する事であり、カスミの仕事は主に雑用である。

「そろそろお昼ですねえ。一段落したら昼食にしましょうか」

時計を見上げてハルカがのんびりとした口調で呟いた。

「わかりました。ホットケーキはどうでしょう」

しばし黙考してカスミが応えた。

「いいですねえ。じゃあ、そろそろアサトを起こさないと」

何故か楽しそうにしているハルカとは対照的に、カスミは無言で主不在^{あるじ}の正面の席を見る。

「……ダメ人間」

「手厳しいですねえ。まあ、自業自得ですが」

「本人のためになりません」

「けど、彼を起こすのもわたしのささやかな幸せなんですよ」

もう何度となく繰り返したやり取り。学習能力がないのではない。ただ、同じ事を繰り返すのも彼女らのコミュニケーションであり、日常の在り方だった。

そんな会話をしていると業務用の電話が鳴った。

「——お電話ありがとうございます。クスノセ機獣派遣事務所、所長のクスノセです……あら、マヘリア。おひさしぶりですねえ」

ハルカが電話に出ていくつかやり取りをすると、早々に会話は終了した。

「仕事ですか？」

マヘリアという名前に心当たりはなかったが、会話の内容からいってハルカの知り合いであるらしい事はカスミにも察する事が出来た。

「ええ。三時に 教団 のシスターが二人来ますので、お茶の用意をお願いしますね」

教団。

惑星Ziにおいて最大規模を誇る宗教組織である エイミス教団
——通称 教団。

現時点で最後の戦争——俗に 大戦 と呼ばれた全大陸に及んだ

戦争の終結から半世紀。軍事力は疲弊しきり、社会システムは崩壊した。

絶望的とも言える状況下で人々は『神』という偶像にすがった。

シンプルな教義と、なによりも豊富な資源・資金力を持っていた教団 は人々に容易に受け入れられた。

人はパンのみに生きるにあらず……しかし、所詮^{しよせん}パン無しでは生きていけない。教団 の影響力は戦後間もない世界に、瞬く間に広がった。

さらにゾイドを含めた独自の戦力を保有し、事実上 大戦 を終結に導いた 教団 は軍に代わって各地の治安維持に務め、現在では惑星Zⅰにおける最大勢力となっていた。

ちなみに『シスター』とは 教団 における対外交渉全般を担う役職の事である。

カスミが今日の業務内容に追記をしていると、部屋の入り口から三人目の所員が姿を現した。

伸び気味の黒髪と眠たそうに開かれた黒い瞳、やや痩せ型の体躯に、どこか疲れたような物憂げな青年。気怠^{けだる}げな雰囲気は寝起きとというのもあるだろうが、彼の場合は終始この有様である。

アサト・タチバナ。

クスノセ機獣派遣事務所 唯一の実効戦力である処^{ところ}のゾイド乗りである。

「……おはよう」

一応とはいえ挨拶をするくらいの元気はあるようだ。あくびを噛み締めながら、自分用にあてがわれた席に座るアサト。

「あら、残念ですねえ。ちょうど起こしに行こうかと思っていた処ですよ」

「そうか。早起きはするもんだな」

心底残念そうにするハルカにアサトはにべもなく返す。

「もう。カスミちゃんからも言っただけです」

「……ダメ人間」

「手厳しいな」

特に気分を害した様子もなくアサトは目の前の少女に視線を移す。

「……………」

「……………」

互いに相変わらずの無表情だったが、根負けしたように先に目をそらしたのはカスミだった。心なしか顔に赤みがさしている様にも見える。

共に暮らすようになって約半年。アサトはようやくこの少女の扱

いに慣れてきた様に思う。

「なに二人して見つめ合っているんですか。そうだアサト、三時にマヘリア達が来るそうです」

「マヘリア達が？ 例の件か？」

アサトの表情がやや忌々しげに歪む。

「さあ？ それだけではないそうですが、詳しくは直接会って話すと」

「まあ、電話で済ますような話じゃないわな」

考えても仕方がないと思ったのか、アサトはそれ以上言及しなかった。

「……あの、マヘリアさんというのはどういった方なんですか？」

カスミは先ほどから話題に上がっている人物について訊いてみた。

「そういえばカスミちゃんは会ったのは初めてですねえ」

「……会わせない方がいいんじゃないか？」

「ここに来る以上、会わせないわけにもいきませんし……大丈夫ですよ、取って食われる事はありませんから」

「喰くわれる可能性はあるかもな」

「……つまり、どういう方なんでしょう」

要領を得ないハルカとアサトの会話に、カスミはマヘリアという人物像を想像できないでいた。

「まあ、直接会うほうが早いでしょう」

「なんとなくか……『濃い』奴だな」

「……………」

結局、カスミは何の心の準備もなく本人と対面する事となった。

● ● ●

綺麗な女の子——それが娘の、少女に対する第一印象だった。

『私はフィア。四番目だから？（フィア）。あなたは？』

自然に出る筈のない鮮血を思わせる紅い^{あか}色の髪と瞳。肌は抜けるように白く、その対比が目には痛いくらいにコントラストを成している。

見た目どおりの年齢なら十二、三歳。しかし、少女の纏^{まと}った雰囲気は見た目どおりではなかった。

無邪氣そうでいて、^{こわく}蠱惑的な表情。それは大人びているというより、中身と不釣り合いな容れ物に入れられてしまったかのような印象がある。

『……………』

娘は言葉が出なかった。

はつきり言ってしまったえば見惚れていた。この世界にはこんな綺麗な生き物がいるのだと……。

『どうしたの？』

小鳥のように小首をかしげる少女——フィア。綺麗な紅いショートヘアが動きに応じてさらりと流れる

『……………あたしはカグヤ——カグヤ・イザヨイ』

フィアの問いに娘はそう答えた。

こちらは髪も瞳もどこにでも居そうな黒色。年齢は二十代の前半くらいだろう。

だが、少女と同じくその身に纏う雰囲気は異質だった。

黒いセミロングの髪は適当に切りそろえた様に長さがまちまちで、あちこちではねている。右目には眼帯。衣装はレースとフリルをふんだんに用いた黒いシャツにスラックス。腰にはパレオ風の布がスカートのように巻かれている。

ゴシッククロリータ。

カグヤの衣装を一言で言い表すならそれだろう。見る者を魅了させずにはおかないファッションは、彼女の持つ魔性にも似た美貌と合わせる事で、どこか危うい背徳感を感じさせる。

だが、フィーアはそんな事は気にした風もなく、

『カグヤ……いい名前だね。あなたにぴったりの綺麗な響き。よろしくね——カグヤ』

そう言うとき紅い髪の少女はカグヤに微笑んだ。それがフィーアとカグヤの最初の出逢いだった。

「——グヤ。カグヤってば」

自分と呼ぶ声に気が付き、サブ・シート後部座席を振り返ると、回想の中と同じ少女がカグヤを見ていた。変わらぬ紅い瞳で。

「……なに？ フィーア」

「またばーつとしてる。早く始めろって、さっきから怒鳴ってるよ？」

あきれたように言われて、カグヤはようやく通信の声に気付いた。

『——カグヤ・イザヨイ！ 聞こえているのか！？』

神経質そうな男の声がコクピット内のスピーカーから聞こえる。

(……そうだ。あたしは今、ゾイドに乗っている)

正式名称 ジェノザウラーLDS ——愛称は確か シラヒメ
だったかと思い出す。

ゾイドに個別の名前をつける感覚がカグヤには判らなかったが、
ファイアはそう呼んでいる。

混濁した意識の中、カグヤはピル・ケースから錠剤タブレットを大量に出し
て飲み込んだ。

(……今はこの白い ジェノザウラー —— シラヒメ とファイ
アの適合テスト中だった)

カグヤの意識が徐々にクリアになっていく。

「……ファイア、始めようか」

「いつでもどうぞ」

待ちかねたと言わんばかりの返事が複座から聞こえる。

「……カグヤ・イザヨイ。テストを開始する」

『！……了解』

まだ何か言いたげな様子だったが、通信相手はししぶ文句を飲み込んだ。

「行くよ、 シラヒメ」

フィーアはそう言う目を閉じる。すると少女の体がぼんやりと紅い輝きを放ち始めた。その光景は幻想的で、現実味が無い。

カグヤはこの感覚が好きだ。暖かいものを背中から感じると共に、そうじゅうかん操縦桿を通して、ゾイドの機体にも力が漲みなぎっていくのを感じる。

体が溶けて機体とひとつになっていく感覚。

快感と破壊衝動がこみ上げて来る。

「……行こうか、すべてを壊しに——」

それが戦闘開始の合図だった。

● ● ●

午後三時。時間通りの来客を応接室に通し、カスミは人数分のコピーヒールを入れると応接室のドアをノックした。

「失礼します」

部屋には四人は楽に座れそうなソファーが二つ向かい合わせに置かれ、その間にテーブルが一つ置かれていた。カスミはまず、来客

である修道服の二人の前にコーヒーを入れたカップを並べていく。

「ご苦労様です。この子がうちで働いてもらっているカスミちゃんです。お二人とも初対面ですよね」

「カスミ・シノザキです。よろしくお願いします」

ハルカの紹介にカスミが応じる。

「そしてこちらのお二人が 教団 のシスターのマヘリアと——」

「——まあまあまあッ！」

ハルカの言葉をさえぎり、並んで右側——ハルカの正面の娘が立ち上がった。

年齢はハルカと同じくらいだろうか。二十代前半から半ばの美しい娘だ。

セミロングの金髪と穏やかな碧眼。^{へきがん}整った顔つきと落ち着いた物腰。

美人というだけならハルカとカスミも相当な器量良しだが、彼女にはどこか気位の高そうな、貴族の令嬢といった品のよさを感じる。

だが——

「いいですわ！ 素敵ですわ！ エクセレントですわ！」

激しく興奮する娘に一步引きながら、カスミは第一印象を早くも

くっがえ
覆されていた。

「貴女おいくつ？ スリーサイズは？ フリフリはお嫌いかしら？」

「はいはい。落ち着いてくださいねえ、マヘリア」

つかみ掛からんばかりの勢いの娘——マヘリアをシャットアウトするように、カスミとの間に入ったハル力がなだめる。

「もう、お姉さま！ そうやってすぐに女の子に声をかけるのやめてください！」

そう言うのはマヘリアの左隣——我関せずとばかりにコーヒーに砂糖を入れるアサトの正面に座る少女だ。

年の頃ならカスミと同じくらいだろうか。ベリーショートのかすんだ赤毛に褐色の肌、勝気そうな黄色い瞳。万人受けする美人ではないが、愛嬌のある可愛らしい顔つきをしている。

「お姉さまはそうやって誰彼構わず……浮気者！」

「！ ミゼット、それは違いますわよ」

真面目な表情をして赤毛の少女——ミゼットに視線を移すマヘリア。

「わたくしが声を掛けるのは秀逸な素材だけですわ。そんな節操無しのような言われ方は心外ですよ」

「美人ならなんでもいいんでしょう？ 十分節操無しです！」

「ミゼット……」

悲しそうな表情でミゼットの瞳をのぞき込むマヘリア。

「神は全ての人間に対し平等ですわ」

「だ、だからなんですか」

気圧される様に言いよどむミゼット。

「だから——わたくしも全ての可愛い女の子に平等なのです」

「——お姉さま！」

言い合い——一方的にだが——を再開した二人のシスターを尻目に、コーヒーをすするアサトの隣に座るカスミ。

「な？ 『濃い』 だろ？」

「……はい」

改めて各自の紹介が終わったのは十分後だった……。

カスミから見て正面右の、セミロングの金髪と碧い瞳あおのしっとりとした雰囲気きずなの娘がマヘリア・メルル。

左の勝気そうな、癖の強い赤毛に黄色い瞳の少女がミゼット・レミントンと言うそつだ。

容姿の違いからも判る通り、二人は実の姉妹という訳ではない。
教団 では先輩のシスターが新人のシスターを指導する『姉妹制度』というものがあり、二人はそのペアらしい。

「相変わらずですねえ、マヘリア」

「失礼。つい取り乱してしまいましたわ……カスミさん、こちらに座りませんか？」

ハルカへの相槌もそこそこに、カスミに空いている自分の左の席を勧めるマヘリア。
すす

「……いえ、結構です」

身の危険もそうだが、何故か自分を睨むように見ているミゼットから視線を外しながら、カスミはマヘリアの申し出を辞退した。

「——それで、今日は何の用で来たんだ？」

アサトの切り出しでようやく話が本題に入る。

「そうですね。それではまず、ヤミヒメ に関する 教団 上層部の意向から」

（ヤミヒメ の話？ どうして……）

突然 教団 のシスターの口から ヤミヒメ の名前が出てカスミは疑問に思ったが、アサトとハルカの表情に変化はない。あらかじめ話の内容を知っていたという事だろう。

「結論から言えば ヤミヒメ の処遇はこれまでどおり、アサトさんに一任する事となりましたわ。それが貴方に ヤミヒメ を託した、アヤカ姉さまの希望でしょうし」

「……そうか」

（アヤカ？ アサトさんに託した？）

自分の知らない事情に次々と疑問符が浮かぶカスミ。

「感謝しなさいよ。本当なら妹候補だったマヘリアお姉さまが引き継ぐのが筋なんだから」

納得がいかないのか、不機嫌そうにアサトにつっかかるミゼット。

「そうかい。そいつはどうも」

「なによ。引つかかるわね」

「いんや。別に」

「ちょっと、言いたい事があるなら言いなさいよ！」

挑戦的な口調のミゼットをなだめるマヘリア。

「落ち着きなさいなミゼット。いけませんわよ。淑女たるもの常に毅然としていなければいけませんわ」

「……説得力が無いです、お姉さま」

先程の豹変振りを見れば確かに説得力は無い。

「それからもうひとつ。こちらのアサトさんに関わる話です」

気を取り直して話を続けるマヘリア。

「先日、貴方が遭遇した白い ジェノザウラー の動向がつかめました。場所は東エリア第三十八地区の ゾイテック ZOITEC 社の研究所です。しかも工作員の調査の結果、違法な研究もしている様なんです」

「と言うと？」

もったいつけるようなマヘリアにアサトは先を促す。

「オーガノイド に関する研究です」

「……………」

アサトの表情が微妙に変化した。それは彼の表情を見慣れた者でなければ気付かないような、些細な変化だったが。

「貴方の『探し物』もそこにあるかもしれませんわよ」

（オーガノイド？ それにアサトさんの『探し物』って……？）

またも新たな疑問符がカスミの頭に浮かぶ。このクスノセ機獣派遣事務所 に来て約半年、まだ自分が知らない事が多くあるのだと少し寂しい様な気持ちになる。

「ちなみに、貴方が救助したと言う　グスタフ301　という機体ですが、ZOITEC　社にそのようなコードの機体は無いという返答でした」

「……なんでわざわざそんな情報を？」

「親切心、ではいけませんか？」

アサトの問いにマヘリアは婉然えんぜんと答えた。

「他人の厚意はひととおり疑う事にしてる」

「心の貧しい男ね」

「人を見たら泥棒と思え——ってな」

なぜか喧嘩腰けんかごしのミゼットを軽く受け流すアサト。

「……そうですね。強いて言うなら、未確認の脅威に対して　教団　の貴重な戦力を割きたくないといった処でしょうか。ジェノザウラー　というただでさえ強力なゾイド。それに貴方の報告によれば　DFC　と同様のシステムを積んでいる可能性がある。更にオーガノイド　の存在……。不確定な要素が多すぎるんですの」

「だから都合よく俺達を利用しようとする？」

「無論、正式なお仕事として依頼致しますわ。それにお互いに利害は一致しますでしょう？」

教団　は治安維持の一環として、違法な研究の摘発も精力的に行

っている。しかし、今回はその対象の脅威度が高いため外部に応援を要請する——確かに不自然な話ではない。

「……いいだろう。構わないか、ハルカ？」

「ええ。構いませんよ」

あっさりと了承するハルカ。もっとも正式に『仕事』として依頼された以上、実際に『仕事』をするアサトが承認すれば所長に是非はない。

「では詳しい打ち合わせに入りましょうか」

アサトの答えを予想していたように、教団のシスターは用意していたいくつかの資料をテーブルに広げ始めた。

● ● ●

慌しく整備員が行き交う格納庫内。^{あわただ}壁沿いに設けられたキャットウォークの手すりにもたれかかっている娘がいた。

適当に切ったような不揃いな長さの黒い髪。瞳も同じく黒いが、その右側は眼帯で覆われ見ることは出来ない。

肌は白く、身体は見る人間によっては病的とも言える程痩せている。

「……………」

黙って自分の愛機を見上げるその瞳には、なんの感情も見受けられない。

視線の先には白い巨体。それは禍々（まがまが）しいまでの威圧感と、圧倒的な破壊の意思を娘に感じさせる。

「あ——カグヤ、またこんな所にいる」

背後から聞こえた声に顔を向けると、雑然としたハンガーには不似合いな少女がいた。ゆつたりとした衣装に身を包んだ、紅い髪と瞳の少女が。

「……なに、フィア？」

視線を正面に戻して返事を返す娘——カグヤ・イザヨイ。

彼女は ZOITEC 社の不正規技術開発部門——通称 ファントム に所属するゾイド乗りである。不正規というだけあって、公には出来ない技術の開発・試験等を行うのがその存在目的とされている。無論、カグヤの名前も ZOITEC 社の社員リストには記載されていない。

「なについて訳じゃないけど、用がないと居ちゃいけない？」

フィアと呼ばれた、同じく公には存在しない事になっているであろう少女がカグヤの横に並ぶ。その口調はどことなく拗ねているようにも聞こえる。

「……そうね。一時的でも、あたしとあなたはパートナーだものね」

「? どうして一時的なの?」

カグヤの言葉にフィアが首をひねった。

「……フィアの欲しいものが手に入ったら、あたしはもう必要ないでしょう?」

カグヤの言葉に卑下するようなニュアンスはない。ただ事実を事実として語っている様な口振りだ。

「そっか。そこまで考えてなかった」

そう言うと、フィアもカグヤの視線の先——白い鋼鉄の竜に紅い瞳を向ける。

ジェノザウラーLDS —— 通称 シラヒメ。

かつてのガイロス帝国軍が デスザウラー復活計画 の際に偶然発生させたティラノサウルス型ゾイドだ。

荷電粒子砲と高い戦闘能力を持つ強力な機体だったが、その強すぎる破壊衝動に耐えられるパイロットの数が少なく、極少数しか生産されなかったという背景を持つ。

本来は黒を基調としたカラーリングだが、この シラヒメ と呼ばれる固体は『骨』や『化石』を思わせる淡い白色をしている。

格闘戦用の装備だけでなく、背部と頭部にはそれぞれ射撃戦用の火器も備えており、汎用型の戦闘用ゾイドである事を物語っている。

「……前回の戦闘記録は観たよ。発掘されたばかりの機体と融合して、コンバット・システムの調整も無しで戦闘するなんて」

「だってすぐ近くに DFC の反応があったから、つい」

カグヤの言葉に悪びれた様子もなくフィーアは言った。

先日、とある遺跡から発掘されたばかりの シラヒメ は、搬送中に突如、暴走状態に陥り、同機を運んでいた グスタフ を攻撃。その後の偶発的な戦闘により機体を小破させている。

カグヤがフィーアと出会う約一ヶ月前の事だ。

「私と シラヒメ だけじゃ、アサトと ヤミヒメ には勝てなかった。だからカグヤに手伝って欲しいの」

「……アサト？ それが例の 漆黒の狂襲姫 のパイロット？」。

「そうだよ。私が欲しいもの——私だけのものにするの」

「……いいよ。あたしは戦えればなんだっていい」

抑揚のない口調。フィーアから見たカグヤの表情は、瞳を眼帯で覆われている事もあって変化は確認出来ない。

「カグヤってさ、やっぱり壊れてるよね」

「……そう？　自分じゃよくわからない」

「そつだよ。だから私はあなたに惹かれたんだもん」

「……そう。フィアがそう言うのなら、そうかもしれない」

沈黙。

周囲の喧騒だけが二人の間に流れた時――

『総員、第二種非常体制。所属不明のゾイドが接近中。各自、現状の作業を即時中止し、非常マニュアルA1を実行されたし。繰り返し――』

突然の警戒アナウンスがスピーカーから流れ、整備員とハンガーにいた研究員達が慌てて動き始めた。

非常マニュアルA1とは、機密情報をすべて外部ハードディスクに移し、書類やメイン・コンピュータ等の形として残るデータをすべて破棄する事を意味する。

「……襲撃？　もしかして――」

「うん。あつちから来てくれたみたい……すごい、私ドキドキしてる」

胸を押さえ恍惚とした表情を浮かべる少女を見て、カグヤも実感した――

（……壊れてるのはこの子も同じか）

間もなくして研究所の警報は第一種非常体制に移行した。

つづく

第六話『オーバードーズ（後編）』

オーバードーズ
過剰摂取。

読んで字の如く、薬物の大量接種。

精神を安定させる薬も量が過ぎれば毒になる。

その目的は自殺志願、現実逃避、自傷行為の一環だったりするが、あたしの場合はどれに当たるのだろうか？

様々な薬を試したが、どれもすぐに耐性が出来てしまい効果は長続きしない。

むしろ副作用で身体に異常を来たす事の方が多い。

それでも薬を飲み続けるのは効果を期待しているからというより、自分を傷付けるためという方が正しい気がする。

罰を受ける事で許しを請うているのかもしれない。

誰に？

なんの罪から？

判らない。

自分で自分が判らない。

それはとても気持ちが悪い。

×

×

×

第六話『オーバードーズ（後編）』

マヘリアとミゼットの来訪から一夜明けた翌日。

「そろそろ始まった頃でしょうか」

オフィスの時計を見上げてカスミ・シノザキは呟いた。

「そうですねえ。心配ですか？」

相変わらずの微笑を浮かべたままハルカ・クスノセは訊ねた。

「……一応は」

「訊きたい事があるんじゃないですか？ 例えばアヤカさんの事とか」

この少女がこうして、自分から会話を始めるのは珍しい。察しのいいハルカは、カスミの胸中を当てて見せた。

「……それだけじゃありません。ヤミヒメの事とか、アサトさんの『探し物』とか……まだ、私の知らない事がたくさんあるんだなって、昨日の話を聞いていて思いました」

普段どおりに見えるが、その口調にはやや寂しげなものの感じさせる。

「別に秘密にしている訳ではないんです。ただ、あまり面白い話でもありませんから」

珍しく困ったような表情を見せるハルカ。

「あ……いえ、込み入った事でしたら別に……」

「そういう訳でもないんですよ——そうですね、どこから話しましょうか」

思案するようにハルカは暫し黙考する。

「ヤミヒメ はアサトがある人から引き継いだものなんです。その人の名前がアヤカ……アヤカ・Ｔ・シュバイツァーです」

「……………」

物思いに耽^{ふけ}る様なハルカの言葉を、カスミはただ黙って聞いた。

アサトの過去とアヤカという人物の存在について。

● ● ●

東エリア第三十八地区——ゾイテック ZOITEC 社の研究所を ヤミヒメ のリーダーは捉えていた。

すでにこちらの接近に気付いていたのだろう。迎撃機と思われる移動物体もレーダーには映っている——その数、三。

「情報より少ないな。出し惜しみか？」

ヤミヒメ の操縦席でアサト・タチバナは訝しげに呟く。

『研究所付近に荷電粒子の残留反応と、セイバータイガー と思われる残骸が確認出来るだけで約三機分あります』

コクピットの内部スピーカーから発せられる落ち着いた女性の機械音声^{マシ・ヴォイス}が、センサーの捉えた情報をアサトに告げていく。

ヤミヒメ に搭載された自立型戦術支援人工知能装置——クノキだ。

本来であれば手動でやらなければならないような操作のほとんどをパイロットの代わりに実行してくれる。直接的なゾイドの操縦以外はほぼ全て音声入力^{ヴォイス・オートマ}が、クノキの独自の判断で行ってくれるという訳だ。

「ふむ。内輪揉めでもあったのか」

『現状で脅威となりうるのは接近中の機体のみです。機体識別は全てセイバータイガー・タイプ。数は変わらず三。どれも標準装備と確認』

次々に優先度の高い順に現状を報告していくクノキ。

『マスター、ご指示を』

「ん。一対三か——なんともなるだろ。このまま行く。クノキ、援護よろしく」

『了解しました』

「——行くぞ ヤミヒメ」

——ウオオオオオオオオオッ！

アサトの呼びかけに応えるように咆哮を上げる漆黒の コマンド
ウルフ —— その名は ヤミヒメ。

かつてヘリック共和国にて実戦配備され、高い汎用性と扱いやす
さを以て^{もっ}広く運用された高速戦闘用ゾイドだ。

後継機とされた シャドーフォックス や ケーニツヒウルフ
が配備された後も、余裕のある設計と拡張性による派生機^{バリエーション}を数多く
生み出した名機である。

この ヤミヒメ も同様に独自のカスタマイズを施され、背部に
はアタッチメントを介してライフルと実剣を装備。腰部にはスモーク・
デイスチャージャーに換わり、ハイブリッド・スラスター・バ
インダーを装備している。

全高七メートルの黒い機体が駆ける。

標的が有視界に入り、火器管制装置（FCS）が敵を有効射程に捉える。

「まずはフォーメーションを崩してもらおうか」

引き金のひとつを絞ると多重照準システム（マルチ・ロックオン）が起動——アサトの眼球の動きを追跡して六つの照準サイトが同時に標的を捉える。

「捕まえた！」

絞ったトリガーを押し込むと、両腰のバインダーから各三発ずつ——計六発の自動追尾式光学兵器が放たれる。六条の赤い光は、三機のセイバータイガーの上空で一ヶ所に集束し、再び拡散して地上に——標的の真上に雨のように降り注いだ。

慌てた三機は蜘蛛の子を散らすように散開。中央の一機が正面に飛びこんで来た。

着地の瞬間を狙って ヤミヒメ はライフルを二射。二五〇ミリ弾が セイバータイガー のコクピットのある頭部と下顎に着弾、破壊する。

「——まず一機」

その表情は普段どおり気怠いものだが、声音にはうつすらと充足感が滲^{にじ}んでいた。

● ● ●

楽な仕事の筈だった。

傭兵達の仕事は研究所の警備と、テスト機との模擬戦。

しかし、昨日の模擬戦で二機が大破、一機が中破し、彼らの戦力は実質三機の セイバータイガー のみとなった。

セイバータイガー 。

かつてゼネバス帝国が開発した サーベルタイガー をガイロス帝国が強化・改修した高速戦闘用のトラ型ゾイドだ。その速度は中型ゾイドでありながら時速二四〇キロを誇り、射撃・格闘とそつなくこなす高性能機である。

無論、愛機に対する信頼から来る傭兵達の油断もあっただろう。相手は コマンドウルフ が一機。数は半分に減ったとはいえ、戦力差は三対一。

こちらが負ける筈がない。

しかし——接敵からわずか数秒で僚機が一機撃破された。

なおも目標は高速で迫ってくる。

『何なんだよアイツは——！？』

パニック気味になっているもう一機の僚機から通信が入るが、セイバータイガー——番機のパイロットにも答えられる冷静さは無かった。

『おいッ、援護しろ！ う、わあああああ——ッ……………』

援護どころではない。一瞬で僚機はコクピットを潰され、通信は途絶した。

（ただの コマンドウルフ のはずだ……黒いカラーリングの（……………）……………）

そこで男はようやく思い出した。

漆黒の狂襲姫 と呼ばれる黒い コマンドウルフ の噂を……………。

● ● ●

一気に畳み掛ける——決断するが早いか、アサトはわずかに距離が近い右の セイバータイガー に狙いを定めた。

反撃すべきか回避行動を採^とるべきか迷ったのだろ^う。どっちつかずで動きが取れない標的との距離を一気に詰め、その頭部にストライク・クローを突き立てる。

コクピットを失い、二機目の セイバータイガー が力なく崩れ落ちた。

「二機目——あとひとつ！」

——ウオオオオン！

ヤミヒメ が何かを催促するように一声吠えた。

アサトの脳裏に一瞬、 ヤミヒメ の背部に装備された『剣』のイメージが浮かぶ。

（——『使え』っていいのか？）

ヤミヒメ の背部に新たにマウントされた試作型炎熱重斬刀——カグツチ。

「新しい武装、使いたくしょうがないか」

アサトの問いに応えるように更に ヤミヒメ が咆哮を上げた。

「よし…… カグツチ 展開」

『了解。 カグツチ、イニシャルイズ起動——』

アサトの要請に従い、クノキは カグヅチ の起動手順を次々に行っていく。

背部の カグヅチ とアタッチメントである シダレザクラ を繋ぐフレキシブル・アームが伸長し、 ヤミヒメ の右腹部から翼を広げるように、地面と水平に刀身が展開される。

「ごうかえんじょう 業火炎上 ——」

『セーフティ・リリース スタンバイ・レディ
安全装置解除。 準備完了』

アサトのトリガー・ヴォイス 激発音声により カグヅチ の安全装置が解除され、その刀身が熱を帯びる。

残る敵機に向かい ヤミヒメ が疾走する。

射撃による反撃はあるが、ロクに照準も付けられていないため、あさって 全て明後日の方向へ虚しくそれる。

無論、うろたえ弾に当たるような ヤミヒメ ではない。

更に接近—— カグヅチ の間合いに入る。

「—— 吠えろ、 カグヅチ ！」

刹那、刀身の熱が最大まで高まり、 ヤミヒメ と セイバータイガーがすれ違う。

すれ違いざまに カグヅチ の切っ先が セイバータイガーの装甲を裂き、内部機器を灼き斬った。

右脚部を前後共に、胴体ごと切り裂かれ、最後のセイバータイガーも崩れ落ちた。

「終わったか。しかしこいつは……」

カグヅチの刀身の背の部分の冷却機構ラジエーターから大量の熱排気が行われる。

「強力すぎる……」

テストで既にその威力は知っていたアサトだが、改めて——しかも実戦で——使ってみて、その威力に驚愕する。

冷却処理の終わったカグヅチを再び待機状態に戻し、研究所の方へ愛機を向ける。

「さて、次が本命だが……マヘリア達は上手くやってんのかね？」

•
•
•

ZOITEC 社・不正規技術開発部門 ファントムメイン・オーダー・ルームの地下第一発令所。

「護衛のセイバータイガーは全滅した模様です！」

オペレーターらしい男が報告をする。

「全滅……一機の敵に何という事だ」

報告を受けた責任者らしき神経質そうな男がうめいた。

「と、とにかく脱出だ！ 持てるだけのデータを持ち出して、残り
は速やかに破棄しろ！」

男が指示を出すと、タイミングを見計らった様に声がした。

「——それは困りますわね」

女性の声と共に発令所の扉が開き、サブマシンガンと防弾ジャケ
ットで武装した兵士達が数名なだれ込んだ。

「な、なんだ貴様らは！？」

「教団の 代行者 —— と言えば伝わりますか？」

兵士達に続いて、ゆっくりと入室してきた修道服姿のシスターが
言った。

マヘリア・メリル。

この場には不似合いなしっとりとした気品が特徴の金髪碧眼の娘
だ。

「この研究所の責任者はどなたですか？ 貴方かしら？」

微笑を浮かべたまま銃を構えるシスター。銃は グロツク と呼ばれるハンドガンである。

「ち、違う！ ファントム の連中はすでに脱出艇に乗り込んで……ここに残っているのは施設管理の人間ばかりだ」

「脱出艇とおっしゃいましたね。それはどちらに？」

グロツク の照準を男につけたまま質問を続ける。

「か、格納庫だ。もう火が入っているはずだ。本当だ！」

男の話を信用したのか、シスターは通信機で格納庫の制圧に向かった部隊に連絡を取った。

「——あ、お姉さま！ こちら格納庫です。それらしい船舶は見つけたんですが、例の ジエノザウラー が護衛に付いてて、生身じゃどうしようもありません！」

通信に応えたのはマヘリアのパートナーであるミゼットだった。

「場所は研究所の滑走路付近です。すぐにあのボンクラを寄越よこしてください！」

「アサトさん。今の通信、聞いてらっしゃいました？」

マヘリアがミゼットとは別の人間に呼びかけた。今回の作戦で連係をしているアサトだ。

「ああ、聞こえたよ。これよりボンクラが滑走路方面に出る。撃つ

なよ』

「了解。——さて、わたくし達はわたくし達の仕事を続けますわよ。職員は一ヶ所に集めて拘束。工作半は可能な限りのデータを吸い出して下さいな」

•
•
•

研究施設の南方面にある滑走路。

脱出艇を先導するように白い ジェノザウラー が姿を現した。

「クノキ、こないだのヤツと間違いないか？」

『データ照合……先日と同一の機体と確認しました』

アサトの問いにクノキが答える。

ヤミヒメ の姿を認めると、白い ジェノザウラー の視線がこちらを向いた。

それと同時に ヤミヒメ のコクピットに通信回線が開いた。

『……初めまして。あなたがアサト・タチバナ？』

通信モニターに音声と共に女性の映像が映し出される。白いジ

エノザウラー からだ。

年齢はアサトと同じくらいだろうか。黒髪黒瞳の若い娘だ。美人ではあるが、右目を覆う眼帯と、焦点が合っていないような虚ろな表情がまず印象に残る。

「……あなたがそいつのパイロットか。『初めまして』と言ったな、顔を会わせるのが初めてって意味か？」

「……いいえ。前回の戦闘時のパイロットはあたしじゃない。だから本当に初対面」

「よく判らんな。なんで俺の名前を知ってる？」

「……………」

「——カグヤ！ もういいでしょ。代わって！」

黒髪の娘の言葉をさえぎる様に通信から別の声が聞こえた。こちららはもつと若い——むしろ幼いと言った方がいい声だ。

「アサト！ 私に逢いに来てくれたんでしょ？」

新たな通信回線が開いて、先の娘の映像の横に並ぶ。同じく目の前の ジエノザウラー から発信されている。

年の頃なら十二、三歳。紅い髪と瞳の少女だ。

「……………クノキ——？」

紅い少女の姿に、記憶の中の人物の面影を感じてアサトは思わず
呟いてしまった。

『あー、失礼だよ。女の子の名前を間違っなんて……』

紅い髪の少女がふて腐れた様に言った。

『この間は負けたけど、今日は条件は一緒だからね』

「どういう事だ。それにお前は誰だ。なんで俺を知ってる？」

『前は私だけだったけど、今回はカグヤがいるってこと。私はフ
ィーア——そう呼んで。この白い ジェノザウラー は シラヒメ
っていうの。なんであなたを知ってるかは後で教えてあげる。だ
から今は楽しもう？』

場違いに天真爛漫な口調で言う少女——フィーア。

（つまり前回のパイロットはこの子だったのか？ それに『条件は
一緒』？ まさかこの子は……）

『……フィーア、もういい？』

先程から黙っていた黒髪の娘——カグヤが待ちくたびれたように
口を挟んだ。しかし、その表情に苛立ちや嫌悪は見受けられない。
どこか遠くを見ているような表情だ。

『うん。いいよ。じゃあアサト、また後でね』

「待て。まだ訊きたい事が——」

それを確認すると、 ヤミヒメ は敵機の頭上を跳躍——誘うように背を向けて移動する。誘われるまま シラヒメ はこちらを追尾してくる。

「よし。そのまま付いて来い」

● ● ●

代行者 。

それは 教団 の執行部隊。数名のシスターにより指揮される荒事専門の武装部隊だ。

推進器を破壊され、その場に残された脱出艇にミゼットを始めとする数名の武装隊員が突入を開始した。

「……やられた」

赤毛の少女は、その勝気そうな表情を歪ませた。

脱出艇に乗っていたのは操縦士二名のみ——客室は無人だった。

『つまりそちらは囹圄おとじだったと？』

「そのようです、お姉さま」

平時と変わらぬ口調のマヘリアの通信にミゼットは悔しそうに応えた。

『判りましたわ。操縦士を連行してこちらと合流。あとはアサトさんに期待しましょう』

「わかりました……大丈夫でしょうか、あのボンクラ」

『大丈夫ですわよ』

「……根拠は？」

『ありませんわ』

「……………」

マヘリアとペアを組んでだいぶ経つが、ミゼットは未だに姉の性格をつかみかねていた。いい加減なのか、それだけアサトの実力を買っているのか。後者だとしたら——そう思うとミゼットはなんとなく不愉快な気持ちになった。

● ● ●

戦闘が始まって数分。距離を取っての撃ち合いでは埒があかず、戦いは飛び道具の応酬から接近戦に移っていた。

一対一の戦闘。

まともに白兵戦をした処で コマンドウルフ が ジェノザウラ
ー に勝てる道理はない。

単体での機体スペック・得意とする分野が違うのだ。戦略的な価値ならいざ知らず、単純な戦闘能力なら ジェノザウラー が圧倒的に上だ。

パイロットの腕次第でこの道理をひっくり返すのは不可能ではないが、共に並外れた技量を持ち、共に同じ付加要素（DFC）を持つのであれば、この戦いの結果は始まる前から決まっている。

ならばこそ、一気に決着をつけるべく無茶とも言える接近戦に持ち込むアサト。

目くらましにホーミング・レーザーを放ち、回避予測位置にライフルを撃ち込み、更に追い討ちを掛ける様に カグツチ で斬りかかる ヤミヒメ。

しかし、 シラヒメ はその^{くつと}尽くを^{かわ}躲し、もしくはEシールドで防ぐ。

（前回と動きが違う。パイロットが違ったっていうのは本当らしい）
アサトは忌々しげに思考をする。

このまま持久戦に持ち込まれるとまずい。恐らく今回は荷電粒子砲も使えるであろうから尚更だ。

「クノキ、打開策は？」

一撃離脱を試みながらアサトは問いかける。

『モード2（ツー）を使うしかないと思います』

「それしかないか——ちいッ！」

数度目の斬撃も直前で シラヒメ が展開したEシールドに阻まれる。 カグツチ の刀身と接触したエネルギーの力場が火花を散らし、大気中のイオンがプラズマ化する。

シラヒメ と距離を取り、 カグツチ の状態をチェックする。

「あと二、三回が限度か」

『フルドライブなら確実に使えるのは一回が限度です』

カグツチ は蓄電池コンデンサーの消耗の激しさに加え、刀身自体の耐久限界もある。このペースで使うと冷却が追いつかず、いずれ破損してしまう。

「なら出し惜しみは無しだ。モード2起動——次で終わりにする」

『了解。 D F C セカンド・リミッター 第二段階、モード・リリース 制限解除』

ヤミヒメ の機体から漏れ出す紅い発光現象がより激しくなる。

『——マスター』

「なんだ？」

『ご自愛ください』

「……判ってるよ」

—— ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

ヤミヒメ
は大地に脚を踏ん張ると、
激しく雄叫びを上げた。

コクピットの奥の双眸に紅い光が宿る。

•

•

•

速い。しかし、所詮は コマンドウルフ——それがカグヤの
ヤミヒメ に対する評価だった。

この シラヒメ は自分の思いどおりに動いてくれる。目で追える動きなら対処できる。

敵の近接戦闘用装備の第一撃はEシールドで弾き、間合いを確認

する。その刀身の長さは約三メートル弱。 シラヒメ の尾による迎撃を警戒してか、やや踏み込みが浅い。

二撃目は右—— ヤミヒメ から見れば、刀身を展開させていない左側——にステップを踏んで回避。しかしこれを読んでいた様に、ヤミヒメ は左前脚を軸に、回し蹴りの要領で半回転、遠心力を乗せた斬撃が シラヒメ の左腕を斬り飛ばした。

シラヒメ は体勢を立て直しながら着地。レーザー・ライフルでヤミヒメ の背後を狙うが、回避行動によって距離を取られる。

「……一撃離脱。ビート・アノド・アウェイ まともに組み合う気は無いみたいね」

「そうですね。 コマンドウルフ の臂力じりょくで ジェノザウラー と取っ組み合いなんて自殺行為だもん」

冷静に分析するカグヤに対し、フィーアはさも当たり前のように言う。

左腕を持っていかれた事に対する動揺はない。

更に三度目の接近。斬撃の回避を諦め、残った右腕で熱を帯びていない剣の柄つかをつかみにかかる。

カグヤの意図に気付いたのか、 ヤミヒメ は直前で剣を背部に格納し、右肩から体当たりを仕掛けてきた。

「……くッ！」

シラヒメ のコクピットに振動が伝わり、カグヤの身体を揺さぶ

る。

更に ヤミヒメ はほぼゼロ距離にも関わらず、両腰のバインダーから赤い光の軌跡を無数に放ってきた——ホーミング・レーザーだ。

シラヒメ の機体にいくつもの光の線が走り、装甲を貫かれないくつかの箇所こゝろで小爆発が起きた。

ヤミヒメ はその爆発にまぎれて離脱。 シラヒメ と距離を取った。

「……ファイア、損害状況は？」

「大丈夫。まだいけるよ」

カグヤの問いにファイアは事も無げに応じた。

「……あのパイロット、あたしと同じ匂いがする」

「匂い？ どんなの？」

「……確かめてみようか」

四度目の接近を試みる ヤミヒメ のコクピットを、焦点がずれた様なせきがん隻眼でカグヤは見つめる。

「……Eシールド展開」

「避けないの？」

不思議そうに訊ねるフィーアだが、言われた通りにEシールドを展開する。

高速で迫る ヤミヒメ の剣が、 シラヒメ の展開する強力なエネルギーの力場と正面からぶつかる。

大気中のイオンがプラズマ化し、大量の火花を散らして視界を覆う。

先に身を引いたのは ヤミヒメ だった。視界がゼロになった瞬間に剣を格納して、即座に シラヒメ と距離を取った。

「……やっぱり。あのパイロット——死にたがりだ」

「そうなの？」

「……まっとうな人間は、あんな無茶な戦い方はしない。あんな特攻じみたやり方……自殺志願者？」

「あはっ！ カグヤとおんなじだ」

納得がいったように短く、紅い少女が無邪気に笑う。

「でもダメだよ？ カグヤは死んじゃ」

「……判ってるよ。うん？ 様子が変わった？」

シラヒメ 同様に ヤミヒメ から漏れ出ている紅い光が、より強くなった様に見えた。

黒い機体は大気を揺らすように咆哮を上げると、またも シラヒ
メ に疾走して来る。

カグヤはピル・ケースを取り出すと、タブレットを数粒飲み込んで敵機を見据える。

「『同調』したのかな？ ちょっとやばいかも」

フィーアが ヤミヒメ の変化に気付き言った。

「……はあ。いいね——すごくゾクゾクする」

背筋を走る悪寒がカグヤの感覚を刺激する。左腕の傷痕が疼く。

「……なんか、もうイツチャイそう……」

恍惚とした表情を浮かべ、喘ぐように言葉を紡ぐカグヤ。

「……Eシールド最大出力で展開。同時に荷電粒子砲、^{ショート}Sチャージ」

「どうするの？ 次は大きいのが来るよ？」

「……言つとおりにして」

「はいはい」

熱に浮かされたようなカグヤの様子に何を言っても無駄と思い、フィーアは言われた通りに手順を踏んでいく。

力場によって固定されたエネルギーが防壁となって シラヒメの前面に形成される。

「……どう出る？」

ヤミヒメ のパイロットを想い、カグヤはぽつりと呟いた。

● ● ●

モード2。

それは DFC に設定された制限の第二段階までの解除と、パイロットであるアサトと ヤミヒメ の同調を意味する。

同調はより高いパイロットとゾイドの一体化を図る事で、機体の反応速度を極限まで高め、文字どおり『人機一体』の状態になる。しかし、パイロットとゾイドの境界線が曖昧となり、最悪、パイロットの精神が異常をきたす危険性も負う事になる。

「カグヅチ 抜刀モード」

『了解。 カグヅチ フルドライブ、チャージ・セット』

アサトの指示に従い、クノキがシステムを処理していく。

すると、 ヤミヒメ 背部のアタッチメントと カグヅチ を繋

ぐアームが伸長し、剣が頭部右横に展開する。カグツチの柄を口に咥くわえると、刀身を保持していた鞘さやが外れ、背部に格納される。

柄の接続端子コネクターによって、エレクトロン・バイト・ファングのエネルギーがカグツチに流れ込む。

『チャージ・コンプリート、スタンバイ・レディ』

「よし。行くぞ、ヤミヒメ！」

漆黒のオオカミが駆ける。

対する シラヒメ はすでにEシールドで待ち構えている。しかもこれまでにない強力な出力だ。

フルドライブ
完全稼働の カグツチ にもEシールド突破能力はない。

故に カグツチ で斬り掛かるならEシールドを何とかしなければならぬ。

接触まで約三メートル――

「――ッ！ エネルギー・ブラスト！」

アサトがトリガー・ボイスを発すると共に ヤミヒメ の正面に青白い閃光が放たれた。質量を持った光の奔流が物理的な衝撃となつて シラヒメ のEシールドと衝突した。

瞬間、エネルギーの対消滅が起こり、Eシールドは力場を維持できず消滅した。もはや シラヒメ を守る盾は存在しない。

カグヅチ の熱を帯びた白刃が、その喉元めがけて迫る。

必殺の一撃。

しかしとつさに残った右腕を射出する シラヒメ。

撃ち出されたアンカー・クローは カグヅチ に斬り裂かれながらも、わずかにその軌道を上にずらした。

「ちッ！ 浅い——！」

シラヒメ 自身が身を逸らした事も手伝い、斬撃は シラヒメの首を切断するには至らなかった。

「もう一撃——」

返す刀で更に一撃を加えようとするも、左側面からの荷重を乗せた シラヒメ の尾による反撃に回避を余儀なくされる。

後方に跳ぶと、正面を向いた シラヒメ と目が合い、そのカメラ・アイの向こう側にカグヤと名乗った娘の表情が見えた気がした。
嗤^{わら}っている。

同時、 シラヒメ の口腔部から砲身が展開され、エネルギーの収束が確認できた。

（荷電粒子砲！？ チャージが早すぎる——回避、いや駄目だ……！）

瞬間的に判断する。

「Eシールドを前面のみに多重展開！ 絶対後ろに通すなッ！」

『了解しました』

カグツチ を放棄し、 ヤミヒメ は四肢を広げて地面に機体を踏ん張らせる。

高密度のEシールドが最小面積に設定され、複数の層に渡って展開される。

回避は出来ない。荷電粒子砲の予測射線上にはマヘリア達がいる研究所がある。

「来るぞ！」

通常では考えられない速度でチャージされた荷電粒子砲が発射された。

アサトの視界がまばゆい光に包まれ、衝撃と共に ヤミヒメ のEシールドの力場と拮抗した荷電粒子が拡散されていく。

「くッ……耐えろ—— ヤミヒメ！」

耳をつんざく様な轟音と、けたたましい警報がコクピットを包む。

時間にすれば数秒。しかし、アサトにしてみれば数分とも思える時間が経過する。

荷電粒子砲の照射は止まらない。

ヤミヒメ の状態を示す表示画面に次々と被害状況が表示されは消えていく。クノキが高速でダメージ・コントロールを行っているのだ

「……………くッ」

アサトは歯を食いしばり、ひたすら心中で愛機を励ました。『耐える』——と。

やがて飽和状態となった荷電粒子砲とEシールドのぶつかり合うエネルギーが爆発した。

爆風が振動となってアサトの身体を襲う。

爆音で微かに耳鳴りがする。

気付けば ヤミヒメ はクレーター状になった地面の中心地にいた。

シラヒメ の姿はすでない。

『機体を強制冷却。コンバット・システム再起動。各部チェック中』
周囲は静寂に包まれ、クノキの状況報告のみが淡々と響いた。

「……………奴は？」

『索敵可能圏内に敵影無し。荷電粒子の残留反応により、追跡は困

難です』

あらかじめ答えを予測していたのであろう。気の抜けたアサトの問いに、やはり淡々とクノキが応えた。

「……逃げた——いや、痛み分けか……」

更に脱力したようにシートにもたれ掛かるアサト。

モード2による同調の影響でひどく疲れを感じる。更には荷電粒子砲を間近で受け止めた恐怖が今になってやってきた。

「………なんで生きてるんだろうな——俺は」

『……………』

独り言の様なアサトの呟きに、しかしクノキは答えなかった。

● ● ●

「……………」

戦場を離脱する シラヒメ のコクピットでカグヤは呆けたように虚空を見つめていた。

あの時、一瞬だがカグヤは ヤミヒメ のパイロットと——アサ

トと目が合った気がした。

あの目は自分と同じだ。生きていることに実感が持てない、死にたがりの目だ。

(……………あたし、どうして生きてるんだろう)

無意識にピル・ケースを取り出す——中身はすでに空になっていた。

(……………興奮してる？ それとも怖いの？)

自分の身体を抱くようにカグヤは腕を回して身を縮める。

(……………あたし、震えてる？ どうして？)

盲目のように両腕を前に出し、その手が空を掻く。

「……………ファイア……………来て……………」

後部座席に座っているであろう少女を呼ぶ。すでに彼女の身体から紅い光は見られない。

「うん？ ちょっと待って」

シートベルトを外し、ファイアは狭いコクピット内で、体重を感じさせない軽さでカグヤの前に降りた。

カグヤはその小さな身体に正面から腕を回し、少女の小ぶりな胸に顔を埋める。

そんなカグヤを不思議そうに眺め、きょとんとした表情でフィアは訊ねた。

「――？ 寂しいの？」

「……お互い様」

「そっか。そうだね」

納得したようにカグヤの頭を抱き、フィアは優しくなでる。

「大丈夫。カグヤには私がいるよ」

「……あたしは、生きていていいの？」

「うん。一緒に行こう？」

「……………」

壊れた娘と壊れた少女。

壊れかけの世界で彼女達は生きている。

第七話『想い、少しだけ…』

こんなにも近くにいるのに、私は貴方あなたと触れ合う事すら出来ない。
こんなにも貴方を感じる事が出来るのに、私は想いを伝える事すら出来ない。

貴方が望むなら、私はすべてをかけて貴方を護る。

貴方のためなら、この身を投げ出す事さえ厭いとわない。

だから……。

いや、見返りなどいらない。

求めてはいけない。

大切なヒトを護り抜けず塞ふさぎこんでいた私に手を差し伸べてくれた貴方。

貴方がいたから、私は在ある事が出来た。

貴方がいてくれたから、私は赦ゆるしを乞こう事が出来た。

貴方が……。

貴方は、そこにいますか？

貴方は、そこにいてくれますか？

×

×

×

第七話『想い、少しだけ…』

目が覚めると見慣れた天井が見えた。この三年間、ほぼ毎日見続けた天井だ。

それでアサトは今寝ているのが自分の部屋のベッドだと認識した。

「ん？ あ、やっと起きましたねえ」

アサトが声のした方に視線を向けると、ベッドの脇に置かれた椅子に座る娘が目に入った。

歳の頃なら二十代半ば。落ち着いて見えるが、実際はもっと若いかもしれない。

長く伸ばしたつややかな黒髪と黒い瞳。穏やかな微笑を浮かべた表情を見ると、この世のありとあらゆる悪意など本当は存在しないのではないかとさえ思わせる。

「大丈夫ですか？ 顔色は……いつも悪いですね」

娘はアサトの顔をのぞき込むように接近すると、冗談めかして言った。

彼女の名前はハルカ・クスノセ。

アサトの所属する クスノセ機獣派遣事務所 の所長であり、事

務所の最高責任者である。

のんびりとした美しい娘だが、彼女が見た目どおりの娘ではない事を知る人間は少ない。

「……顔が近い、離れろ」

「もう。そんな憎まれ口を言われると、このまま押し倒したくなっちゃうじゃないですか」

憚然^{ぶぜん}とした口調のアサトに対して、いたずらっ子のような笑みを浮かべるハルカ。

「無理矢理っていうのもいいですね……あ、なんかドキドキしてきちゃいました」

あお向けのアサトを組み敷くようにベッドに上がりこむハルカ。その表情はやや上気したように紅潮^{じつぽう}している。

長い黒髪が重力に引かれて、肩からさらりと流れ落ちる。

「まずはキスから——優しくしてくださいね？」

「主導権^{イニシアチフ}にぎってる奴がなに言ってる……降りろ」

「つれないですねえ。そんなにイヤなら抵抗してくれていいんですよ？ 出来ないでしょうけど」

ハルカの言う事は正しい。彼女の容姿からは想像も出来ないが、ハルカはある種の格闘技経験者だ。それを差し引いても細身のアサ

トの膂力^{じりよく}では彼女を引き剥がす事ことすら出来ないだろうが……。

「さあ、どうします？ 同意の上か、無理矢理かの違いですよ？」

「……悪魔め」

「悪魔でいいですよ」

頬^ほにかかる髪を右手で押さえながら、徐々にハルカの唇がアサトに迫る。

二人の身体が密着する。息遣いが、鼓動さえ聴こえる距離に近づく。

「……………冗談です」

囁^{ささや}くような声がアサトの耳元をくすぐる。

「よかった……目が覚めて、本当に……」

髪に隠れて表情は見えないが、その声がわずかに震えている。

「もう、起きないんじゃないかって……」

「……………すまん」

左手をハルカの頭を抱くように回し、その髪をなでる。

静寂が部屋を満たす。時間そのものが停止したようにしばしの沈黙が降りた。

——こんにちは。

「失礼します——」

控えめにドアをノックする音に続いて、声の主が入室してきた。

年の頃なら十五、六歳の美しい少女だ。

灰色がかった銀髪を肩口で切りそろえ、瞳は灰色がかった闇色、

アッシュブロンド

肌は抜ける様に白い。

彼女が持つ色素の薄い印象と、その身に纏（まと）う硬質な雰囲気からは、触れれば壊れてしまいそうな危うさが感じられる。

「……………」

いつそ美少女と呼んで差しつかえない美貌の少女は、その無表情を維持したまま、部屋の光景に言葉を無くした。表情からは判らないが、彼女なりに動揺しているのかもしれない。

「……すみません、取り込み中ですネ」

「大丈夫ですよ、もう済みましたから」

部屋を出ようとする少女をハル力が引き止めた。普段どおりの微

笑を浮かべているが、その瞳にはうつすらと涙が浮かんでいる。

「……ハルカさん、何かあったんですか」

ハルカの顔を見て、少女は訊ねた。

「うふふ、何かあったと思いますか？」

対するハルカは意味ありげに言葉を濁して見せた。

「何もしないなら、取り合えず降りてくれ」

組み敷かれたままの体勢でアサトがぼやく。

「あら、何かしてもよかったですか？」

「……言葉の綾^{あや}だ。早く降りろ」

ようやくハルカがベッドを降りると、アサトは上半身を起こして少女に視線を移す。

少女の名前はカスミ・シノザキ。

ここ クスノセ機獣派遣事務所 の所員である。学校には諸事情があり通っていない。

「……もういいみたいです。ご無事でなによりです」

相変わらずの無表情だが、少しは心配してくれていたらしい。

「ん、ありがとう——しかし、もちつと可愛げのある言い方は出来ないもんかね」

気を悪くした様子もなく、ため息混じりに言ってみる。

「……すみません、可愛げがなくて」

「失礼ですよ、アサト。カスミちゃんはこんなに可愛いのに。心配してもらえただけありがたいと思わないと、罰^{ばち}が当たっちゃいますよ」

「そうだな、罰が当たるのは嫌だしな」

天罰など信じてはいないが、文句を言っても仕方がない。贅沢を言ったらきりがない。

今はただ、こうしてここに戻ってこられた事にアサトは満足していた。

● ● ●

ハルカとカスミが去った部屋で、アサトは簡単に身^み支^{した}度を整えた。

やや伸び気味の黒髪と黒い瞳。痩せ型の体躯に物憂げな表情。

アサト・タチバナの特徴を挙げるならこんな処だろう。

年齢は二十歳をやや過ぎたばかりだが、物事を達観した老人の様な――むしろ諦めにも似た――雰囲気^{フレイム}が彼にはある。

『多くを期待しない』『なるようになる』が彼の基本スタンスだからかもしれない。

「ん……」

背伸びをすると背中^{せなか}の骨が鳴った。身体^{からだ}がだるい。

ハルカの話では丸二日眠っていたらしい。

白い ジェノザウラー―― シラヒメ との二度目の戦闘^{せんとう}の直後、 ヤミヒメ は機能停止^{システム・ダウン}、アサトは気を失い、マヘリアの手配した 教団 の グスタフ で機体ごとここへ運ばれたそうだが、アサトは記憶が抜け落ちたように何も覚えていない。

「同調の影響か……」

意識がまだ混濁^{こんたく}している。

―― シラヒメ 。 虚^{うつ}ろな目をした隻眼^{せきがん}の娘。 紅い少女。 D F
C 。 クノキ……。

「 ヤミヒメ ……」

愛機の名を呟くと、アサトは自室を後にした。

● ● ●

カスミはモニターを一心に見つめていた。

普段どおりの無表情に普段どおりの装いだが、ひとつだけ彼女の雰囲気と異にする要素があった。形の良い鼻先に乗せられた視力補正器具——いわゆる眼鏡めがねの存在だ。

常日頃から伶俐れいりな印象が強い少女だが、今はそれに加えて更に理知的な雰囲気を醸し出している。もしこの場にマヘリアが居たら、鼻血を噴いて倒れるか、教師然としたスーツを自前で用意したかもしれない。

それはともかく——

「……………」

現在カスミが観ているのは、前回の ヤミヒメ の戦闘記録だ。彼女はアサトに頼んで、毎回 ヤミヒメ の戦闘記録のコピーを受け取っていた。

たてまえ 建前は新たな戦術や装備の開発・研究のためだが、彼女にとっては実益を兼ねた趣味のようなものだ。

（やっぱりすごい……）

縁無し（ノンフレーム）のレンズを通して観る映像にカスミは心

中でそう思った。 ヤミヒメ に設置された定点カメラの映像な^{アングル}で視点は固定なのだが、それでも戦闘の緊迫感は充分に伝わってくる。

（ コマンドウルフ が ジェノザウラー と対等に渡り合うなんて）

ただでさえ ジェノザウラー は特殊なゾイドなため、元々の生産数が少なくカスミも実物は見た事がない。しかし、残された戦闘記録や性能緒元^{スペック}を信用する限り、並みのゾイド——それこそ コマンドウルフ で太刀打ち出来るような機体ではない。

しかし、カスミはそれを可能としている要因^{ファクター}を知っていた。

ヤミヒメ ——その正式名称である コマンドウルフ D F C の末尾に記されている D F C と呼ばれるシステムの存在だ。

何の略称かは不明だが、尋常ならざる力を与える ヤミヒメ の切り札である事は間違いない。

カスミはモニターの脇に別の表示窓を開き、^{ウィンドウ} ヤミヒメ のスペックを表示させた。もう何度も読み返した各種データが記載されている。

D F C ——それは一種の『ゾイドコア活性装置』だとカスミは考えている。かつて研究されていた オーガノイド・システムのようない。

しかし、残された資料ではそのすべての疑問に回答がつけられない。例えば、通常時にはその起動に制限^{リミッター}が掛けられている事がそう

だ。

DFC ファースト・リミッター 第一段階の解除——これを『限定起動』と呼ぶ。

これによりゾイドコアが活性化し、運動性が上昇。更にEシールドの展開が可能となる。

そして第二段階セカンド・リミッターの解除——これが『モード2（ツー）』だ。

こうなると最早人間の反応速度や動体視力でゾイドを操縦する事は不可能（……………）だ。そこでパイロットがゾイドと同調し、文字通り『人機一体』となることでその問題を解決した。ゾイドの手足を自分のその延長とし、その感覚すら同調させることで。

無論、この状態はパイロットの肉体・精神に多大な負担を掛け、場合によっては自我を維持できず、ゾイドそのものになってしまう危険性も孕んでいる……………。

「……………！」

カスミが戦闘記録の方へ目を向けると、戦況は最終局面を迎えていた。

くだん件の『モード2』を使い、更にカグヅチを抜刀モードにして
とっかん呐喊するヤミヒメ。

その機体からは各所から流血するように紅い光が漏れ出している。

そして、白いジェノザウラーの展開するEシールドに接触す

るかと思われた瞬間、 ヤミヒメ の正面に青白い光の奔流^{ほんじゅう}が発生し、Eシールドと接触、対消滅を起こした。

「……これが、 エネルギー・ブラスト」

思わず声に出してしまった単語をカスミは反芻^{はんすう}した。

Eシールドとは準物質化したエネルギー（E）が、ある種の『力場』によって任意の空間に固定された『壁』のようなものだ。

では、発生したエネルギーが力場によって固定されなかったら？
エネルギー・ブラスト とはこの応用だ。

機体から発生し、力場によって固定されなかったエネルギーは外に向かい、やがて拡散する。有効範囲は狭いが、使いようによっては強力な武器となる。

無論、全てのEシールド搭載機に可能という訳ではない。同調によって拡大したパイロットの空間把握能力と、クノキによる高い演算処理能力がそろって初めて可能となる芸当だ。

「……………」

記録映像が終了し、待機状態となったモニターに写る自分の顔を見つめたまま、カスミは黙考した。

（本当になんなのだろう、この ヤミヒメ というゾイドは——）

初めはただの憧れだった。強さの中に高潔さを秘めた——綺麗な子。

けど、今は……。

『ヤミヒメ はアサトがある人から引き継いだものなんです』

先日ハルカから聞いた言葉が思い出される。

意を決したカスミはデータをまとめると、ヤミヒメ の居る格納庫^{ンガー}へ足を向けた。アサトもそこにいるはずだ。

（訊^きいてみよう、本人に直接）

•
•
•

事務所兼住居^{けん}である本部棟と同じ敷地内にある格納庫——通称・ハンガー。そこでアサトは愛機を見上げていた。

地球種でいう処^{ところ}のオオカミの姿を象^{かたど}った機体。

コマンドウルフ と呼ばれる機種だが、この個体はそれとは別にヤミヒメ という愛称で呼ばれている。

その漆黒に塗られた機体を、アサトはただじっと見つめていた。

「――アサトさん」

背後から掛けられた声に振り向くと、銀髪の少女が立っていた。

その氷のような美貌も、感情が読めない表情もすでに見慣れたものだ。だからアサトは少女に感じた違和感の正体に気付くのに数秒を要した。

「イメチェンか？」

「？」

突然の事に何を言われたか判らなかった少女は、はっとして自分の視界と世界を隔てているものの存在に気付いた――いや、正確には思い出したという方が正しいだろう。眼鏡だ。めがね

カスミは眼鏡を掛けた自分の顔が嫌いだった。あくまで本人の意見だが、ただでさえ表情をつくるのが苦手なのに、この上メガネを掛けると、より近寄りがたい雰囲気を出してしまう――そう感じているのだ。

だからカスミは人前では裸眼で通していたのだが……。

「そ、そんなんじゃないありません……たまたま掛けていただけです」

そう言つと彼女にしては慌てた様に眼鏡を外すと、腰のポーチにしまった。

「そうか？ 俺は結構いいと思うぞ、知的で」

「……からかわないでください」

わずかに朱み^{あか}の差した表情を悟られないため、うつむき気味になるカスミ。

（どうしてこの人は、平気でこういう事が言えるんだろう）

アサトの言葉に他意はない。なのに自分だけが心を乱している事に、彼女は理不尽だと知りつつも苛立ちを感じた。

「——で、なにか用だったんじゃないのか？」

先ほどの話題には拘泥^{こうでい}せず、アサトはカスミに促^{うなが}した。

「あの、これを」

そう言っ^{メディア}て彼女が差し出したのは一枚の記録媒体だった。

「なんだ？」

「前回の戦闘記録を分析して組んだ補正プログラムです。カグツチはただでさえ、ヤミヒメが扱うにはサイズが大き過ぎます。通常時ならまだしも、抜刀時は重心が前方に集中^{トップ・ヘビー}になるため、バランスが取りづらいはずですよ」

「まあ多少は……」

いつになく饒舌^{じょうぜつ}なカスミに、アサトは気圧^{けあつ}されたように応える。

「そこで抜刀時の機体の重心バランスや力のモーメント、脚部の接地圧、それから――」

こうなるとカスミの話は長い。普段の反動なのか得意分野のためかは判らないが、恐らくはその両方だろう。ヘタに口を挟むより、黙って聴いている方が賢明だと知っているアサトは適当に相槌を打ってやり過ごした。

「――という訳です」

約十分に渡る講義を終えた彼女は、『なにか質問は?』と言わんばかりに間を置いた。

「……………」

「……アサトさん、私の話、聴いてました?」

無言で応じるアサトに、カスミは出来の悪い生徒を見るような目を向けた。

「あー……、要はそのプログラムをインストールすれば、カグツチの抜刀時の安定性が上がる、と」

「要約するとそういう事です。と言っても、数値上は八パーセント。体感できるほどの変化は望めませんけど……」

そこまで言う就先程までの饒舌ぶりは鳴りを潜め、カスミは普段の様子に戻ってしまった。自分の力不足を嘆くように。

しかし――

「いや、充分だ。ありがたく使わせて貰うよ」

返ってきたのは賞賛の言葉だった。

カスミの厚意に気を遣った訳ではない。戦場ではわずかな差が生死を分ける局面が多々ある。戦場に身を置くアサトはそれを身をもって知っている。

だからこの言葉に嘘偽りはない。

「あ、いいえ……」

嬉しかった。自分のしたことで感謝される――それは自分の存在が認められたということだから。

アサトの顔を正視できず、カスミは眼前に佇む機体――ヤミヒメに目をやった。その変わらぬ美しさにカスミは心奪われる。

しかし、今のヤミヒメからは、その機体を持つ本来の存在感が感じられなかった。まるで心を閉ざしているようにカスミは感じた。

「たまにこうやって塞ぎこむんだ、このお姫様は」

カスミの疑問を察したのか、アサトが口を開いた。

「あの傷の事、気になるか？」

ヤミヒメ の左の首筋には二条の爪痕がある。それはカスミが初めて ヤミヒメ を見た時から気になっていた事でもある。

「……はい」

「アヤカの事はどこまで聞いてる？」

「ヤミヒメ の元のパイロットで、 教団 のシスター。そして、アサトさんの師匠だったと。……どんな方だったんですか？」

アサトの顔色を窺^{うかが}いつつ、どこまで踏み入っていいものかと恐る恐るカスミは訊いてきた。

「綺麗なヒトだったよ。それでいて屈託なく笑うと子供みたいで。捉えどころがなくて、自分のルールで生きてるみたい……そんなヒトだった」

懐かしむように遠い目をするアサトの言葉を、カスミは黙って聞いていた。

「あの傷はアヤカが最後に ヤミヒメ に乗った戦闘で受けた。それが原因でアヤカは意識不明の重態。二度と ヤミヒメ に乗る事はなかった……」。

あの傷は戒^{いまし}めなんだと。大事なヒトを護れなかった自分を罰するための」

ゾイドには自己修復機能がある。人間の肌のように、装甲の傷であれば自分で治すことができる。それをしないという事は、ヤミヒメ が傷を消す事を拒んでいるという事なのだろう。

「以来、俺が戦闘で傷を負ったり、今回みたく寝込んだりすると、自分を責めて心を閉ざすようになった。アヤ力を失った時の事を思い出して、俺もそうなるんじゃないかって不安になって……」

漆黒の狂襲姫　なんて呼ばれてるが、強がってるだけで、本当は寂しがり屋で臆病なんだよ」

アサトは　ヤミヒメ　を見上げて、そこで言葉を切った。

ハンガーに静寂が訪れる。

「——だったら……」

先に口を開いたのはカスミだった。

「だったら、早く慰めて——安心させてあげてください」

アサトの話を聞いて、カスミはいたたまれなくなった。

「私だったら……そうして欲しいです——」

ヤミヒメ　の気持ちが痛いほどよく判った。『彼女』は自分と同じだ。強がってるけど、本当は誰かに手を差しのべて欲しい。

「……それは一般論か？　それとも——乙女心ってやつか？」

ヤミヒメ に向けていた視線をカスミに向け、平坦な口調でアサトは訊ねた。

「……ぼくねんじん 朴念仁のアサトさんには、教えてあげません」

先ほどの苛立ちの意趣返しいしゅがえとばかりに、カスミは意地悪く言ってみた。それは普段の彼女の表情を見慣れていなければ気付かないような微妙な変化だったが――

「手厳しいな」

微苦笑を浮かべながら、アサトは呟いた。

「ありがとうな、カスミ」

「なにがですか？ プログラムのお礼ならもう……」

「それでもだよ」

「………はい」

アサトはやれやれとため息をひとつ吐くと――

「そんじゃあ、お姫様を慰めにいきますか」

そう言つと彼は愛機のコクピットに乗り込んだ。

● ● ●

五感——視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚。

人間はこれらの感覚をもって自らの置かれた状況を認識するが、アサトが最初に感じたのは触覚だった。

後頭部に感じる柔らかな感触。どうやら枕のようなものに頭を載せて寝ているらしい。

周囲はただ静かで、聴覚から得られる情報はない。

人間は多分に視覚に頼った生き物だと、今更ながら思い知る。

ぼんやりとした意識で^{まぶた}瞼をゆっくりと開く。光が目に入り像を結ぶ。

「——やっと起きたか」

声と共に、アサトの視界に自分を見下ろす娘の顔が入った。

二十歳になるかならないかくらいの若い娘だ。長い漆黒の髪を胸元まで垂らし、後ろ髪は高い位置で一本に纏^{まと}められている。いわゆるポニーテールだ。

「起きたのならば早く降りろ……膝^{ひざ}が痛くてかなわん」

橙色の瞳をアサトから逸らしながら付け加える。不機嫌そうな口^{くちく}

調だが、娘の表情に嫌悪の色はない。むしろ嬉しい気持ちを悟らせまいと、わざと不機嫌を装っているように見える。

「せつかく逢い^あに来たのに、つれないな」

娘の膝から頭を起こしつつ、内心で苦笑するアサト。

「べ、別に私が頼んだ訳ではない」

応える娘は視線を合わそうとせず、そっぽを向いたままだ。

アサトは改めて娘と正面から相対^{あいたい}した。

か弱さとは無縁な、凜とした強さを感じさせる美しい娘だ。

身を包む衣装は、ゆったりとした面積の広い漆黒の布地を、『オビ』という紅い幅広の腰巻でくくった『キモノ』と呼ばれるものだ。東方大陸の民族衣装で、主に冠婚葬祭などの行事や式典で女性が着る正装である。

キモノ自体が頻繁に目にするものでないため、それだけでも娘の容姿を目立ったものになっているが、更に彼女の特異性を際立たせているものがある。

まずは耳だ。

数が多いのでも少ないのでもない、人間と同じく左右にひとつずつ備わっている——しかし、その形状が違っている。ケモノを思わせる三角形に近い形状をしており、位置も側頭部ではなく頭頂部に近い。更に腰の低い位置に、決して人間には備わっていない器官が

ある。こちらでもケモノを思わせる豊かな毛並みに覆われている——尻尾だ。どちらでも娘の表情に合わせてか、ぴくぴくと動いており、作りものではないと判る。

そう——彼女は人間ではない。

「まあなんだ、こうして逢うのは久しぶりだな——ヤミヒメ」
●●●

「……まったくだ——我が主よ」

取り成すようなアサトの言葉に、ヤミヒメと呼ばれた娘はようやく目を合わせて、拗すねたように言った。

●●●

ゾイドは死ぬとその体内からゾイドコアを排出する。これが言わば『ゾイドの卵』だ。

すべてのゾイドは子を生む事が出来る。だからゾイドに性別は無い——無い、とされている。

ゾイドの性別に関する意見は諸説あるが、具体的な結論は出ておらず、半ば放置されているのが現状だ。

兵器として、労働力として過不足なく扱え、ある程度的人工繁殖

も可能となれば、性別など^{さまつ}瑣末な問題だからだ。

道具は使えればいい。構造や原理など、使う人間には興味^{らちがい}の埒外だ。

しかし、『知らない』ことは『存在しない』ことと同義ではない。

● ● ●

その部屋は限りなく『和』を意識した空間だった。

床には『タタミ』が敷かれ、壁は『ショウジ』で仕切られ、光源は『アンドン』と呼ばれる照明具が備え付けられていた。

東方大陸は惑星・地球の『ニホン』の文化体系を色濃く反映した土地だが、いわゆるマニアか一部の好事家^{こうじゆか}でもなければ、ここまで『和』を再現した空間は所有してはいまい。

ただし、ここは^{リアル}現実ではない。ヤミヒメ^{メモリ}の記憶装置の空き領域^{マトリックス}に創られた仮想空間だ。

そして、今アサトと相対している、ケモノの耳と尻尾を持つ娘——ヤミヒメの姿も、ヒトとコミュニケーションを円滑にするための対人インターフェイスでしかない。

ゾイドに性別はない——しかし、『彼女』が女性の姿を採^とって

るという事実は、 ヤミヒメ が『女性格』である事を示している。
もつとも、そんなことはアサトにも、当の本人にもどうでもいい
事ではあった。

「……………」

言葉が出なかった。

話したい事はたくさんあったのに、いざ彼を目の前にするとなに
も言えなくなってしまう自分がいた。

嬉しいはずなのに、それを素直に表現できない。

つい、心にもないことを言っ、そっけない態度をとってしまう。

彼にはそんなヤミヒメの心は見透かされているので、取り繕う事
に意味はない。

それでも、つまらない意地をはってしまう……。

「それで、なにをしに来た。無様な私を笑いに来たのか？」

まだ。素直に嬉しいと言えはいいものを。

「んー？ 別に——あ、骨、食うか？」

わざわざ用意してきたのか、アサトはペット用の骨を取り出した
……イヌ用の。

「アサト……何度も言わせるな。私は誇り高いオオカミだ、イヌところなんぞと一緒にするな！」

「ん、そうだったな。孤独を愛する、けど寂しがり屋の——可愛いお姫様だったな」

「……………」

いつもこうだ。ヤミヒメがいくら邪険にしても、彼は嫌な顔ひとつせずに彼女に付き合ってくれる。

「ふん、可愛くなどない。私なんぞに構っていないで、あのカスミとかいう小娘とよろしくやっていればよかるうに」

「なんだ、妬^やいてるのか？」

「言っている。自意識過剰も甚^{はなは}だしいな」

「そっか……それは残念」

特に落ち込んだ素振りも見せず、言葉面^{ことばづら}だけでアサトはそう言った。

つくづく自分が嫌になる。口を開けば憎まれ口を叩くことしか出ない。

「……………」

「……………」

再びの沈黙。

本当は判っている。アサトはヤミヒメを慰めに來たのだ。

しかし彼はそう言わない。

言えば、へそ曲がりの自分が意固地いこちになってしまうと知っているから。

「——なあ、ヤミヒメ」

「……なんだ」

判っていた——アサトの次の言葉が。

「触さわっていいか？」

「……………勝手にしろ」

せめてもの抵抗と、わざとぶっきらぼうに言ってみるが、これも意味などない。

アサトの右手が、ヤミヒメの黒い髪をやさしく梳すく。

そして左の頬ほおにそっと触れる。

気恥ずかしさと、彼に触れられている嬉しさで頭がぼーっとなり、ヤミヒメは何も考えられなくなる。

ヤミヒメもアサトも話すのはあまり得意ではない。

言葉は不便だ。重ねれば重ねただけ誤解を生む。

本音を押し隠してしまう。

だから彼はこうしてぬくもりを伝えようとしてくれる。

「んっ……」

彼の手が首筋に下りる。びくんと身体が反応してしまう。

「痛むか？」

「別に……好きにすればいい」

声が出てしまった恥ずかしさを隠すため、俯^{うつ}むいて言う。

「傷、治さないのか？」

「……………」

アサトが触れている首筋には、二条の傷跡がある。

ヤミヒメが事あるごとに塞ぎこんでしまう原因となった傷跡。

「まだ自分が許せないか？」

「許せる訳がない——いや、許してはいけない。私は愚^{おろ}かだ。この傷を消してしまったら、また私は同じ過ちを繰り返してしまう。だから、この傷は戒めだ。私の罪を忘れないための」

そうだ。アヤ力を失った時のような思いは、もう二度としない。

なのに――

「なのに、私はまた貴方を傷つけてしまった。貴方を護ると誓ったのに……」

「そんなに思いつめるな。こうして生きてるんだ、なににも問題ない」

「……………」

言葉が出ないヤミヒメにアサトは嘆息し、

「――あ……………」

次の瞬間、彼女は彼に抱きしめられていた。

広いとは言えない胸板。お世辞にも逞しいたくまとは言えない体躯。

それでも安心した。

アサトに想われていると実感出来た。

「なあ、ヤミヒメ。俺は一般論は嫌いだ。言葉でならなんとも言える。だから、言葉で納得させようなんて思っちゃいない」

彼の胸に顔を埋めたまま、次の言葉を待つ。

「俺とおまえは一蓮托生だ。^{いちれんたくしょう}これからも——最後まで」

「……………」

「だから——あまり自分を責めるな」

「命令か？」

「命令……かな」

「心得た」

ヤミヒメの応えに満足したのか、彼女を抱く腕に一度力を込めると、彼は身を離れた。

「あ……………」

名残惜しげに彼の顔を上目遣いで見上げる。

「ん？」

「その、なんだ……命令を聞く代わりに、私からも頼みたい事がある」

「ん、なんでもいいぞ」

「目を、瞑^{こぶ}ってくれないか」

「ああ」

彼が目を閉じたのを確認し、ヤミヒメは呼吸を整える。

「私はここに改めて宣言する。我が主を、私の全身全霊を持って護り抜くと」

アサトは無言で聞く。

「これからも私と共に在^あることを、貴方は受け入れてくれるか？」

「ああ」

気負いも迷いも感じられない。簡潔なまでの了承。

「ならば、これは契約の証だ——」

ヤミヒメはアサトの両肩に両手を乗せ、少し背伸びをする。

逡巡^{しゆんじゆん}は一瞬、彼女は彼の唇に自分のそれを重ねた。

●
●
●

目が覚めると橙色^{とうじきよく}のキャノピーが目に入った。

「マスター、大丈夫ですか？」

続けて、女性のそれを思わせる機械^{マシン・ヴォイス}音声^{じだ}がアサトの耳^{じだ}を打つ。

「……クノキ？」

『はい。心拍・脈拍ともに正常。意識の混濁も認められません。正常に通常空間への復帰を確認』

アサトが居るのは言うまでもなく ヤミヒメ のコクピットだ。

「そうか——」

『同調』による意識の共有——俗に精神感応せいしんかんのうと呼ばれる現象。

アサトが行ったのはまさにそれだ。

クノキのサポートにより、『同調』を意識レベルに絞って、ヤミヒメ の深層意識に送り込む。

モード2使用時と同じく、自我の崩壊——ヤミヒメ がアサトを帰さない可能性があるため、クノキはこの方法を使いたがらないが。

「……………」

アサトは自分の口元を覆うように右手を翳かざした。わずかに残る唇の感触……。

『……どうかされましたか？』

心なしか、クノキの口調が陰しく聴こえる。

「いや、なんでもない——なあ、 ヤミヒメ」

——ウォオンッ！

主の言葉を肯定^{こうてい}するように、漆黒の乙女は吠^ないた。

つづく

第八話『デストラクター』

初体験の相手は実の父だった。

母の火葬が終わった日の夜。まだセックスという行為すら知らなかったあたしは、父に無理やり犯された。

血を流し、泣きながら痛いと懇願するあたしに構わず、父は乱暴に腰を振り続けた。

行為を終えた父は泣きながらあたしに謝った。何度も何度も、あたしを抱きしめて謝った。

今にして思えば、父は壊れてしまっていたのだろう。

誰よりも母を愛していた。

そして、人一倍やさしい人だった。

だから心が壊れてしまったのだろう。

母の居なくなった世界で、唯一、死んだ母の面影が残るあたしにすぎたのだろう。

母の死因は通り魔による殺害だった。何の背後関係もない金品目

当ての行きずりによる犯行。それだけに犯人の特定も出来ず、ろくな捜査もされずに事件は風化していった。

日を追うごとに母に似ていくあたしに対する父の暴行は、性的なものだけでなく、暴力を伴うようになった。殴られ、蹴られ、首を絞められることもあった。

その度に父は泣きながらあたしに謝った。

あたしを抱きしめて、頭を撫でてくれた。

だからあたしは父を憎めなかった。何度も乱暴をされても、最後にはやさしく抱きしめてくれるのが嬉しかった。

母を失った悲しみをあたしにぶつけることで父は心の安定を保っていた。

なら、あたしはどうすればいい？

どうやって自分を守ればいい？

ねえ、教えてよ。

×

×

×

第八話『デストラクター』

シャワーの水滴が娘の身体^{からだ}を伝って落ちていく――

女性だけが持つ緩やかな曲線^{なま}は艶めかしくも美しい、一種の芸術品の様ですらあった。

肌の色は白く、長い腕と脚は病的なまでに痩^やせている。腰も同じく細い。それでいて胸はまったく痩せていない。むしろ豊満と呼ぶべきだろう。両腕を少し寄せるだけで、谷間が出来る。

「……………」

だが、娘はそれが嫌だった。胸が大きいと服が自由に選べなくなる。彼女の正装であるゴシッククロリータ等が顕著だ。

憂鬱な気分で、ふと目の前の鏡に映った自分の姿を見る。

そこに映っているのは二十代前半くらいの若い娘だ。水に濡れた長い黒髪は長さがあちこちで違っている。これは彼女が自分で切っているためだ。見ず知らずの他人に髪を触られる事を思うと鳥肌が立つ。瞳の色は黒。普段は眼帯で隠している右目は閉じている。視線を下にずらせば、左手首には何条ものリストカットの痕が見える。

美人だ。

これらの『特徴』に目をつぶれば、美しい娘と言える。

だが、彼女の美貌を気付かせ難くしている要因がもうひとつある——表情だ。

無表情ならまだいい。しかし娘の隻眼は、どこか遠くを見つめている様に焦点が合っていない。

「……………」

その視線は虚ろで、空虚で、見る者を不安にさせる。

カグヤ・イザヨイ。

それが彼女の名前だ。

コール・サインは『デストラクター』。

カグヤの特性を知っている者はこうも呼ぶ。

魔女——と。

十　十　十

がらんとした格納庫に一体の戦闘機械獣——ゾイドが鎮座^{ちんざ}していた。

ゾイド——それは惑星^{ズイ}Z-1に生息する金属生命体の総称である。

ゾイドは自ら戦う意思を持ち、ヒトを操縦席に乗せる事で戦うための兵器となる。

だが、種類や個体によっては搭乗者を選んだり、戦う事を拒否するものも居る。ヒトと同じだ。気に入らない相手とは組みたくないし、戦う事に対して臆病な性格の個体も稀^{まれ}に存在する。

それが、この　ライガーゼロ　と呼ばれる個体だ。

ライガーゼロ。

全高約八メートルのライオン型ゾイドである。『素体^{そたい}』と呼ばれる黒い機体^{ボディ}に白い装甲^{アーマー}。目立った武装は無い。どこまでもシンプル

で、生まれたままの姿に近い。

ヒトの保護下で生まれ育ったものでなく、完全な野生体をベースに開発されたゾイド——それが ライガーゼロ である。

野生体ならではの荒々しい生命力にあふれる機体。

そのはずだった。

だが――

「どついう事なのかねえ」

手元のコンピュータ端末を操作しながら、男はぼやいた。

見た目通りならどこにでも居そうな四十代くらいの中年だ。ぼさぼの髪には白髪がいくつか見える。服装はよれよれの白衣——彼はゾイド専門の技術者である。性格も『研究以外興味が無い』と周囲からは思われているし、本人も否定はしていない。

年齢不詳。経歴も不詳。本名も不詳。

周囲からはただ 教授 と呼ばれている。

ちなみにZOIETEC不正規技術開発部門——通称 ファントム
チーフ
の最高責任者でもある。

彼が今、取り組んでいるのは発見されたばかりの ライガーゼロ だった。すでに絶滅していたであろうと思われていたそのゾイドは、偶然発見された海底洞窟の中で、ゾイドコアが休眠状態で保存

されていた。しかも『シュナイダー』『イエーガー』『パンツァー』と呼ばれる三つのチェンシング・アーマー・システム（CAS）も同様に保管されていた。

言わば宝の山だ。

これを見つけた ZOI TEC 社は情報漏洩を防ぐため緘口令を敷き、ファントムに技術解析を一任した。

「ゾイドコアの起動は完了。コンバット・システムも問題なし」

教授 がばやいているのは、件のライガーゼロの事だ。前言通り休眠状態だったゾイドコアの再起動は完了し、コンバット・システムを始めとする微調整も問題なく終わった。だが、ゾイドコアの出力が安定しない。まるで怯える様に不安定なのだ。

「となると、やはり問題はパイロットか……」

面白そうに——実に楽しそうに 教授 は言った。

判らない事は解明したい。

それが技術者という人種の正しい在り方だと彼は認識している。特にゾイドという存在は面白い。古からヒトとゾイドは共生してきた。にもかかわらず、未だにゾイドの謎は多い。だから彼はゾイド専門の技術者となった。ライガーゼロ などという稀少な機体の解析を命じられた時には、嬉しさのあまり失神しそうになった程だ。

彼はゾイドを愛している。

だがゾイドは彼を愛してくれない。

そこがまた面白いと思う。

教授　という男は、つまりそういう人物だ。

＋　　　＋　　　＋

シャワーを終えたカグヤは髪を乾かし、すでに普段着と化しているゴシッククロリータを身に纏^{まと}う。フリルとレースをあしらった、黒と白のコントラスト。少女性を含みながら、どこか退廃的な意匠はある種のファッションの極致だと思わせる。

身支度を整えるとカグヤはぼーっと天井を見つめた。

「……………」

静かだ。

普段はうつとうしいくらいに付きまってくる少女が居ない。

紅^{あか}い髪と瞳の少女——ファイア。

彼女は自身の定期検査と、シラヒメの換装作業に立ち会っために別の場所に行っている。だからカグヤはひとりだ。

「……………」

なんだろう、この感覚は？

心にぽっかりと穴が空いている様な不思議な感覚。

フィアと出逢って、パートナーになって、まだそんなに経っていない。にもかかわらず、フィアはすっかりカグヤに懐いてしまった。

自分もまたそうなのだろうか？

フィアと居るのが当たり前で、彼女が居ないと物足りないと感じているのだろうか？

それは寂しいという感覚。フィアと出逢うまで忘れていた感情だった。

そこへ――

――ピピッ！

短い電子音がカグヤの^{じだ}耳朶を打った。

教授 からの呼び出し（コール）だ。

カグヤは内線に通じている電話の受話器を取って短く応対すると、すぐに受話器を戻して部屋を出た。

＋　　　＋　　　＋

呼び出しに応じたカグヤを待っていたのは一体のゾイドだった。教授の説明によると、恐らく現存している最後の機体だそうだ。

ライガーゼロ。

戦局に応じて装備を変更する事を前提に開発された、ある意味で万能と呼べるゾイド。

ファントムに回ってくるゾイドは特殊なものばかりだ。試作機、試験機、あるいは公には出来ない類の技術たくいを積んだ実験機。

ゾイドの性格もそれぞれで、おとなしいものも居れば、凶暴なものも居る。

カグヤはそれら様々なゾイドに乗ってきた。そして、その全てを完璧に乗りこなして見せた。

それは本来あり得ない事だった。

ゾイドと搭乗者には相性があるからだ。だがカグヤに限って言えば、これが当てはまらない。どんなゾイドであっても、カグヤが乗

ると従順になり、彼女の期待に応えようと凶暴化する。

故に彼女はこう呼ばれる。

『ゾイドを惑わす魔性の女』—— 魔女 と。

それは完全野生体をベースとした ライガーゼロ であっても例外ではなかった。

「ライガーゼロ のゾイドコア出力、安定域に入ります。なおも活性化」

「計測機に異常は認められず。計測を続けます」

「パイロットのバイタルにも問題は見られません」

オペレーター達の報告を聞きつつ、教授 は自らも送られてくるデータの解析に余念が無かった。

やはりカグヤの性質は特別だ。何がゾイドをそうさせるのかは不明だが、カグヤの搭乗したゾイドが異常に活性化——凶暴化するの
は間違いない。それでいてカグヤの命令には逆らわない。まったくもって不思議だ。

「彼女はまるですべてのゾイドに愛されている——と言った感じがですね」

何気なく呟いたのであろうオペレーターの言葉に、教授 は果たしてそんな事があり得るだろうかと黙考した。

十
十
十

かんとうしゃ
感応者。

それはゾイドに対して特殊な影響力を持つ者達の総称だ。例えばゾイドの感情や意思を『言語』として理解出来たり、ある種的能力を強化する事が出来る。今でこそ特殊な能力だが、昔は——まだゾイドが戦闘機械獣となる前は、誰もが当たり前前に持っていたとも考えられている。

だがカグヤにはゾイドの気持ちは判らない。何故、^{なぜ}自分が搭乗したゾイドが凶暴化するのか判らなかった。彼女はただ純粋に願うだけだ。

——壊したい。

——すべて壊れてしまえばいい。

——この世界の何もかも。

そう願うだけでゾイドが凶暴化する。そのゾイドコアが活性化する。

「……………」

コクピットに座ると落ち着く。絶対的な力が自分を護^{まも}ってくれて

いる様な気持ちになる。

『鋼鉄の子宮』——まるで母親の胎内に居るかの様な錯覚を覚える。
だがそれだけでは満たされない。

心の安寧^{あんない}を得たなら、次は身体で感じたい。

だから——

「……インストレーション・システム・コール——シュナイダー」

『お前さんならそう言うと思ったよ』

カグヤが搭乗している ライガーゼロ のコクピット。そのモニターに 教授 の映像が小窓表示^{ウインドウ}された。

『シュナイダーに換装する。換装システム始動、C A S はシュナイダーだ』

教授 の宣言に続く様にオペレーター達が換装シークエンスを開始する。

『了解。換装システム始動。C A S はシュナイダー』

『換装アーム展開。タイプ・ゼロからシュナイダーへ』

『システムに問題無し。換装率七〇パーセント』

カグヤが外に目を向けると、 ライガーゼロ を挟み込む様にし

ている両側の壁から何本もの作業アームが展開し、次々に装備が換装されていく。

CAS——チェンジング・アーマー・システムとは、名前の通りアーマーチェンジシステム武装を変更する機構だ。ライガーゼロのそれは戦局に応じて全身の装備を変更するという発想で開発された。コンセプト

高速戦闘用の『イエーガー』。

格闘戦用の『シュナイダー』。

砲撃戦用の『パンツァー』。

これらに基本形態である『タイプ・ゼロ』を加え、ライガーゼロはあらゆる戦況に対応が可能となった。

だがベースとなる完全野生体の確保の難しさに加え、一体あたりの製造コストがブレードライガーの三倍以上という量産性の低い機体でもあった。

もっとも、そんな事はカグヤの知るところでは無かったが。

「……ライガーゼロ シュナイダー——CAS、コンプリーテッド換装完了」

やがて作業アームがタイプ・ゼロのアーマーを収納し、換装作業が完了した。時間にして一分とかかかっていない。

『よし、良いタイムだ。機体に問題は無いか？』

「……ええ、問題無い」

教授　の問いにカグヤは短くそう応えた。

『ならさつそくテスト開始だ。ターゲットは無人浮遊砲台二。機だ。
弾は模擬弾だが、当たればそれなりに衝撃があるから注意しろよ』

「……了解」

やはり短く返答してカグヤは　ライガーゼロ　シュナイダー　を
格納庫から出撃させた。その身に纏うのは橙色のアーマーオレンジに変化し
ている。特徴は七本のレーザー・ブレードと五基のEシールド・ジ
エネレーターだ。絶大な攻撃力と防御力を備え、増えた重量は全
身のスラスターで補う。膨大なエネルギーを消費するため稼働時間
は短い上、飛び道具は無し。ただひたすら敵に接近し、短時間で戦
闘を終わらせる必要がある。

非常に極端な装備だが、これはイエーガーやパンツァーにも言え
る事である。長時間の高速戦闘は搭乗者の身体に負担がかかるし、
残弾が無くなれば補給に戻らねばならない。どのCASにも一長一
短がある。

カグヤが最初にシュナイダーを選択したのは単に彼女の嗜好によ
るものだ。レーザー・ブレードで敵を切断する——それはもつとも
判りやすい『破壊』行為だから。

ライガーゼロ　シュナイダー　がドローンを補足する。それは簡
易型マグネッサー・システムを積んだ浮遊移動砲台だ。無秩序に移動し、射程圏内に入った敵を砲撃する無人機。サイズはSSゾイド
と同程度で、運動性は低い。

カグヤの ライガーゼロ シュナイダー がドローンの一機に跳びかかる。頭部にある五本の小型レーザー・ブレードが展開し、それを両断する。

——まず一機。

次は両腰に装備された大型レーザー・ブレードだ。長大なそれが振り回される度に一機、また一機と浮遊しているドローンが切断されて墜ちていく。

これだ。この感覚こそカグヤが待ち焦がれていたものだ。

破壊する。ただ破壊する。

その時だけ空っぽな自分が満たされる。嫌な事は考えなくていい。

それは悦楽^{えつらく}。

何事にも代えられない究極の快樂。

「……………はあ——」

切なげな吐息^{といき}がカグヤの口から漏れる。その表情は倒錯^{たうさく}的で、喘^{あえ}ぐ様な声は官能的だ。

実際、カグヤの感じている興奮は性行為のそれに近い。気分は高揚し、身体の芯が熱くなる。今にも絶頂に達してしまいそんな快樂を感じながら敵を撃墜していく。

残りドローン数——一。

そのタイミングでコクピットの表示卓ディスプレイに文字が表示された。

B U S T E R - S L A S H s t a n d b y r e a d y

カグヤはそれを確認すると、

「……バスター・スラッシュ——」

と、恍惚しんじつとした声音こゑでディスプレイの表示を読み上げた。

すると展開されていた ライガーゼロ シュナイダー の頭部の五本の小型レーザー・ブレードが輝いた。青い閃光を放ち、機体の前方に角錐状かくすいのエネルギー刃を形成した。その形状は一角獣ユニコーンのツノを想起させる。

巨大なレーザー・ブレードそのものとなった ライガーゼロ シュナイダー が最後のドローンに突撃する。ろくな運動性も装甲も持たないそれは、なす術も無く、原形を留める事とどすら出来ずに撃墜された。

——グウルルルルルオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

歡喜の声を挙げる ライガーゼロ シュナイダー。

そこに恐怖や怯えおびの色は無い。あるのは勝利に酔いしれるケモノの姿だった。

ブレードライガー——の系統—— 獣王の眷族けんぞく。

新獣王。

それが ライガーゼロ シュナイダー だった。

十 十 十

「……ド、ドローン全機撃破」

呆気あつけにとられていたオペレーターのひとりが、気が付いた様に報告した。

「ライガーゼロ シュナイダー、損傷……ありません」

「冷却システム（ラジエーター）も正常作動中……」

オペレーター達の報告を聞きながら 教授 は思った。やはり力グヤは特別だ。異常と言ってもいい。

彼女の何がゾイドをそうさせる？

それを考えると自然と口元がにやける。

「……やはり彼女は面白い——」

＋　　　＋　　　＋

気怠^{けだる}い疲労感が身体を侵す。このまま消えてしまいたい。それが出来たらどれだけ良いか。

だが、カグヤの想いは叶わない。

——あとどれだけ生きれば良い？

——あとどれだけ壊せばいい？

——あととどれだけ……。

いや、彼女は知っている。

どれだけ生きてても何も変わらない。

どれだけ壊しても満たされない。

どれだけ。どれだけ。どれだけ……。

だったら――

「……………この世界ごと消えてしまえばいい――」

だからカグヤは破壊者（デストラクター）。

彼女の想いが――世界を壊す。

つづく

第九話『聖女と魔女（前編）』

『信じる者は救われる』——それはある意味正しい。

人間は信じるに足るなにか、心の拠り所なしでは生きていけない。それはヒトによって家族であったり友人であったり恋人であったりする。無論、趣味や仕事でもいい。生きる目的に値するなにか。

しかし、現実にかういった拠り所を見出せない人間もいる。そういった人間が『神』にすが縋る。

神。

それは唯一にして無二の絶対存在。超常的な力を持ち、ひそつぱつ被造物たる人間を見守る、姿なき偶像。

絶望は死に到る病だ。だからヒトは希望を求める。

神とはすなわち、ヒトが生み出した希望の象徴だ。

そして、希望たる神を信じる事で心の拠り所を得る。

だから信じられるものを得た時点で、そのヒトは救われている。

信仰とはつまりそういう事だ——少なくとも自分はそう認識している。

神が実在するかなど問題ではない。

信じる事に意味があるのだから。

×

×

×

第九話『聖女と魔女（前編）』

休日を目前に控えた週末の夕暮れ時。

本来であれば、明日からの休日に備えて買い物をする者や開放感に浮かれる学生、これから夜の街に繰り出す若者で賑わっているはずの大通りが、この日は別の喧騒けんそうに包まれていた。

耳をつんざく轟音。瓦解がかいする建物。逃げ惑う人々……。

日常が崩壊する街の一面に、非日常の象徴たる二つの異形が対峙していた——ゾイドだ。

ひとつは ゴドス。

かつてのヘリック共和国軍機甲師団・強襲戦闘隊を担った主力ゾイドであり、その戦闘力は『小型ゴジュラス』と呼ぶにふさわしいものだ。恐竜型に分類されるそのシルエットは二本足で直立し、長い尻尾しっぽは格闘戦以外にもバランスーとして機能する。

カラーリングはZAC2099年モデルに準拠したシルバーとグレーのツートンカラーだが、武装は一新され、各部もチューンされている。いわゆる強化型だ。

コクピットは複座式ふくざしきに改装され、前部のメイン・シートと、後部のサブ・シートという配置レイアウトとなっている。

「民間人の避難状況はどうなっていますの？」

強化型 ゴドスのメイン・シートに座る娘が、正面に対峙するもう一機のゾイドに視線を定めたまま問う。その声には緊張感はあるが、焦りや恐怖は感じられない。

年齢は二十代半ば。金髪碧眼に整った容姿。高貴さを感じさせる美しい娘だ。

「B班の誘導が滞^{じゅうど}ってます。しばらく目標の動きを止める必要があります」

金髪の娘に応えたのは、サブ・シートに座り、各種情報解析を担当している少女だ。こちらはおよそ十七、八歳。くすんだ赤毛に黄色の瞳。万人受けする美人ではないが、勝気そうな表情には愛嬌があり、ソバカスがチャーム・ポイントと言える少女だ。

娘と少女は共に修道服に身を包んでおり、軍人や傭兵といった雰囲気はない。

「了解ですわ。マシン・キャノンを排除^{パージ}。格闘戦で行きますわよ——ミゼット」

「はい、マヘリアお姉^{ねえ}さま。いつでもどうぞ！」

強化型 ゴドスの左脇^{わき}に装備されたマシン・キャノンが切り離され、地上に落下し、石畳の道が陥没する。重量が軽減された機体が姿勢を低くし、仕掛ける体勢に移行する。

「相手は レブラプター。運動性は脅威ですが、取り付けばパワーで圧倒できます」

「この子が小型ゾイド相手に遅れをとるなんてありえませんか——
でしょう?。」

「当然です。私とお姉さまが乗っているんですから」

余裕に満ちた口調で問う娘に、少女は表情を輝かせて応えた。

「さあ、行きますわよ—— ビアトリス」

娘の呼びかけに応えるように咆哮を上げると、 ビアトリス と呼ばれたゾイドは突進した。

ビアトリス。

それがこの複座型のコクピットを持つ強化型 ゴドス の愛称だ。

その最大の特徴は右腕部に装備された、自身の全高すら凌駕する
巨大な杭打ち器^{バイル・パンカー}—— セイクリッド・ランサー の存在だろう。並
みの ゴドス であれば歩行すらままならない代物だが、この ビ
アトリス は、それを自由自在に振り回してなお余力ある出力を有
している。

ショルダー・タックルの要領で左肩から体当たりをして敵機を怯^{ひる}
ませると、 ビアトリス は両腕で相手の肩を固定、 ゴドス の
強力な武器であるキックが追い打ちをかける。

腹部にモロに衝撃を受けた レブラプター は堪^{たま}らず苦悶^{くもん}の声を
上げた。

レブラプター はガイロス帝国によって開発された、オーガノイド・システム を限定的に搭載されたベロキラプトル型ゾイドだ。常識を超えた俊敏性と生命力を得た本機は格闘戦に特化し、同時期に開発された共和国製ベロキラプトル型ゾイド ガンスナイパー が射撃戦に特化された事としばしば比較され、両国のゾイドに対する運用・設計思想の違いを見ることが出来る。

しかし、現在では オーガノイド・システム に関する技術は失われており、現存する レブラプター に同システムは搭載されていない。

つまり、本機の最大の優位性^{アドバンテージ}が失われているに等しい。

「ミゼット、コクピットに生体反応は？」

「確認出来ません。やはり今回も……」

油断なく敵機の挙動を窺^{うかが}いつつ訊^{たず}ねる娘に、少女は思っ処があるのか、続く言葉を濁した。

そこへ――

『――ハウンド・リーダーよりアフロディーテ。周辺の避難は完了、仕上^しげを頼む』

通信機越しの男の声が ビアトリス のコクピットに響く。

「アフロディーテ、了解――お姉さま！」

「よくってよ。さてその命、神に返して頂こうかしら？」

「……お姉さま、ギリギリです」

娘の楽しいな発言に、少女は辟易へきえきした様につ込みを入れた。

だが、娘は少女の言葉に気を悪くした様子も見せず――

「ミゼット、人生に必要なのは余裕とユーモアでしてよ？」

「TPOによります。もう照準固定、完了してます。セイクリッド・ランサー スタンバイOKオーケーです！」

「仕方ありませんわね――」

戦場において緊張感の欠片かけらもないやり取りを交わす二人のシスター。少女の意見に納得したのか、娘は操縦桿を引き、レブラプターと組み合っていた愛機を後退させる。

後方に跳躍ちよつやくし、敵機と距離を取った ビアトリス は、着地と同時に右腕に装着した巨大な杭打ち機を構えて再度突進する。

「汝の魂に安寧あんねいを――」

娘の激発音声トリガー・ヴォイスにより、セイクリッド・ランサー の安全装置セーフティが解除される。

既に娘の表情には、先程までの緩んだ微笑は浮かんでいない。

ビアトリス は敵機に肉迫すると セイクリッド・ランサー の切っ先を突き出す。先端部の捕獲用クローが展開し、レブラプター

――の胸部を強引に掴む。

突進の勢いはそのまま、敵機を宙に浮かせたまま ビアトリスはヒトの往来の絶えた大通りを突っ切り、街の最端部である外壁に迫る。

この街――ミヤコノ・シティは周囲をぐるりと壁で覆われている。本来は侵入者を阻むための壁が、今回は外に逃がさないための檻として機能した。

外壁を間近にしても ビアトリスの疾走は変わらない――このまま レブラプターを外壁に叩きつける算段だ。

状況を認識したのか、生物としての本能か――悲鳴を上げ、脱出しようともかくものの、抵抗むなく レブラプターは背中から外壁に激突した。

さらに――

「――インパクト」

眩きと共に娘が操縦桿の引き金のひとつを引くと、セイクリッド・ランサーの薬室内部で炸薬が爆発を起こし、排出口から空薬莢が排出。同時に爆発で押し出された銃が、高速で出口を求め駆け抜けた。

打ち出された銃は出口を塞いでいた哀れなふた（・・・・・・）を貫通し、外壁の半ばまで到達した。

壁に縫い付けられる形で力なく手足を垂らした レブラプター

の姿は、磔^{はらわ}にされた罪人の姿を思わせる……。

「コンバット・システムの破壊を確認。レブラプター も完全に機能を停止——状況終了です、お姉さま」

「そう。お疲れさま、ビアトリス」

娘の労い^{ねぎひ}の言葉に応えてか、右腕部の得物を引き抜き、強化型ゴドス は戦闘態勢を解いた。

支えを失った レブラプター は外壁から剥^はがれ落ち、力なく地面にその身を横たえた。動き出す様子は見られない。

それを確認すると、パイロットが降りやすいよう降着姿勢^{こうしき}を採^とった ビアトリス の防風窓^{キャンピー}が開かれ、修道服姿の二人が危なげない身のこなしで地面に降り立った。

十 十 十

エイミス教団 —— 通称 教団 。

現時点における惑星Z？最後の戦争、いわゆる 大戦 の終結から約半世紀……。

世界は概ね^{おおよそ}平和だった。

大戦 終結間もない世界に突如現れた 教団 は、そのシンプルな教義と間口の広さから、不安を抱える民衆に瞬く間に受け入れられた。

なにより、 教団 は豊富な資本力と独自の戦力を保有していた。人はパンのみに生きるに非ず——しかし、所詮^{しよせん}パン無しでは生きられない。戦う力が無ければ生き延びられない。

教団 が受け入れられ、惑星Z-iの最大勢力となったのは当然の結果とも言えた。

「——どうですか？」

修道服姿の娘が、回収された レブラプター の頭部に張り付いている作業着の男に声をかけた。

場所は 教団 ミヤコノ・シティ支部の地下にある整備工場。油や金属の臭いが立ち込める、お世辞にも清潔とは言えない場所には不似合いな美しい娘だ。

彼女の名前はマヘリア・メルル。

セミロングの髪は艶^{つや}やかな黄金色。瞳は宝石を思わせる碧眼。整ったその容貌は、物語にしか存在しない『貴族の令嬢』を思わせる優美さがある。

「ハッチ、強制開放します」

ようやくといった様子で男が言うと、レブラプター の頭部上半分が口を開ける様を開き、コクピットが露^{あらわ}となった。

「上出来ですわ。お疲れさま」

マヘリアから労いの言葉を受け取った男は、一礼するとその場を離れた。

「ではミゼット、お願いしますわ」

「はい。お姉さま」

マヘリアが品の良い笑顔で声をかけると、彼女の傍らかたわに居た少女が応えた。

癖の強いくすんだ赤毛は短めに切り揃えられ、その下にはやや大きめの黄色の瞳。肌は褐色で、鼻先には薄っすらとソバカスが見られる。万人受けする美人ではないが、それなりに可愛らしい顔立ちをしており、気の強そうな表情と相まって、愛嬌のある印象を与える少女だ。年齢は十七、八歳といった処ところだろう。

少女の名前はミゼット・レミントン。

マヘリアを『お姉さま』と呼んでいるが、姓名ファミリーネームの違いからも判る様に、マヘリアとミゼットは実の姉妹ではない。彼女達は 代行者と呼ばれる 教団 のシスターであり、ここでは先輩のシスターが後輩のシスターとペアを組んで指導する制度があり、二人はそのペアなのである。

余談だが——俗に『姉妹制度』とも呼ばれるため、先輩を『姉』、後輩を『妹』と位置付けるのはシスターの伝統となっている。

それはさておき――

現在、彼女達が相対しているのは、昨日の戦闘で自ら捕獲したレブラプターだ。腹部に セイクリッド・ランサー による貫通痕がある以外は目立った損傷は無い。最低限の攻撃で相手を無力化すべく戦った結果だ。

だが、仔細に観察すればこの レブラプター のあちこちに傷がある事が確認出来る。昨日今日出来た傷ではない、長い間口クな整備を受けていないのは明らかだ。

ミゼットがマヘリアに先行してコクピットに乗り込むと、操作卓を操作し、システムを立ち上げていく。

その姿を見守るマヘリアはどこか物悲しく見える。

「ダメですね。システムの半分以上が死んでいます。機体を含め、長い事まともな整備を受けていません」

妹の言葉に我に帰ると、何事も無かった様にマヘリアも操作卓を覗き込んだ。

何故そんな状態であるにもかかわらず街中で暴れたのか――マヘリアには見当が付いていた。

「やはり……」

呟く姉の視線を追ってミゼットが顔を上げた。

上方、開かれたハッチの内側――そこには赤い塗料で殴り書きさ

れた文字が見えた。

『あるべき世界のため、此処^{ここ}に鉄鎚^{てつづい}を下す』

「……これで四件目ですね——イクスクルーダーのテロ」

視線を操作卓に戻し、情報を読み取る作業に戻ったミゼットが呟いた。

イクスクルーダー。

ここ最近、ミヤコノ・シティを騒がせているテロ・グループの名だ。

その手口は時限式で起動するようプログラムされたゾイドを搭載したコンテナ車を街中等に放置し、無人操作^{オート}で暴れさせるというものだ。コンテナに格納出来る大きさ（サイズ）のゾイドとはいえ、人間にとってその脅威は車や重機の比ではない。

更にウイルスで凶暴化したゾイドは、破壊衝動のみで暴れ続ける。瞬間的に破壊を撒き散らす爆弾と違い、被害は時間経過と共に拡大していく。この惑星Z?において、破壊だけを目的とするなら、これ以上手軽で効果的な手段はないだろう。

この レブラプター がそうだ。

恐らくは放棄されたか、野良化^{のら}したものを捕獲し、最低限の整備をただけなのだろう。

「……………」

そう思つと、マヘリアは堪^{たま}らない気持ちになつてくる。

「——どうしてヒトは……………」

あとは言葉にならなかった。言葉にしてしまえば本当にどうしようもなくなるのが判っているから。

そんな姉の姿を見るとミゼットもまた堪らない気持ちになる。彼女の場合は爆弾代わりにされたゾイドに対する同情より、マヘリアを悲しませる要因に対する怒りの方が強い。

マヘリアは優しい。その慈愛の精神は誰であっても分け隔てなく、教団の信者だけでなく、同僚のシスターからも人気がある。

ミゼットもそんな彼女に憧れていた。

だから、自分が妹に選ばれた時は信じられなかった。

何故、自分が選ばれたのか判らなかった。

理由は未^{いま}だに判らない。

だが、判った事もある。それはマヘリアの優しさが本物で、それだけに精神的に傷付きやすいという事。

盲目的に性善説を信じている訳ではない。だが、それでも最後の
一線でヒトの良心を信じている。

だから、マヘリアは人間の悪意に敏感に反応してしまう。

表には出さないが、ミゼットはその事を知っている。

だから――

「お姉さま！ データの吸い出しは終わりました。今日はここまで
にして、もう休みましょう！」

努めて明るい雰囲気でミゼットが言う。

「明日は日曜日ですよ。礼拝に備えて、早く寝ちゃいましょう！」

「……ミゼット」

憂いを含んでいたマヘリアの表情が緩む。

妹の気遣いが嬉しかった。本当に彼女のこういう処に救われてい
ると今更ながら思う。

「そうね。そうしましょうか」

「はい！」

マヘリアがそっとミゼットの頭に手を載せる。

「お、お姉さま……？」

突然の姉の行為に驚くミゼット。勿論、嫌な訳ではないが、この状況に彼女の状況処理能力が追いつかない。

「ありがとう——ミゼット。貴女が妹で良かった」

「あ——あの……い、いえ……」

それだけしか言葉に出来なかった。

それでも、姉の役には立てたのだと実感出来た。

それだけでミゼットは満足だった。

他に何が出来る訳でもない。

だから今は自分に出来る事をしよう。

姉の支えで居られるなら、妹として必要とされているなら、望まれる限り彼女の側に居よう。

＋　　　＋　　　＋

時刻は日曜の正午前。

休日であればまだ寝ていても許される時間だ。

そんな時間に起床し、二度寝する気も起きず、アサト・タチバナはぼんやりとした表情でリビングに顔を見せた。

年齢は二十代前半だろう。黒髪黒瞳。体格はやや痩せており、身長は百七十センチ前後。気怠るそうに見えるのは寝起きのせいではなく、彼の場合は終始このありさまだ。

普段であれば昼過ぎまで寝ているのが常のアサトが、こんな時間に起きてきた——そんな、それだけの状況にハルカ・クスノセは妙な違和感を感じた。

「……………」

「……………」

互いに言葉が出ない。

妙な沈黙が漂う。

先に動き（アクション）を見せたのはアサトだった。伸ばし気味の黒い髪を掻きながら、眠たげな顔を、やや不自然にハルカから逸らした。

「どうかしましたか？」

ハルカが小首を傾げた。

二十代も半ばの娘の仕草にしては幼いが、そう感じさせない、のんびりとした雰囲気彼女にはある。長く艶やかな黒髪。瞳も黒く、

どこかとろんとした印象がある。

和風美人——一言で言えばそんな形容詞が似合う娘だ。

「いや、別に……。よく判らんが、何故かお前と顔を会わせ辛い」

明後日あさっての方向を向き、自分でも何を言っているのか判らない様な様子でアサトは応えた。

「はあ……。あ、判りましたよ」

「んふふー」と悪戯っぽい笑みを浮かべて、ハルカがアサトに言った。

「えっちな夢でも観て、その相手がわたしだった——とかですか？」

「……………」

冗談ジョークで返すか、受け流すべきだっただろう。実際、ハルカがこういった類の発言するのは珍しい事ではないし、アサトも対応には慣れていた。

だが、もしかしたらそうなのではないか？——という疑問が浮かび、即座に対応が出来なかった。

「……え？ ひょっとしてそう（・・）なんですか……？ やだ、どうしましょう。いえ、嫌とかではないんですよ？ けど、そうならそう言ってくれば何時いつでも——って、何言ってるんでしょう、わたし……あ、でも——」

頬など赤く染め、それを両手で覆いながらあれこれと続けるハル
力。

アサトがうんざりしていると——ふと視線を感じた。

あまりに存在感を主張しないため、そこに居るのに気付かなかったが——もうひとり少女が居た。

少女の名前はカスミ・シノザキ。

肩口で切り揃えられた灰色がかった銀髪と、同じく灰色がかった
黒い瞳。肌は抜ける様に白い。

恐ろしく整った容姿は、いつそ美少女と呼んでも差し支えない。
色素が薄いイメージも、少女の儚さと脆さを演出するのに一役買っ
ている。

だが、その顔には表情というものがなく、伶俐な無表情だけが浮
かんでいる。

人形のような——という表現がそのまま当てはまる小柄な少女だ。

実際、フリルの付いた洋服でも着せて座らせて置けば、人形と見
分けが付かないだろう。

アサトとカスミの視線が合う。

これまでの会話は聞いていただろう。年頃の少女のこういった話
題に見せる反応は大きく二種類ある。興味津々か、抵抗感を示すか
だ。

カスミの場合は後者だったらしい。

アサトに向けられる絶対零度の視線は多分に軽蔑的けいべつなニュアンスが込められている。

「……………何か？」

大きくは無いが、よく通る澄んだ声が少女の口から紡つむがれた。

「あ……………別に」

「そうですか」

短く言うと、カスミはもう興味を失せた様に手元の文庫本に視線を戻した。どうやら読書中だったらしい。

「……………ダメ人間」という呟きは聞こえなかった事にする。

視線を前方に戻すと、そこではまだ、もじもじしながら身悶みもたえしているハルカが居た。暫くは何を言っても無駄だろう。

ふと天井を見上げる。

無論、そこにこの状況の対処法が書かれている筈も無く、アサトはただ嘆息した。

時は折りしも日曜日。

クスノセ機獣派遣事務所　は今日も概ね——平和だった。

十　　十　　十

十人掛けの椅子^{いす}が二列、縦にずらつと並んでいる。

部屋の照明は最低限で薄暗く、ステンドグラスから差し込む日差しの暖かな色彩を際立たせる。

厳かな雰囲気^{おごち}の教会は大勢の市民と十数人のシスターで溢れていた。一段高い演壇にいるのは神父だろう。

週に一度の礼拝の日。それが今日だ。

そんな神秘的とも言える光景の中に、ひとり場違いなものを感じている娘がいた。

ひたすら黒い。まるで肌を晒^{さら}す事を憎んでいるかの様な、徹底した格好^{ファッション}は、娘を周囲から明らかに浮かせていた。

黒いスラックス。腰にはスカートを思わせる黒い腰巻^{バレオ}を巻いている。

上半身も同じく黒で統一されており、長袖のシャツは指先がようやく出るゆつたりとしたもので、その上に羽織っているジャケットの様な上着も黒い。肩はドレスの様に膨らんでおり、袖口は手首から先が大きく広がっている。

何層にも重ねられた生地と、白のレースという構成からはゴシックロリータを思わせる。

だが娘の容姿に少女性は感じられない。

年齢は二十代前半だろうか、病的とも言える肌の白さと虚ろな表情。黒い髪は適当に切った様に不揃いで、あちこちで長さが違っている。右目は眼帯で覆われていて見えないが、左目の瞳は黒い。その退廃的な雰囲気は、喪服を着た葬式の参列者の様にも見える。

「……………」

パイプオルガンを伴奏にした賛美歌がゆったりと流れているのをぼんやりと聴きながら、娘は追憶に耽^{ふけ}っていた。

昔は——まだ両親が健在だった頃はこうして日曜には教会に礼拝に行っていた。

特に敬虔^{けいけん}な信徒だった訳ではなかったが、小さな街だったので、特に事情がある訳でも無ければ、日曜は教会に行くのが一般的だった。

同じ様に学校のクラスメイトも来ていた。学校の外で友達と会うのは新鮮で、娘は礼拝自体は嫌ではなかったし、帰りに家族で食事をするのが定例となっていた事もあり、どちらかと言えば週に一度のこの行事^{イベント}は好きだった。

あの頃は娘の世界は幸せだった。

そんな事実が当たり前すぎて実感できない程度には、毎日が幸福だったと様に思える。

賛美歌はまだ続いていた。

神を賛美し、信仰を励ます歌——聖歌。

曰く、この世界は幸福と慈愛で満ちているらしい。

「……………」

何故だろう。ひどく苛立つ。

この世界は本当に素晴らしいのか？

この世界はそんなに愛すべきものか？

この世界はそれ程に美しいと言うのか？

胸が締め付けられる様な気がした。

まるで自分の周囲だけ空気が無くなってしまった様な息苦しさを
感じる。

ヒトが多い場所は苦手だ。

否^{いや}でも自分が独りだと思いき知らされるから——

「——どうかされましたか？」

突然、声をかけられて意識が現実に戻った。

声のした方に目を向けると、金髪碧眼のシスターが気遣わしげな表情を浮かべていた。

年齢は娘より少し上だろうか。二十代半ば位に見える。

言ってしまったえば美人だ。

碧色^{あお}の瞳がこちらをじっと見つめていた。

「大丈夫ですか？ お悩みが深い様にお見受けしますが——宜しければお話を御聞き致しますわ」

「……………」

そんなに思い詰めた顔をしていただろうかと暫く考えたが、身に覚えが無い。そんな感情はとくに無くしたと思っていた。

気付けば賛美歌は終わっており、周囲は多くの人間の話し声で賑わっていた。いつの間にか礼拝の儀式は全て終わっていたらしい。

それだけ深く考え込んでいたのかもしれない。

「……あたしは 教団 の信徒じゃない」

その通りだ。ただ待ち合わせにこの場所を指定されただけ。

だから娘はそう答えたのだが――

「それは問題ではありませんわ。教会の敷居を跨いだのであれば、貴女にはその権利があります――いえ、本当はこの世界の全ての人に幸せになる権利があるのですから」

慈愛に満ちた微笑を浮かべ、シスターはそんな事を大真面目に言った。

聖女エイミス が実在するなら、彼女の様な人物だったのではないか――そんな事さえ思わせる表情だった。

もつとも、偶像を崇拜する宗教において、それに形を与える事は背徳行為だろうが。

何か判然としない苛立ちを感じ、思い付いた事を訊いてみた。

「……あなた、どうして生きてるの？」

「え？」

シスターが呆気（あつけ）に取られた様に言葉を失った。

「……生きるってそんなに素晴らしい事？ あたしには、よく判らない」

「先程の賛美歌の事ですか？」

娘の言葉の意味に思い当たった様にシスターが言った。

「歌詞に意味などありませんわ。よくある常套句じょうそうくの羅列……綺麗事です」

「……………」

意外だった。

およそ 教団 のシスターの口から出る言葉ではない。

「貴女は神を信じますか？ 少なくとも、わたくしは信じています。居もしない偶像にすぎるより、こうして触れ合える方が安心できますから」

そう言うとしスターは娘の手をとって、自分の両手で包み込む様にした。

その姿は神に祈りを捧げる敬虔な信徒そのものと言えたが、前言を聞く限り、このシスターにそんな信心深さは無いのだろう。

「どうして生きてるか、についてですが……わたくしは貴女の期待に応えられる様な答えを持っていません」

そして、自分の中で言葉を選ぶ様に間を置き、シスターは続けた。

「そうですね……生きるのに理由なんて要りませんわ。生きようとする事、生きていこうとする事に意義があるんです——これは受け売りなのですが」

どこか遠くを見つめるようにシスターの表情が一瞬変わったのを娘は見逃さなかった。

「……………そう」

『誰の?』とは訊かなかった。そんな事より、このおかしなシスターに興味が湧いたのかもしれない。

こんな考えの人間が居るのが嬉しかったのかもしれない。

てつきり、つまらない定型文的な返事が来るものだとばかり思っていたから。

せつかく話を訊いてくれるというのだから、この妙なシスターに色々と訊いてみようと思った。

その時――

「――カグヤ!」

自分の名前を呼ぶ少女の声が教会に響いた。

＋　　　＋　　　＋

漆黒の衣装に身を包んだ娘の口が開きかけた時、元気のいい少女の声が、続く言葉を遮った。

「ごめんね、カグヤ。待った？」

「……フイーア、遅い」

現れた少女の言葉に、娘はそう応えた。

「もう。こういう時は『今来たばかりだよ』ってというのが常識ですよ？ デートの基本は五分の遅刻だよ」

「……そうなの？ でも、デートじゃないよ」

「カグヤの意地悪……。パートナーなら恋人同然でしょ？」

「……そう。そうかもね」

自分を置いてけぼりで話をされるのが不快だった訳ではないが、このままでは延々こんなやり取りを続けかねないと思い、シスター——マヘリア・メルルは二人の会話に割って入ることにした。

「お連れの方ですか？ ええと、カグヤ——さん？」

年齢はマヘリアの方が上だろうが、もはやこの丁寧口調は癖の様なものだ。

「……そう。この子はフイーア」

特に気分を害した様子も無く、カグヤと呼ばれた娘が連れの少女を紹介した。

フィーアというらしい少女は、初めてマヘリアの存在に気付いたかのように視線をこちらに向けた。

マヘリアは女性としては長身の部類に入るので、当然少女からは見上げる形になる。

少女の年齢は十二、三歳くらいだろうか。ゆったりとした白いシャツとハーフパンツ、そして水色の薄でのコートを着ている。コートは小柄な少女にとってはやや大きめだが、そのアンバランスさが可愛らしくも見える。カグヤの奇抜なファッションと比べれば、どこにでもいる少女の格好だ。

それに対して、髪と瞳は鮮血のように紅い。肌が白いので余計に紅い色彩が映える。

少女の顔が嗤った。

可愛らしい少女だ。

だがその笑顔はどこか蠱惑的で、酷く不自然なものにマヘリアには感じられた。

「あなた、聖女様？」

「え……？」

今日は驚かされる質問をされる日だと思った。

聖女。

確かにマヘリアの事をそう呼ぶ人間は多い。自分で吹聴^{ふいちよう}して回った事は無いが、彼女の事を知る人間にとっては、それなりに馴染みのある呼称だったりする。

しかし、こつも真正面から問われると肯定しづらい。

卑屈になる気は無いが、そうだと明言するのも謙虚^{けんきょ}さに欠ける気がするからだ。

「まあ、そう呼ばれる方も居らっしゃいますわね」

「ふゝん……。教会で 聖女 と 魔女 が並ぶなんて、変な組み合わせだね、カグヤ」

そう言い、フィーアはもうマヘリアに興味を失った様にカグヤに視線を戻すと、その手を引いてカグヤを立ち上がらせた。

「もう行こう？ シラヒメ の調整も終わったんだよ」

「……うん」

変わらずぼんやりとした表情のまま、カグヤはフィーアに手を引かれて教会を後にしようとした。

「……………」

何か嫌^{いや}な気持ち^{きもち}がした。

このままカグヤを行かせてはいけない様な、漠然とした不安が胸中を占めた。

「あの——カグヤさん！」

「……………？」

やはりぼんやりとした表情で漆黒の娘が振り向いた。

「わたくしはマヘリア・メルルと言います。御覧の通りシスターですから、教会に来てくださればいつでも会えます……だから、その」

何だ？ 何を言いたい？

否、何を伝えたいのだろうか？

判らなかった。

それでも——

「気が向いたらで構いません。また、会いに来てくださいますか？」

そうだ。また彼女と話をしたいと、そう思ったのだ。

「……………あたしは 教団 の信徒じゃない」

「関係ありませんわ。わたくしが個人的にお会いしたいだけですか」

「……………気が向いたら」

短く紡がれたのは肯定の言葉。

それだけ言うとカグヤは連れの少女に引きずられる様に教会の外に姿を消した。

「……………」

二人の姿が見えなくなったのを潮に、仕事に戻ろうとマヘリアが振り返ると、何故か非難する様な視線を受けた。

視線の主はくすんだ赤毛に褐色の肌を持つ少女。マヘリアの『妹』であるミゼット・レミントンだ。

「どうしましたの、ミゼット？ 顔が怖いわよ」

「こつという顔なんです。すみません、可愛くなくて」

どうやらミゼットは不機嫌な様だ。

『可愛くない』という言葉を妙に強調しているのにマヘリアは気付いた。

「なにを言っているの？ ミゼットはとっても可愛らしいわ」

「本当ですか、お姉さま？」

ミゼットの表情が少し緩んだが、まだ信用できないと言う風に頑かたくな態度は変わらない。

「当然ですわ。わたくしの自慢の妹ですもの」

「じゃあ……ぎゅって、してください」

「もう、甘えん坊さん」

顔を赤らめてそっぽを向いたミゼットを、マヘリアは正面から抱き締めた。左手は腰に、右手はミゼットの頭に回す。

「これでいい？」

「……………はい——」

さすがに恥ずかしいのだろう。ミゼットの言葉は尻つぼみで、ようやく聞き取れる程度だった。

「……………綺麗な人でしたね」

「え？」

「さっき、お姉さまが話をしていた人……格好は妙でしたけど」

「あ……………」

そうだ、何故気付かなかったのだろう。カグヤは美人だ。

衣装や雰囲気に取りつかれていた訳ではない。

だが、女性と聞けばまず容姿に目が行くマヘリアが、彼女の美貌に気付かなかった——気が行かなかったという表現の方が正しいだろう。

「それで声をかけていたんじゃないんですか？」

「ミゼット……それではわたくしが色情狂みたいじゃない」

「当たらずとも遠からずです。その度に私がどんな気持ちでいるか——」

「……………」

嘆息してミゼットの頭を優しくなでる。
たんそく

「ごめんなさい。貴女に対する配慮が足りませんでしたわね」

「もう慣れました」

「そう？」

「じゃなければ、お姉さまのパートナーは務まりません」

「そうね。ありがとう——ミゼット」

「……はい」

そうやって妹を抱きしめながらも、心は件の娘くだんに向けられている自分に多少の自己嫌悪を感じた。

だが、それだけ彼女とのわずかな出会いは、マヘリアの中では大きなものだった。

また会えるだろうか。

（カグヤさん——）

次に会える事があつたら、その時はフルネームを聞いてみよう。

出来る事ならもっと彼女の事を知りたい。

そう思った。

つづく

第十話『聖女と魔女（後編）』

『信じる者は救われる』——果たしてそうだろうか？

あたしは神様なんて信じない。

あたしは何も信用しない。

期待しなければ裏切られる事も無い。

喪失。失意。落胆。

そんなものを味わうくらいなら、あたしは最初から何も望まない。

要らない。

何も要らない。

ただ壊せばいい。

この世界の何もかも。

だから、あたしは信じない。

あたしは何も——信じない。

第十話『聖女と魔女（後編）』

待ち合わせ場所にした教会を後にする道すがら、少女は連れの娘に声を掛けた。

見た目通りの年齢なら十二、三歳。紅い髪と瞳が目を引く、非常に愛らしい顔立ちの少女だ。人形のような——という比喩がしっくりくる整った容姿には生身の俗臭というものがまるで無く、どこか非現実的な存在感を放っている。

「ねえカグヤ、あのシスターとなに話してたの？」

「……………」

カグヤと呼ばれた娘はぼんやりとした表情のまま、しかし歩調を緩めるでもなく、通りに面した路地を進んだ。

こちらは少女とは明らかに歳が離れており、二十代前半くらいの娘だ。

適当に切った不揃いな髪は黒く、焦点の定まっていない虚ろな瞳もまた黒い。右目を覆う眼帯と異様な雰囲気が否応無く見る者の注意を引いてしまうが、冷静に観察すれば娘が相当な器量良しである事が判る。

だが、娘——カグヤ・イザヨイの美貌を気付かせ難くしている要因は他にもある。彼女が身に纏っている服装だ。ただのドレスとも、退廃的な様式美を持つゴシッククロリータとも判別出来ないボリユーム感のある衣装は、どちらであるにせよ街中を普通に闊歩する類のものではない。

「ねえねえ、カグヤ」

焦れた様に、紅い髪と瞳の少女は漆黒に身を包んだ娘の服の袖を引っ張った。無理に引けばレースやフリルがほどけてしまうのではないかと思わせる服だが、意外と作りはしっかりしているらしく、心配するような事態は起こらない。

「ねえねえねえねえ——」

「……フィーア、生地が傷むよ」

手段と目的が入れ替わってしまったかのように袖を引くのが楽しくなってしまった様子の少女——フィーアを一瞥してカグヤは言った。表情からは判り難いが、彼女なりに困っているのかもしれない。

「だってカグヤが無視するんだもん」

カグヤが軽く袖を振って退避すると、おあずけをくらった猫の様に少女は口を尖^{とが}らせた。

「……別に報告する様な事は話してないよ」

隠す様な風でもなく、本気でそう考えている様な口ぶりで言うが、フィーアはそれでは納得出来なかつたらしく、なおもカグヤに食い下がる。

「カグヤが世間話でもしてたっていうの？ 教団のシスターと？」

「……あたしだって天気の話くらいするよ。良い天気だね、フィーア」

感情のこもらない棒読みな口調だが、これがカグヤの地だ。

「そうだね。……で？」

「……………？」

フィーアの言わんとする事が判らないといった様にカグヤは頭に疑問符を浮かべた。その表情は相変わらずぼんやりとしているが。

「だから、それから何を話したの？ そんなの会話のきっかけでしょ？」

多少、苛立ちを感じさせるが、カグヤとの日常会話はこんな感じなので、フィーアにしてみれば慣れたものだが。

「……あのね。神様なんて居ないんだって」

「神様？ 教団のシスターがそんな事言ったの？」

フィアの問いにカグヤはこくんと首肯した。
じゅん

ようやくまともな返事が返ってきたと思えば、いきなり『神様は居ない』だ。それもシスターの口から出たとなればより混乱する。

「……お願いだから、順を追って話してくれない？」

「……………」

どうしたものかと一瞬考えて——恐らくは——カグヤはフィアの前に中腰になった。そして少女の小さな両手を自分のそれで包み込むように握ると、

「……『貴女は神を信じますか？』」

と言った。

「——？ なにそれ、勧誘？」

「……ううん。居もしない神様を信じるより、触れ合える方が安心だって」

「……………」

やはり要領を得ない。そのシスターはカグヤに何を伝えたかったのだろうか？

強引に連れ出してきたので、もしかしたら会話は途中で打ち切られたのかもしれないとも思ったが、カグヤが自分以外の誰かと話をしているのがフィーアは嫌だった。

「それで？ カグヤは神様って信じてる——わけないか」

「……居るかどうかは知らないけど、そんな奴が……あたし達のやる事にちよっかい出してる様な奴が居るなら、あたしはそんなもの認めない——」

一瞬だが、娘の隻眼^{せきがん}がやや暗い光をたたえた。

「……神様が居るなら……そんなもの、世界と一緒に壊れてしまえばいいよ」

「……そうだね——うん、それでこそカグヤだよ。私はそんなカグヤが大好きだよ」

「……そう」

日曜の昼下がり。異様な二人組みは、休日で賑わう人ごみの中へ消えていった。

十
十
十

はじかれた者——それが彼等の呼称である。

イクスクルーダー

人並みの幸福感。

平穏な日々。

普通の暮らし。

そういつた極当たり前のものを持ち得ない人間が居る。

ありふれた価値観を共有出来ない人間が居る。

当たり前に平和である世界を受け入れられない人間が居る。

ただただ過ぎて行くだけの穏やかな日常……それは変化の無い、
かんまん緩慢な死へ向う行為だ。そういう想いを抱えている人間がいつの世
も少なからず、しかし確実に存在している。

中には、自分の味わった不幸を他人にも知らしめたいという者も
いる。それはそれで理由だ。少なくとも本人にとっては正当な口実
となる。

だが、それすらも持ち得ない……ひたすら空虚な感情だけを持て
余している者も居る。

原因の無い苛立ちと、正体のない虚無感。これらを一生抱えて生
きていくのか？

それは死よりも恐ろしい生き地獄だ。

だが多くの人間はそんなものは無い様に暮らしている。

間違っているのは自分達か？

それとも、彼等はそれらを抱えた上で生きているのか？

……判らない。少なくとも自分には無理だ。

そういう人間が集まって出来たのが イクスクルーダー だった。

故 (ゆえ) に彼等に政治的な思想や主張は無い。

彼等はこの世界そのものに絶望してしまったのだから。

「——決行は今日の午後六時だ」

集まった約四十人ほどの集団を見渡して、リーダー格らしい男が言った。

年齢は三十代の半ばくらいだろうか。テロリストの頭目というイメージからはややかけ離れた、言ってしまうとどこにでも居そうな中年男だ。特に悪人顔という訳でもない。

「ゾイドはウイルスを感染させた無人機が十機。それから有人機のパイロットを五人募る。志願する者は？」

男の言葉に数人が手を挙げた。男も居れば女も居る。年齢もまちまちで、下は十代の後半ほどから、上は四十代の顔ぶれもいる。男と同じく、街中ですれ違っても特に印象に残らない様な何処どこにでも居そうただな、一般市民然とした佇まいの者ばかりだ。

主義主張など持たない。ただ現状の打破だけを目的とした、狂気や使命感とは無縁な、純粋なまでの『変化』への渴望。

挙手をした数名の人間を確認した男は、

「感謝する。志願者は選抜を行うため部屋に残ってくれ。他は以上で解散。作戦通りに行動を願う」

余計な事は言わず、必要最小限な言葉だけを男は発した。

彼の言葉に異論を挟む者は居ないらしく、そろそろと集団は解散していく。

そこへ――

「リーダー」

か細い少女の声がした。

リーダーと呼ばれた男――先程まで指示を出していた中年男は、場に不似合いな少女の声に一瞬、幻聴かと自分の耳を疑ったが、声の主は確かにそこに存在していた。

年齢は十六、七歳。明らかにまだ未成年だろう。少なくともテロリストのメンバーとしては存在していい存在ではない――あくまで

世間の言う『良識的に』だが。

「なんだ？」

身長が低いため集団の中に埋もれていたが、この少女には見覚えがあつた。三ヶ月ほど前に組織に加わつた、最年少の構成員だ。

「あの、私もパイロットに志願したいんです」

少女は言つた。

例に漏れず、彼女も何処にでも居そうな普通の少女だ。

「……この組織に主義主張は必要ない。答えたくなければ答えなくても構わない」

一拍おいて男は少女を見下ろして言つた。

「君がテロに参加したいという理由は？」

「……生き苦しいんです——」

男から目をそらす事なく少女は言つた。

「ただ生きるのが辛（つら）いんです。こんな世界……壊れてしまえばいい。それでは理由になりませんか？」

そう言つ少女の表情には怒りも悲しみも無い。思考することに疲れてしまい、考える事を放棄した者の顔だ。

対する男は、

「いや、充分だ。君がそう望むのなら、それ以上の理由など必要無い。少なくとも俺はそうあるべきだと思っている」

男の言葉に、少女と同じ様に志願して残った者達も苦笑や微笑を浮かべた。

誰もが自覚している。こんな事をやっている自分達はまともではない。

誰かに解って欲しいなどと今更思わない。

それでも男の言葉は、この場の人間達に共感を覚えさせるのに充分だった。この男の言葉は彼等の想いを代弁してくれていたからだ。

『そうしたい』——それが唯一最後に残された自分達の想いだから。

「そうですか……」

少女も場の雰囲気気が緩んだのか、わずかに表情を崩した。

その微かな笑みは、とても魅力的なものに男は感じた。

十
十
十

「ソイテック ZOITEC不正規技術開発部門——通称 ファントム は本日をもって解散」

何の前置きも無く、白髪混じりのぼさぼさな頭をした白衣の男は言った。

名前は公にはされていない。ただ 教授 とだけ呼ばれている。

年齢はよく判らないが、おそらく四十代そこそこといった処とこだろう。研究以外は興味が無い——そんな印象がありありと感ぜられる。

「以後、同部門は ミラージュ として再編成。特に構成に変更は無い」

「……………」

「……………」

事務的に言った男—— 教授 の言葉に、 ファントム 改め ミラージュ のメンバーである処のカグヤ・イザヨイとフィーアは、無言で返答とした。

リアクションだが同じ反応でも、それぞれの心情はまったく別だった。

紅い髪の少女の感想は『またか』だった。

この部門に配属されてから既に何度目かの便宜的な手続きだったからだ。何が変わる訳でもない。故に目新しい反応など出来るはずもない。

一方、漆黒の衣装の娘はもはや 教授 の言葉など頭に入っていない。音としては捉えているが、完全に『右から左へ通り抜けている』状態だ。

「……………」

彼女の意識は 教授 越しに、キャットウォークの向こう側へ向いていた。

「まったく……。ちつたあ、部門班長（チーフ）に敬意を払えよな」

特に気を悪くした素振りも見せず、言葉面だけで 教授 は言った。もはや彼女達の態度に慣れているのだろう。

「すみませんでしたー。チーフ、愛シテマース」

投げやりな態度でフィーアが応えた。

「そつかい。それはおじさんウレシイナー」

こちらも意趣返しのためか相当投げやりだ。

「むっ。やられると腹立つな」

「だろ？」

してやったりといった感じで 教授 は片目をつぶった。不器用なウインクは恐ろしいまでに似合っていなかったが、これが彼なりの愛嬌なのだろう。

「……………」

そんな二人のやり取りには我関せず——というか、まったく意識に入っていない——といった様子でカグヤは一心不乱に前方だけを見ていた。

視線の先——そこには生まれ変わった愛機の姿があったからだ。

「もう……カグヤはさっそく シラヒメ にご執心だね」

「……色々、変わってる」

シラヒメ という単語に反応したのか、カグヤが視線は前方に向けたまま、声^{たすね}だけで訊た。

「そうだよ。前回の戦闘の修復は勿論、調整も完璧。武装も ジェノザウラー から上位機種の ジェノブレイカー に換装したの」

「…… ジェノブレイカー ？」

「——説明しよう！」

待ってましたとばかりに紅い髪と瞳の少女は人差し指を立てて説明口調になった。

「さっき言ったとおり ジェノザウラー の上位機種でね。バリエーションとは呼べない位に『まったく別の機体』に仕上がったスペシャルなゾイドだから、機体名も新たに与えられたんだよ」

「もつとも、中身は前とおんなじだがな」

黙って聞いていた 教授 が口を挟んだ。

「……おんなじ？」

「元々、シラヒメ は ジェノブレイカー になれるだけのゾイドコアの出力はあったんだけど、装備の開発が追いつかなかったの」

「ジェノブレイカー のデータ自体も完全には残って無いしな」

カグヤの疑問にフィアと 教授 が応えた。

「塗装もようやく出来たし、これで正真正銘の 白姫^{シラヒメ} だね」

補足する様に言うフィアの声を聞きながら、改めてカグヤは愛機を見上げた。以前は『骨』を思わせる白というよりはベージュに近かった色が、今は純白もかくやといった白に染めあげられている。

次にカグヤの目を引いたのは、機体の背部に設置された荷電粒子コンバーターとウイング・スラスタ、そこから左右に突き出したフリー・ラウンド・シールドの存在だ。シールド内には特殊チタン合金製の近接戦闘用装備、エクス・ブレイカーが仕込まれている。

ジェノブレイカー が 魔装竜 と呼ばれる所以^{ゆえん}でもある装備だ。

「どう？ 気に入った？」

フィアはカグヤの反応が楽しみらしく、そわそわしている。

「……いいね。早く乗ってみたい」

「ああ、早速やって貰うよ。ここも 教団 の目が厳しくなってるからな、イクスクルダー の決起に合わせて、ドサマギで脱出する」

「……あたしは部隊が撤収するまでの時間を稼げばいいのね」

「そうだ。教団 と イクスクルダー —— どちらに肩入れする必要もないが、共通の敵をもつ身としてはテロリストと共闘すべきかと思うがね。そこら辺の判断は現場に任せるよ」

「……判った。話はもうお終い？」

一刻も早く シラヒメ に搭乗したいのだろう。カグヤの表情はいつになく高揚している様に見えた。

やれやれといった風に 教授 は嘆息した。

「うん、いいよ。さっそくテストしてみよう、カグヤ」

「……うん。実戦テスト、ね」

カグヤが新たな愛機のコクピットに乗り込むと、続いてフィーアもメイン・シートの後に備え付けられたサブ・シートに乗り込む。

——グウルルルルル……。

低くうなり声を上げると共に シラヒメ の二つのカメラ・アイ
が光を灯す。

「……カグヤ・イザヨイ—— シラヒメ、出る」

純白の ジェノブレイカー が静かに起動する。

「…… 魔女 の出陣だ」

遠巻きにその様子を窺^{うかが}っていた ミラージュ のスタッフ達が、
誰ともなしにそう口にした。

魔女 —— それはカグヤの異名だ。

『ゾイドを惑わす魔性の女』—— 故に 魔女 。

—— グウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

魔女 に魅入（みい）られし純白の姫が咆哮^{ほうこう}した。

十　　十　　十

教団　に所属する、戦闘行為を担当する部門は2つある。

ひとつは『獵犬』の名をコール・サインに持つ歩兵隊員。彼等は破壊工作や諜報活動、市民の避難誘導等を主な任務とする生身の兵士である。

もうひとつは『女神』の名をコール・サインに持つゾイド乗り。小型ゾイド一機でひとつの部隊として行動を許され、対ゾイド戦を主にしながらも、代行者としての権限も持ち合わせている。

『こちらヘスティア、西B地区にて戦闘中。援護の要請を——』

『アテナよりポインター、住民の避難を急がせて。このままじゃ——』

『南S地区はなんとかなる。それよりE地区が——』

『北地区へはアンフィトルテが行きます。以後は現場の判断で——』

通信機越しに聴こえる声は混乱を極めていた。

時計の鐘が午後六時^{かね}を知らせたと同時に混乱は起きた。時報と同時にミヤコノ・シティの数ヶ所で小型ゾイドが現れ、破壊の意思を

示した。

手口は イクスクルーダー の一連のものと同じ。放置されたコンテナや大型車の貨物室から飛び出しては好き勝手にゾイドを暴れ回させるというものだ。

教団 はすぐさまこれに対処。『獵犬』を先行させ、わずかに遅れて『女神』も出撃。民間のゾイド乗りにも増援を要請した。

教団 の戦力で対応するには数が多すぎたのだ。

そして数分後、更に状況は悪化した。

教団 の戦力の出撃を見計らったように新たな敵機が出現。その数は当初の一・五倍程に増強されていた。

「——インパクトッ！」

金髪のシスターの裂帛れっぱくの気合に応える様に、強化型ゴドス・タイプ——ビアトリス は、その全高にも匹敵するパイル・バンカーを振りぬく。その先端が敵機の腹部に突き刺さると共に槍やりが打ち出され、敵機の活動を停止させた。

「ミゼットー！」

愛機 ビアトリス のコクピットでマヘリア・メリルはその端整な顔を焦りの表情に変えていた。撃墜数は今の レブラプター で二機目。更に三機の敵機に包囲されていた。

「牽制はこちらでやります。お姉さまは接近する奴から——」

マヘリアのシートの後に座る赤毛の少女——ミゼット・レミントンが応えた。が、こちらにも余裕が無いらしく言葉尻は途切れていた。
ビアトリス の左腹部に装備されたマシン・キャノンがミゼットの制御で火を噴き、別の レブラプター を牽制し、右腕に装備された主武装であるパイル・バンカー セイクリッド・ランサー が接近した ヘルキャット の爪を弾き飛ばした。

彼我兵力差は一对三。

同クラスの小型ゾイドが相手であれば、まず遅れを取る事のないビアトリス だが、数の優位は覆せ^{くつがえ}ないでいた。むしろ、一对五だった状況をよくここまで持ち堪^{こた}えたとさせ言える。

ビアトリス は敵機に囲まれない様に位置取りを行いながら後退。しかし、火器も装甲の耐久値も無限ではない。

「マシン・キャノンの残弾無し！ 機体の損傷度も危険域^{レッドゾーン}に入ります……！」

「まずいですわね」

ミゼットの悲痛な叫びに、マヘリアはなんとか平常心を保って独り言の様に呟いた。

「……ミゼット、貴女とペアを組めて良かったわ——」

突然の姉の言葉に妹である少女は絶望に近い感覚を覚えた。

「お——お姉さま……なにを……？」

「冗談だといって欲しかった。まだ手はある——ハッタリでもいい、そう言つて欲しかった。最期の瞬間までマヘリアは弱音など吐かない、気高い存在であつて欲しいと思つていたから……」

「ふふふ——冗談ですわ」

「——え？」

かくしてミゼットの希望は現実へと転化した。

ビアトリス ににじり寄つていた三つの敵機が、何かに反応して揃つて同じ方向を向いた。

それと同時にミゼットは ビアトリス のレーダーが接近する機影を捉えているのに気付いた。

「これは……？」

ミゼットが接近する機影を肉眼で確認するより早く、一機のヘルキヤット が赤い光条に貫かれた。六つの光の束が雨の様に直上から降り注いだのだ。

「……ホ、ホーミング・レーザー追尾式連装光学兵器？」

言い終わると同時、気付いたかの様にレーザー照射を受けたヘルキヤット が崩れ落ちた。

更にミゼットの視界を漆黒の機体が駆け抜けた——オオカミ型の

ゾイド。コマンドウルフ・タイプと確認するが早いか、その機体は大きく跳躍すると別の ヘルキャット の背部に着地。その背中にストライク・クローを突き立てた。

何が起こったのか判らないまま二機目の ヘルキャット も撃破された。

——ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

残った一機の レブラプター は、突然現れた漆黒の コマンドウルフ の咆哮に怯（おび）えた様に後ずさった。

全身を黒く染めながら、その各所には紅いラインが入れられた、どこことなく女王の気品を感じさせるゾイドだ。

ミゼットは知っている。

それは闇色の姫。

故に ヤミヒメ 闇姫 。

またの名を 漆黒の狂襲姫（きようしゅうき） 。

『——よ。何でも屋の入用（こいもち）はないか？ 安くしとくぞ』

通信は今まさに現れた黒い コマンドウルフ からだ。音声と共

に画像も表示され、そこには二十代前半だろう青年の姿を映していた。愛機と同じく、やや長めの黒い髪と瞳。気怠い表情。

アサト・タチバナ。

クスノセ機獣派遣事務所　に所属する、所謂民間のゾイド乗りというやつだ。

「な——何言ってるの、バカじゃないの!？」

安堵あんどよりも何よりも、ミゼットは理不尽な怒りにも似た感情に駆られていた。

「一大事なの！　教団　への協力は市民の義務よッ！」

「そう言いつつ嬉しそうね、ミゼット？」

ミゼットとは対照的に、既に平静を取り戻していたマヘリアは、妹の憤慨しつつも喜色に染まった表情を見て言った。

「お、お姉さまッ!？」

『……おい、タダ働きはご免だぞ』

二人のやり取りなど知った事ではないとも言つかのようにアサトは口を挟むが——

「黙りなさい、ボンクラ！　お姉さま、こんな奴に助けて貰う必要ありませんよ!」

『……………』

ミゼットの怒声によって一蹴された。

「残念だけど、そうも言ってもらえないわ、ミゼット」

姉の言葉にミゼットがレーダーに目を戻すと、残った一機以外にも新たな敵機の反応があった。

「新手です！ 数は……三機！？」

「そういう事ですわよ。——アサトさん、機体の整備・補給は無償で行います。それと報奨金くらいは出させて貰いますが、如何でしょうか？」

人当たりのいい笑みを浮かべ、マヘリアは言った。

『あいよ。商談成立だ』

アサトはそう言うつと通信を早々に終え、残る一機の レブラプタ
ーに踊りかかった。先ほどの咆哮に怯え、戦意が萎えてしまった
敵機にもはや抵抗する力はなかった。

「——さてミゼット、こちらにも負けてもらえませんか。まだ動けますわね？」

マヘリアのそれは質問ではなく確認だった。

「と、当然です！ マシン・キャノン強制排除。^{バージ}ダメージ・コントロール。各部チェック——オールOK。行けます！」

ミゼットは表情を正し、情報を読み上げていく。

「上出来ですわ。それでこそわたくしの妹です。——ビアトリス！」

——グウオオオオオオオオツ！

マヘリアの声に応える様に片膝ひざを突いていた機体を持ち上げ、満身創痕の恐竜型ゾイドが吼えた。

『まだ戦える』——と言う様に。

＋　＋　＋

新手は三機——小型ゾイドであれば ヤミヒメ の敵ではない。
だが、やはり複数を相手に油断は出来ない。

「その前にこいつは墜おとしとかないとな。——ん？」

すっかり戦意を喪失した様子の レブラプター に目標を定めつつ、アサト・タチバナは愛機の思念を感じた。

『使え』——と。

「さっそくか、堪え性こらしょうのないお嬢さんだ」

駄目押しする様に ヤミヒメ の思念がアサトの思考を刺激する。

「判ったよ。——クノキ、レヴァンティン を使うぞ」

『……了解』

アサトの呼びかけに女性の声を思わせる無機質マシン・ヴォイスな機械音声が応えた。 ヤミヒメ に搭載された自律支援型戦術支援人工知能装置であるクノキだ。

もっとも、ただの人工知能が主の命令に逡巡しゆんじゆんを見せる事など無いだろうが。

「なんだ、不満か？」

『強奪に近い形で持ち込んだ装備を使うのはお勧（すす）め出来ません』

「倫理的にか？」

『システムの話です。コントロール・デバイスに不備がある場合があります』

「そうかい。そこはお前の裁量さいりやうでなんとかしてくれ」

『……了解しました』

言うだけ無駄と判断してか、クノキは主との問答を切り上げ、自分の仕事を開始した。

コマンドウルフ のカスタム機である ヤミヒメ の特徴のひとつに、オリジナルを凌駕する『装備の汎用性』がある。背部に増設されたアタッチメント・システム シダレザクラ 。これにより、様々な武装を状況に応じて『持ち換える』事が可能なのだ。

現在そこには、見慣れぬ特殊な形状をした板状の物が二つ——恐らく『剣』だろう——装備されていた。

そのうちの機体右側に装備されていたものが、^{アーム}支持腕によって、ヤミヒメ の口元まで運ばれた。

ヤミヒメ がその『剣』の柄を^{つか}くわえる形で握ると、アームは『剣』を離して元の位置に戻った。

「紫電一閃——」

『レヴァンティン ^{インシャライゼーファイ・リリース}起動。安全装置解除。使用可能です（スタンバイ・レディ）』

アサトの激発音声（トリガー・ヴォイス）に応じて、クノキによる武装の使用承認が行われた。

「レヴァンティン——叩き斬れッ！」

機械の剣——そう呼ぶに相応しいメカニカルな^{デザイン}意匠のそれを構え、

袈裟斬りの要領で斜めに振り下ろすと、レブラプターは為す術も無く胸部を切り裂かれその場にくず折れた。

機剣——レヴァンティン は刃に相当する白刃をバチバチと放電させると、すぐさま本体の冷却作業に入った。

「使えるじゃないか」

『ですが、万全は期すべきです。使用回数は良くてあと五回とお考えください』

満足げなアサトに対し、クノキはあくまで淡々と応えた。

「あいよ。次が来るぞ」

三機目の敵機を墜とすのと、新手の三機が入れ替わる様に姿を現したのはほぼ同時だった。

レブラプター・タイプが三機。

『マスター、熱探知機に反応。有人機です』

「ウイルス任せの無人機は打ち止めか？」

マヘリア達の元に駆けつけるまでに実は三機、都合六機のゾイドを撃墜してきたが、これらは全て無人機だった。搭乗者の腕にもよるが、基本、有人操作の方が動きが読みづらく手強い場合がほとんどだ。

ヤミヒメを敵と判断したのだろう。定石どおり、こちらを包囲

する隊形を採って来た。

だが――

「好都合だ」

アサトは怯^{ひる}まない。むしろ状況を楽しんでさえいた。

ヤミヒメ は既に先ほどの武装を格納し、もう一本の『剣』をその口に咥えていた。

「飛龍一閃――」

トリガー・ヴォイス。クノキの使用承認がそれに続く。

「シュランゲバイセン――薙ぎ払えッ！」

機体ごと大きく ヤミヒメ が加えた武装を振り抜くと、『剣』の基部の円状のパーツが回転。刀身が何十にも分割され、ワイヤーで繋がったそれはもはや『剣』ではなく『鞭^{むち}』だった。

ヤミヒメ がその場でほぼ一回転すると、畢竟、『鞭』も円を描くように一回転する。それはとてつもない圧力を発生させ、遠心力を上乗せさせた衝撃波となり、周囲のあらゆる物体を吹き飛ばした――まさに薙ぎ払うかの様に。

三機の レブラプター は回避する事も出来ず衝撃波に打ちのめされ、機体をひしゃげながら吹き飛ばされる。

その場に立っているのは既に ヤミヒメ だけとなっていた。

＋　　　＋　　　＋

「……………すごい——」

ミゼットは呆然と呟いた。

圧倒的などという言葉では足りない。もっと何か……そう、驚異的という言葉が相応しいだろう。

それほどまでに　ヤミヒメ　の戦いは一方的だった。否。戦いとすら呼べない。

マヘリアの判断で物陰に隠れなければ、自分達も先ほどの『鞭』による攻撃の余波を受けていたかもしれない。

「お姉さま……あれが　漆黒の狂襲姫　と言われる所以（ゆえん）なんですか……？」

その声は畏怖すら含んでいる様に聞こえる。

「あんなものではないわ。あの機体の本当の力は——」

対するマヘリアの応えはどこか淡々としていた。

「え？」と続く妹の言葉を遮るようにマヘリアは通信を開いた。

「——アサトさん、ご苦労様です。時に、なんですか？ その武装は」

マヘリアが ヤミヒメ の見慣れない武器を指して言った。

『ちょうど整備中でな。 カグヅチ と二五〇ミリ改無^{ライフル}しじゃ心許なかったんで借りてきた。 ムラサメ・ファクトリーの試作品だ』

アサト・タチバナの返事に、『強行軍にも程があります』と ヤミヒメ のサポートユニットであるクノキが口を挟んだ。

ムラサメ・ファクトリーはアサトが^{ひいき}贋^{ひいき}にしているゾイド用の兵器開発メーカーのひとつである。

「……そうですか。 まだやれそうですか？」

細かい経緯はあえて訊^きかず、マヘリアは確認すべき事を訊^{たず}ねた。

『ん。 問題ないが……どうした、赤毛？』

通信画像のアサトが、マヘリアの後方に目を向けて言った。

「あ、赤毛って言うなッ。 このボンクラ！」

『お前がボンクラを撤回したらな』

「そんな日は永遠に来ないわよッ！」

すっかり普段の様子を取り戻したミゼットに安堵しつつ、

「ミゼット、そこまでになさい。まだ状況は続いているのだから」と微笑すら浮かべながらマヘリアは言った。

アサトが相手になると途端にムキになる妹の姿が微笑ましくて仕方がないといった処だ。

「す、すみません」

姉に言われてしまつては引き下がるしかない。なにより、他では戦闘はまだ続いているのだ。

ミゼットはすぐさま戦況を分析。情報を整理する。

「戦況はこちら側が押し返しています。テロリスト・グループの制圧は時間の問題だと思われます」

序盤は数と奇襲でテロリスト側に押されていたが、質では完全に教団が上だ。

アサトの様な民間の戦力と合流し、持久戦に持ち込めば『守る』側が優勢になる。

「そのようですわね」

ミゼットのまとめた戦況分析はマヘリアの眼前に表示された表示窓にも共有され、ヤミヒメにも送信されている。

『じゃあ俺はこのまま周辺の敵を……なんだ？』

「アサトさん？ どうされましたの？」

不意に言葉を切ったアサトにマヘリアは疑問の声をかけたが、応えたのはミゼットだった。

「お姉さま——こ、高熱源体、急速接近！ 荷電粒子砲です！」

十 十 十

視界がまばゆい閃光に包まれるのと、耳をつんざく轟音が響くのはほぼ同時だった。

クノキの咄嗟^{とつさ}の判断により機体を『限定起動』状態に移行。 ヤミヒメ の前方を守る様にEシールドを発生させたのだ。

荷電粒子砲とEシールドが衝突する。 荷電粒子砲の照射は続く。

「ちい……クノキ！ 索敵を——」

『状況が安定するまでは不可能です。 今は耐えてください』

アサトが状況を確認すると、すぐさまクノキに次の指示を与える。が、戦況がそれを許さない。クノキの処理能力をもつても荷電粒子砲を受け止めるので精一杯だった。

警報がコクピットに鳴り響き、ガタガタと振動が襲う。

「耐えろ ヤミヒメ！」

愛機を鼓舞（こぶ）するアサト。

パイロットの弱気は愛機に不安を与える。だが逆に言えば、精神リンクで繋がったパイロットの意志はゾイドに力を与える。

ヤミヒメ はアサトの想いに応えるように四肢に力を込めると、衝撃を受け止めるように地面に強く踏ん張った。

低く漆黒のオオカミが吼え、Eシールドの出力が上昇する。

青い燐光が輝きを増し、荷電粒子を弾き続ける。

やがて衝撃が徐々に収まり、アサトの視界を覆っていた閃光が晴れた。

その視界の先。荷電粒子砲でえぐられた地面には熱が立ち込め、その先にいる機体のシルエットをぼやけさせて見せる。

距離は既に百メートルと離れておらず、その機影がやがてはつきりと確認できた。

純白のカラーリングを施されたティラノサウルス型ゾイドだ。

「……クノキ。奴か？」

アサトはそのゾイドに見覚えがあった。武装と色が変わっている

が、このタイプの機体は現在ほぼ他に存在しない。

『データ照合。武装とカラーリングに変更が見られますが、同一の機体と思われます—— シラヒメ です』

クノキはやはり淡々と事実を述べていく。

『あの機体は ジェノブレイカー。ジェノザウラー の上位機種ですが、その格闘性能は別物です。特に接近戦の際には、左右のフリー・ラウンド・シールド内に装備されたエクス・ブレイカーに注意してください』

アサトの眼前に表示窓が展開し、エクス・ブレイカーの概略図が表示される。
ウィンドウ

「なるほど、カニバサミか」

クノキによって示された概略図から感じたアサトのイメージはそれだった。

すると、ピツという電子音と共に ヤミヒメ のコクピットに通信回線が開かれた。送り主は件の白い くだん ジェノブレイカー からだ。

「……よう、また会ったな——カグヤ・イザヨイ」

道で知人とすれ違ったような気楽さで、アサトは通信相手の名前を呼んだ。

シラヒメ のデータと一緒に記録してある。以前と変わらぬ黒い衣装と退廃的な雰囲気の花だ。

『……ええ。久しぶり、アサト・タチバナ。あたしの名前なんか覚えていないと思ってたけど……意外ね』

通信相手の娘——カグヤの印象は間違っていない。アサトは他人の顔と名前を覚えられないタイプだ。データが残っていなければ彼女の名前も覚えてはいなかっただろう。

しかし、この娘の持つ一種異様な雰囲気は忘れようがない。命のやり取りをした相手ともなれば、顔くらいは嫌でも覚える。戦闘服とは思えないゴスロリ・ファッションもその一端は担っているようが。

『はあい、アサト！ 私も居るよ！』

そしてカグヤが居るのであれば、当然、複座にはもうひとり少女が居た。

『私に会えなくて寂しかった？ アサトがいいなら、ずっと一緒に居てあげるよ？』

カグヤの通信画像に割り込んできたのは十二、三歳の少女だ。鮮血の様な紅い髪と瞳の少女……。

「フイーアだったな。お前には訊ききたい事がある」

この少女も同様だ。以前の戦闘で自らフイーアと名乗った。無邪気そうでいて蠱惑こわく的な表情を浮かべる様は、明らかに中身と入れ物が釣り合っていない様にアサトは感じる。

『いいよ。女の子の秘密、いくらでも教えてあげちゃう。ただし、

私達に勝つてからだよ?』

「……………」

やはりそうだ。この少女はどこかおかしい。

いや、おかしいのは娘の方も同じだ。

彼女達が シラヒメ と呼ぶ機体も。

あるいはアサト自身も、彼女らとそう違いのないのかもしれない……。

『——カ、カグヤさん!?』

アサトの思考を断ち切ったのは、通信による会話を聞いていたのであろうマヘリアだった。後方に目を向ければ彼女の愛機 ビアトリス も健在だった。

『カグヤさん! マヘリア・メルルです! どうして貴女が……?』

状況を認識できない——いや、理解するのを拒否する様にマヘリアは狼狽ろうはいしていた。

その取り乱しように、聖女 と呼ばれる気品や物腰はお世辞にも感じられない。それだけ気が動転しているのだろう。

「マヘリア、あんたの知り合いか?」

アサトの問いに応えたのは当のマヘリアではなく、カグヤだった。

『……奇遇、でもないか。あなたが 教団 の人間なら、こういう可能性も充分にありえた……』

漆黒の衣装に身を包んだ娘は、やはりなんの感情も見せずに言った。

『……あなたの話は面白かった。神様なんて居ない……そうでしょう？』

焦点の定まらない隻眼^{せきがん}でこちらを――否、通信画像のマヘリアをぼんやりと見てカグヤは言う。

『——そんな話より、すぐにその機体から降りてください！ 詳しい話は後で訊かせて頂きますわ……だから――』

必死な様子だ。カグヤとの関係は知らないが、マヘリアにとっては重要な相手なのだろうとアサトは判断した。

「マヘリア、こいつは端^{はな}からやる気だ。ゾイドに乗ってるんだからな」

『けど――』

『お姉さま！ 新手が……小型ゾイドが一機、教会に向かってます！
なんでこんな今頃！？』

既に勝負は決している。このタイミングでたった一体の援軍など何の意味もない。それが勝つための（……）増援であれば……。

「相手はテロリストなんだろう？ 連中にとっての勝利条件——目的はなんだ？」

『え？ アンタ、何言ってるの……』

テロリストの目的を察したのである。アサトの発言に、ミゼットは訳が判らないといった様子で言葉を発した。

今回の手口は、イクスクルーダーの起こした一連のテロ行為と同一だ。彼らに政治的な思想や主張は無い。実際、これまでの犯行声明にそういった類の要求は一切無かった。

『……行きましょう、ミゼット。この位置ではわたくし達でないと間に合わないわ』

『お、お姉さま……？』

マヘリアは気付いたのだろう。迷いを振り切るように思い切り操縦桿を引くと、ビアトリスを新たな敵機に向けて走らせた。

今は 教団 のシスターとしてやらなければならない事がある。

『アサトさん……ここは任せますわ——』

「あいよ」

『カグヤさん……また後ほど』

『……………』

カグヤは無言。通信が切れる前に一瞬見せたマヘリアの、葛藤と苦悩に満ちた表情は痛ましかった。

＋　　　＋　　　＋

イクスクルーダー　の作戦は三段構えだった。

第一段回は無人機による陽動。

第二段階は時間差での有人機による　教団　と、それに味方する敵戦力のあぶり出し。

そして最終段階が空になったであろう『目標』への、単独による奇襲だった。

「……………」

少女は初めて乗り込んだ愛機をひたすら走らせた。　イクスクルーダー　の集会でパイロットを志願した少女だ。

彼女の乗機は　ヘルキャット　。

高速戦闘と隠密行動に特化した小型ヒョウ型ゾイド。旧型でありながら高いステルス性と走破性を持ち、　密林の暗殺者　とも呼ばれた名機だ。

先ほど、なけなしの整備で展開を可能とした光学迷彩は切れ、今や頼れるのは自機の脚だけとなっていた。だがそれでも充分に距離は稼いでくれた。『目標』はもう目と鼻の先と言える。

イクスクルーダーの『目標』——それはこの世界の平和の象徴である 教団、その本部である教会だ。

それを破壊する事に意味は無い。

それで何が変わるわけでもない。

だが、自分達の鬱屈とした想いは、何かを壊す事でしか報われない。

この『自分達以外が幸せな世界』——その象徴を。

「……………」

何を思っ^てリーダーがこの役を自分に任せたのかは判らない。単なる気まぐれか、何らかの勝算があつたのか。

どちらにせよやる事は変わらない。ここまで来てしまったのだ。

唯一の火気であるレーザー機銃の照準を白い荘厳な建物へ——ステンドグラスの窓を^は埋められた教会へ向ける。ロクな整備もしていない代物だ、安全装置などない。あとは引き金を引くだけだ。だが

「……………なに、どうして？」

引き金が引けない。いや、指が動かない。

ここに至って自分の行為に疑問を憶える。それは教会という建物の持つ神秘性がそうさせたのかもしれない。

冷静になって周囲を見渡す。

瓦解した建造物と、あちこちで上がる火の手。

遠くからは爆音と、金属が砕け散る音も聴こえる。

戦闘はまだ各所で続いている。

イクスクルードーの決起に便乗した他の組織によるテロ。それはあらかじめ想定していた事だった。教団相手に一戦交えるなら数が必要。だから組織のネットワークを通じて決起の情報を流した。

ここまで大規模に動いたのだ、失敗は許されない。

既にイクスクルードーは今回の決起に戦力を使い切ってもいる。背水の陣といってもいい。

「なのに……どうして……？」

ただ指を動かし、教会を破壊する。それが出来ない。

この世界で平和を——幸福を享受している者達に思い知らせるのではなかったのか？

犠牲の上に成り立つ、どんなに脆く儚い世界であるかを。

犠牲になっている者達が居る事を。

それなのに……。

「どうして……………」

次の瞬間、衝撃と共に少女の視界は暗闇に閉ざされた。

ヘルキャット が機能を停止し、コクピットの照明が落ちた。

なんの操作もしていないのに頭部に当たるカバーが開き、操縦席が開放された。

「なに…………どうして？」

訳が判らず動転する少女が次に見たものは、自分に向けられる拳銃の銃口だった。

十 十 十

「手を挙げて、弁明の機会が貴女にはあります」

マヘリアは愛用のハンドガン グロック を ヘルキャットの

パイロットに向けた。

こうなつた経緯はどうという事はない。

動きを止めた ヘルキャット に対し、マヘリアは速攻を決断。全速力で ビアトリス を肉迫させると、敵機のコンバット・システムを一撃で打ち抜いたのだ。

恐らく ヘルキャット はレーダーもほとんど死んでいたのだろう。 ビアトリス の接近にまるで気付く素振りも見せず、レーザー機銃を構えた姿勢のまま、その場にくず折れた。

その後、愛機をミゼットに任せ、マヘリアは単身 ヘルキャットのパイロットを捕縛すべく乗り込んだのだ。

搭乗者が少女である事に一瞬躊躇したものの、拳銃は下ろさない。

どこにでも居そうな一般人がテロに参加する。珍しい事ではない。

「…… 教団 のシスター？」

「そうです。投降なさい。貴女はまだ罪を犯していませんわ」

詭弁だ。少女が イクスクルーダー であれ、便乗した別組織の人間であれ、無許可でゾイドを動かせばそれだけで犯罪行為だ。

「投降はしない。殺して」

少女の顔には何の表情も見られない。何にも期待していなければ悲壮感も無い。考える事に疲れてしまった人間の顔だ。

この顔をマヘリアは見た事がある。漆黒の狂襲姫 と呼ばれる
ゾイドのパイロットと、今日知り合ったばかりの娘だ。

「もうたくさんなの。こんな世界で生き続けるのは……もうたくさんなのよ！」

そう叫んだ少女の顔にはやはりなんの表情も見られなかった。

「——ッ！」

マヘリアは苛立った。

何故こんな顔をする。何故あきらめてしまふのだらうと。

判っている。自分に彼等の気持ちが解らないのと同様、彼等にも自分の気持ちは解らない。

考え方が、見てきたものが違うのだから。

それでも伝えなかった。この世界は悲観するだけのものではない
と——

「『こんな世界』かもしれませんが。それでも貴女が生まれてきた世界です。意味があるはずなんです。綺麗事を言うつもりはありません——いえ、わたくしが貴女に何か言う権利さえ無いかもしれません。それでも……」

マヘリアは グロック を下ろして少女を抱きしめた。

「――！」

「生きる事をあきらめなさい。貴女達は世界に拒こはまれていると思っっているかもしれません。ですが、それでもわたくしは貴女達に生きて欲しい。生まれてきたことを後悔しないで欲しい」

少女の身体が震える。

「勝手な事言わないで……そんな、無責任な事……」

「はい。これはわたくしの身勝手な願いです」

身体力が抜け、嗚咽おえつを漏らす少女を抱きしめマヘリアは思う。

この少女は救いを必要としていたのだと。恐らくは誰もがそうだ。解るはずがないとあきらめていても、最後の一線では本当は解って欲しい、救いの手を差し伸べて欲しいのだと。

（カグヤさん……貴女もそうなのでしょう？）

＋　　　＋　　　＋

二体の『姫』の戦闘は大詰めを迎えていた。

シラヒメは左のフリー・ラウンド・シールドを失い、ヤミヒメは前回の戦闘では装備していなかった奇妙な『剣』を破壊された。

「カグヤ、もう時間がないよ。これ以上ここに居ると脱出出来なくなる」

「……………」

フィーアの言葉にカグヤは応えず、右のエクス・ブレイカーを振り下ろした。対する ヤミヒメ はこれに応じず後方に跳躍。距離を取った。

「カグヤってば！ これ以上時間をかけると 教団 の連中に捕まっちゃうよ。今日はここまでにしよう」

「……………わかった。その前に——」

再び通信回線を開くと、カグヤは ヤミヒメ のパイロットに呼びかけた。

『——なんだ？ 敵と話をしながら戦う趣味はないぞ』

そう言いながらも応えたのは当然、黒い髪青年——アサト・タチバナだ。

何かに疲れたような印象のある表情はそのままだが、戦っている時の彼は、どこか高揚している様にも見える。

「……………あなた、どうして生きてるの？ どうして生きていられるの？」

『あ？』

「……あたしにはわからないの。どうして生きてるのか」

『……………』

カグヤの言葉に対し、アサトは無言を返した。

何を言っているのか判らないのではない。何と返したらいいのか判りかねているといった表情だ。

「……あなた、あたしと同じでしょう？ どうして生きてるかわからない。いつ死んでもいいと思ってる——死にたがり」

『……勝手に同じにするな。だったらなんだ？ 同族意識か？』

アサトは淡々と続ける。

『同情でもしてるつもりか？ それこそ余計なお世話だ』

「……そう、つれないのね」

応えるカグヤもやはりその口調に感情はない。

「……さようなら。また会いましょう、漆黒の狂襲姫」

『……………』

スラスターを全開にしてその場を離脱する シラヒメ に対し、ヤミヒメ は動きを見せない。追撃する気はないのだろう。

「追っ手が掛かる前に脱出するよ、カグヤ。まだ周囲に敵影なし」

「……うん」

「あーあ。結局、今日も痛み分けだね」

「……そうだね」

フィーアへの相槌もそこそこに、カグヤはコンソール下のピル・ケースに目を移した。ここ最近、錠剤タブレットを飲む量が明らかに減っていた。

（……フィーアと出逢ってから？）

「カグヤ、どうかした？」

パートナーの無言をどう思ったか、紅い髪と瞳の少女が複座からこちらを覗き込んでいた。

「……なんでもないよ、フィーア」

城壁を飛び越え、ミヤコノ・シティを後にする。後方に遠くなくていく街にわずかに想いを馳せた。

——『カグヤさん……また後ほど』

そう言ったあのシスターはどうしただろうか？

（……マヘリア・メリル）

機会があればまた会ってみたい。そんな感情を抱いたのは久々だ。

「……また、ね」

「？ カグヤ、何か言った？」

「……なんでもない」

この日、ミヤコノ・シティは 大戦 終結後、最大規模の被害を被った。

教団 側の被撃墜ゾイド数・八体。

死者・二百八人。

負傷者・六百五十人以上。

テロの主力グループであった イクスクルーダー のメンバーはそのほとんどが捕縛、もしくは自害した。

つづく

第十一話『アポカリプス』

もしこの世界がひとつの物語だったとしたら――

当然、『始まり』から『終わり』まで全てを記された台本が存在するはずだ。始まりが『過去』なら、読み終えた箇所が『現在』、そして終わりは『未来』を意味する。

もし、『この世界という物語』の台本を読むことが出来れば、それは未来を知る事と同義となる。

無論、これはそんなものが『あつたとしたら』だが……。

×

×

×

第十一話『アポカリプス』

始まりは一冊の『本』だった。

教授 に渡された本。それは本の体裁ていさいをしていたが、装丁にはタートルも著者の名も記されていなかった。極端に薄いその本を捲めくると、途端にカグヤの意識に映像が浮かんだ。

二体のゾイドが戦っている。一方は漆黒のオオカミ型ゾイド。もう一方は純白のティラノサウルス型ゾイドだ。

漆黒の機体は ヤミヒメ 。先日のミヤコノ・シティで戦ったコマンドウルフ・タイプ。

純白の機体は シラヒメ 。カグヤの愛機だが、その武装は彼女の知るものではない。

詳細を確認する前に映像は消え、続けて声が聴こえた。彼女を呼ぶ声。

気付くと本を閉じていた。

本の内容はまるで憶えていない。あるのは激突する二体のゾイドの映像と、自分と呼ぶ誰かの声だけ。

「……………」

何が何だか判らない。白昼夢を見ていたかのような感覚。

「……………これは何？」

彼女——カグヤ・イザヨイは疑問を口にした。

年齢は二十代前半だろう。断言を拒むのは彼女の外見が特異だからだ。適当に切った様な長い黒髪はあちこちで長さが違っており、黒い瞳の右側は眼帯に覆われている。

更にカグヤの印象を異様なものに行っているのが服装だ。下は黒いスラックスに、スカートを思わせる黒いパレオ。上はドレスともジャケットとも取れない黒装束。どれもレースとフリルで過剰なまでに装飾が施されており、そのファッションはゴシックロータを思わせる。

一種異様な娘だ。

だが、その場に居合わせた男は気にした風もなく、カグヤの質問に答えた。

「『預言者の黙示録』——私はそう呼んでいる」

男の本名をカグヤは知らない。出身・年齢・経歴もすべて不詳。ただ 教授 とだけ呼ばれている。だがカグヤにしてみれば呼び名さえあればそれ以上の情報は必要無い。

「……それで、その本は何なの？」

「部屋を整理していて見つけた。何故だか君に見せるべきだと直感的に思った……いや思わされた（……）と言うべきか」

「……質問の答えになってない」

無表情にカグヤは呟いた。常に焦点の定まらない様な虚ろな表情の娘だが、この時ばかりは多少の苛立ちを感じていた。

「教授 に訊^きいても無駄だよ、カグヤ」

カグヤと 教授 の会話に割って入ったのは少女だった。見た目通りなら十二、三才くらいの可愛い少女だ。鮮血を思わせる紅いショートカットと大きな瞳。黄色いヘアバンドと、水色の薄手のコートが良く似合っている。

だが、見る者によっては少女の存在に違和感を持つかもしれない。どこか存在感が曖昧^{あいまい}で、少女と言う規格から外れているような感覚に襲われる。

フィーア。

それが少女の名前だ。

「……どういうこと、フィーア？」

「その本を読むには資格が要るの。適合者じゃない人にはただの紙切れの束。普通なら手をつける気にさえならないよ」

フィーアはそう言つと無邪気に、しかし、どこか蠱惑的^{こわく}に嗤^{わら}つた。

＋　　　＋　　　＋

教授　曰く『預言者の黙示録』と呼ばれた本による不可思議な体験から三日、カグヤ達は先日の戦闘による　シラヒメ　の損傷箇所の修理をする暇もなく、暗黒大陸テュルクへと移動した。

目的地はトローヤ。ガイロス帝国発祥の地であり、そして　大異^{グランド・カタストロフ}　によつて廃墟と化した、廃都。

カグヤを呼んだ『声』はそこを指定していた。そして、彼女が見た映像に興味を持った　教授　が、輸送艇を都合してくれたのだ。

輸送艇を残し、カグヤとフィーアは　シラヒメ　にて目的地を目指し発進した。

「ねえカグヤ、装備を外しちゃつてよかったの？」

サブ・シートに座つたフィーアが訊^{たず}ねる。

シラヒメ　——ジェノブレイカー・タイプと呼ばれるその機体は、

その名に違わぬ純白色で塗られている。純粋な戦闘用ゾイドとしては最高位にある機体だ。だが、本来あるべき背部の荷電粒子コンバーターと六連装スラスタ^{アーム}は外されており、右腕部にのみフリー・ラウンド・シールドが支持腕^{アーム}によって装着されている。

現在の シラヒメ はシルエットとしては下位機種である ジェノザウラー に近い。

「……いいよ。この方が機体が軽い」

応えたのは当然、パイロット・シートで操縦桿を握るカグヤだ。

現在 シラヒメ はホバー走行で移動している。機体を浮かせる程の出力と機動性がティラノサウルス型ゾイドの特徴のひとつである。

「確かに接近戦をするなら、こっちの方が取り回しはいいけど」

「……なにか不満なの？」

「別に？ 飛び道具は全部外させたくせに、フリー・ラウンド・シールドだけは無理矢理付けさせる誰かさんの近接バカっぷりに呆れるだけ」

「……どうせ使わないなら機体を軽くした方がいい」

「そう。ま、いいけどね」

言っても無駄と悟ってか、フィーアはそれ以上言葉にしなかった。

やがてトローヤの景色が遠目に見えてくる。神殿のような巨大建造物だ。

「……………！」

カグヤの脳裏に映像が浮かんだ。『預言者の黙示録』を手に取った時に見たイメージ——二体のゾイドが戦っている。

「カグヤ、レーダーに感あり。お出迎えみたいだよ」

フィーアの報告が聞えた時には、すでにイメージは消えていた。

「……………やっぱり、あたしを呼んでる」

「また見えたの？ 例の映像？」

「……………うん。あそこが目的地で間違いない」

「じゃ、早いとこ済ませちゃおう」

神殿が肉眼でも確認出来る距離に到達する。そこへ行かせまいとするかのように現れたのは、大量の小型ゾイドだった。

「……………なに、あれ？」

「うわ、キメラブロックスだ」

キメラブロックス。

それは人工のゾイドコアを複数持つゾイドブロックス——その発

展型である。合成獣キメラの名が示す通り、複数の生物の特徴を備えた外見をしている。

「飛んでるのが　フライシザース　。トカゲみたいなのが　ディプロガンズ」

フィーアが簡単に説明をする。

「でもって、それに指示を出してるのが　ロードゲイル　ね」

開発当初のキメラブロックスは、ゾイドとしての闘争本能が制御プログラムを侵食してしまい、敵どころか味方にまで襲い掛かり、さらには他のゾイドを喰らっては突然変異を引き起こしてしまう事もあったため軍事的な利用価値は低かった。それらを遠隔統制するために開発されたのがガーゴイル型キメラブロックス　ロードゲイル　である。ヒトに近い四肢を持ち、背中には一对の羽根。右腕にはハサミ、左腕にはスピアを装備している。

五体の　ロードゲイル　と、その支配下にある五十機の　フライシザース　と　ディプロガンズ　の大部隊が展開している。

「……敵、かな」

「こつちを包囲するようにつづいてる。迎撃行為だと思うよ」

「……なら、突破する。エクス・ブレイカー展開。チャージング・ブレードも」

「はいはい。準備オール・オッケーだよ」

カグヤの指示通りにファイアが シラヒメ の装備を展開させた。右腕部に装着されたフリー・ラウンド・シールドからは『カニバサミ』を思わせる一対の特殊チタン合金製の刃が、頭部にはツノを思わせる一本のブレードが現れた。

「……行くよ—— シラヒメ」

主の号令と共に、 シラヒメ が殺戮の咆哮を上げた。

白い機体が加速する。まずは至近距離にいた デイプロガンズ を踏み付けにし、左側に回りこんできた別の一体を蹴り飛ばし、更に迫り来る二体に左右の腕を飛ばして頭部を潰す。そして後方に回り込んできた フライシザース に掴んだ デイプロガンズ を投げつけて叩き落とす。更に迫り来る フライシザース の群れをエクス・ブレイカーで粉碎し、チャージング・ブレードで一刀両断にする。

瞬く間に十機近いキメラブロックスがスクラップに変わる。

だがそれでもキメラブロックスの群れは止まらない。次々に デイプロガンズ が シラヒメ に群がり、 フライシザース が上空を旋回する。

それはまるで死肉に群がる異形の群体——終末戦争を思わせる異様な光景だった。

その光景を遙か高空から見下ろす人物が居た——否。正確に言えば、そこに居るゾイドの視覚情報を読み取っているというのが正しい。実際、高高度で滞空しているのは無人機である。

レドラー　に酷似した白と青を基調にしたドラゴン型の機体。

その名は　ブラウリッター　。

「　アインヘリアル・システム　、正常に稼働中。　五重奏団^{クインテット}　、全機健在。キメラブロックスの損耗率十パーセント——」

ブラウリッター　の目を通して呟くのは十代半ばくらいの少女だ。ショートカットの銀髪と澄んだ碧眼^{へきがん}。美しい少女だが、戦場を観察するその表情は驚くほど冷めている。

「何者でしょうか？　こんな所に用があるとは思えませんが」

キメラブロックスの群れに呑みこまれた白いジェノザウラー・タイプに見覚えは無い。しかし、不思議と知っている様な感覚もある。

「まさかとは思いますが……ん？」

突如、閃光が走った。それはキメラブロックスの群がる戦場の中から放たれた荷電粒子砲の光だった。閃光は数機の　ディプロガンズ　を巻き込みながら進み、後方に居た　ロードゲイル　の一体を消滅させた。

「^{トーレ}三番機　がやられました。残存機の指揮は　^{ウーノ}一番機　と　^{ドゥ}二番^{ーエ}

機^{フォロ}が代行。^{クアットロ}四番機と^{チンク}五番機は後方へ。^{アンサンブル}合奏を^{カルテット}四重奏団に移行^{シフト}」

少女は焦ることなく ブラウリッターへ——その統制下にある四体のロードゲイルへ指示を送る。

アインヘリアル・システム——それは総数五十体のキメラボックスと、それを統制する五体のロードゲイル、更にそれを統括するブラウリッターによる兵器体系を意味する。

言わばたったひとりの指揮者による『^{ワンマン・オーケストラ}単身楽団』である。

指揮棒がブラウリッターなら、それを振っているのがこの少女だ。

「行きなさい、荒々しく（アジタート）！」

十 十 十

キメラボックスの動きが変わった。

恐らく指揮官機^{ロードゲイル}の一体がやられた影響だろうとフィアは察したがカグヤには伝えない。伝えたところで彼女の戦術は変わらないだろうから。

一体、また一体とキメラボックスの数が減っていく。群がって

くるそれらを、片っ端から シラヒメ が撃破する。

体勢を立て直すために荷電粒子砲を使ったが、本来、 シラヒメ に飛び道具など必要ない。その全身が強力な武器と言えるのだから。

「……まだ足りない」

更に別の敵機を破壊する。壊せば壊すほどカグヤは自分の中の破壊衝動が満たされていくのを感じていた。

「……もっと……もっと来て……」

壊し、砕き、切断し、潰していく。

「……あたしに実感させて——生きてるんだって」

カグヤの隻眼に暗い光が宿っていく。虚ろだった焦点が一点に合わさって行き、思考もクリアになっていく。

「ねえカグヤ、残りも荷電粒子砲で一掃した方が——って、聞こえてないよね」

フィーアは完全にトランス状態の（イッってしまったている）相棒に嘆息しつつ、

「でもね、そういうカグヤが私は好きだよ」

そう呟いた。

＋　　　＋　　　＋

「……そういう事ですか」

ブラウリッター を通して戦場を走査し終えた少女は、ため息を吐いた。白いジェノザウラー・タイプの目的に気付いたのだ。

「『所持者』が来たようです。どうなさいますか、お嬢様？」

少女の問いかけ。それに応える声は聞こえない。

だが――

「判りました。彼女を招き入れます」

その声は事務的で淡々としている。

「アインヘリアル・システム、全機撤収。カルマートブラウリッター、
あなたも帰還しなさい」

そして――

「これでよろしいのですね、お嬢様？」

誰に言つともなく少女は口にした。やはりそれに応える声はない。

「彼女が……」

呟くと少女は来客を出迎える準備を始めた。

＋　　　＋　　　＋

三機目の　ロードゲイル　を撃墜した時、変化は起こった。

シラヒメ　に群がっていた全てのキメラブロックスの動きが一時停止すると、トローヤ神殿に道を開くように左右に散った。

「……なに？」

「『入れ』って言ってるんだよ」

訝しむカグヤにフィーアが応えた。
いぶか

フィーアの言葉を証明するようにキメラブロックスの群はじつとこちらを見つめるだけで敵意を見せない。

「……………」

読みかけの本を取り上げられた様な表情のカグヤだったが、考えるだけ無駄と判断し、シラヒメ　を神殿の手前に進ませた。入り口らしきものはない。すると——唐突に眼前の地面がスライドし、地下へと続く階段が現れた。

人間なら楽に通れるサイズだが、中型ゾイドでは無理そうだ。仕方なくカグヤとフィーアは愛機を残して階段を下りた。

階段を下りきった先にあつたのは薄暗い応接室だった。人間用のサイズのソファとテーブル。壁は本が納まった棚で埋められている。だがどれも長い間使われた形跡がない。それでいて放置されている訳でもない。

「誰か管理している人がいるみたいだね」

部屋を見回してフィーアが言った。

「……その誰かがあたしを呼んだ？」

手に持った『預言者の黙示録』と言うらしい本をカグヤは見た。やはりその装丁には何も書かれていない。

そこへ――

「お待ちしておりました」

声と共に現れたのは十代半ばを思わせる少女だった。澄んだ瞳は碧眼。^{へきがん}銀色の髪はショートカット。小柄で美しい少女だ。

だが――

「なんで、メイドさん？」

フィーアが疑問に思つのも当然で、少女は家事使用人の衣装に身

メイド・サバント

を包んでいた。黒いワンピースに、白いフリル付きのエプロン。袖そでとスカート丈は短く、フレンチ・タイプに分類されるメイド服だ。だが、頭部にはホワイトブリムと角のような金色の髪飾りをしている。

「この神殿の管理・維持をしています。イリアスと申します」

銀髪の少女——イリアスは優雅に一礼すると、カグヤの持つ本に視線を移した。

「貴女あなたが『所持者』ですね。お名前をお訊きかせ願えますか？」

「……カグヤ・イザヨイ。この子はフィーア。あたしを呼んだのはあなた？」

「私ではありません」

イリアスは首を横に振った。

「その質問にお応えするために、その本を見せていただけますか？」

言われるがまま、カグヤは本を渡した。

「……やはり、そうでしたか」

本を確認すると銀髪の少女は目を閉じ、語り始めた。

「かつて、一冊の本がありました。それにはこの世界の始まりから終わりまでが記述されていました。名を『預言者の回顧録』と言います」

「……それが、この本？」

カグヤの質問にイリアスはまた首を横に振った。

「これはオリジナルの劣化コピーです。貴女はこの本で何が見えましたが？」

「……二体のゾイドが戦ってた。片方はあたしのゾイドだったけど、見たことの無い装備をしていて……それだけ」

「そうですか。貴女が見たのは恐らく未来でしょうね。この本の力はそれだけです。そう遠くない未来を断片的に見せる黙示録^{オリジナル}回顧録の劣化コピーでしかありません」

「そのオリジナルは今は無いの？」

これまで黙って話を聞いていたフィーアが疑問を浮かべた。

「それは……」

淡々としていたイリアスの表情に初めて動揺の色が浮かんた。それきり彼女は口をつぐみ、場に沈黙が下りた。

「……その本が何だってあたしは興味ない。ただ呼ばれた気がしてここに来た。無駄足だった？」

カグヤが思っ たままを口にした。

「いいえ。きっと、貴女の望むものがここにあるのでしょうか。こ

れを持って、もう一度、貴女が見た映像を思い出してください」

そう言ってカグヤに本を渡すと、イリアスは虚空へ向けて言葉を発した。

「イリアスの権限において ユグドラシル に接続。コード六六六」
ロクロクロク

すると中空にいくつもの表示窓が同時に開いた。それらに映し出されたのは設計図らしき図面とデータ、それから――

「シラヒメ と ヤミヒメ だね。これがカグヤの見た未来？」

戦う二体のゾイド。その映像を見てカグヤが首肯する。
しゅけい

「これは『バスター・クロー』だね。こっちの図面とデータも」

「……バスター・クロー？」

「そう。マグネーザーの技術を利用した爆碎兵器。バーサークフ
ユラー 用に開発されて、ほとんどのデータが失われてるから開
発は今では不可能って言われてたんだけど……この図面とデータが
あれば造れるよ」

フィーアは興味津々といった様子でウインドウを見て言った。

「これが貴女に必要な力なのでしょうね。近い未来に貴女はこの映像を追体験するはずですよ」

「……………」

イリアスの言葉にもカグヤは無言で映像に見入っていた。その武器は三枚の刃が三角形に束ねられており、ドリルの様に回転している。それは時に基部を軸に展開し、三枚の刃を爪の様に振りかざす。見る者に恐怖を喚起させる凶悪なデザイン。

「……バスター・クロー。あたしに必要な力——」

呟くカグヤの表情に恍惚うつつとしたものをイリアスは見た。

＋　　　＋　　　＋

「そのデータは差し上げます。その代わりと言う訳ではありませんが、本はこちらでお預かりしますね。あまり人目に触れてよいものでもありませんから」

イリアスの言葉に異存は無いのだろう。フィーアが持参した端末を用いて、バスター・クローのデータを記録したのを確認して、カグヤは『預言者の黙示録』を惜しげもなく差し出した。

「あっさり手放されるんですね。ごく近いとはいえ未来が見えるのですよ？」

「……言ったでしょう。興味が無い」

「そうですか」

本を受け取りながら、イリアスが問う。

「——もし、自由に未来が見られるとしたら、貴女は見たいと思いますか？」

他意はない。単なる好奇心だ。

漆黒の衣装に身を包んだ娘がこちらに振り返った。その表情はやはり虚ろで何を考えているか判らない。

「……もしも選べる未来があつたとしても、多分、あたしは何も選べない。だから、未来に興味も無い」

「もし、過去すら変えられるとしても？」

「……変えてしまったら、それはもうあたしの過去じゃない。無かつた事になんて出来ない」

「では、貴女は何を望むのですか？」

「……………破壊——」

「——！」

あまりに無感情な声と瞳にイリアスの肌は粟^{あわた}立った。

「……この吐き気がするような世界が、あたしは嫌い」

「……………」

「けど、ゾイドに乗っている時だけはそれが消える。破壊衝動があたしを満たしてくれる。だから壊すの——気持ちいいから」

もう話す事はないとばかりにカグヤは背を向けて歩き出した。

「カグヤはああいう娘なの。気にしないで——ワイバーン（……・）」

カグヤには聞こえないであろう声で紅い髪と瞳の少女が意味深に言った。

「……貴女も、リントヴルムの力を過信されないように——EOS」

意趣返しとばかりに銀髪の少女も言った。

「え？ なんのこと？」

「いえ、独り言です。何でもありませんよ？」

「そ？ ならいいけど」

剣呑な空気が二人の少女の間に生まれたのも一瞬、すぐにそれは氷解した。

どちらからともなく笑みがこぼれる。

「また会えるかな、イリアス」

「はい。縁があればきっと、フィーア」

＋
＋
＋

「――で、これが今回のお土産か？」

帰還したカグヤとフィーアに渡された情報端末を手に取り、
教授と呼ばれている四十絡みの中年男性は言った。 教

「バスター・クロウか。また物騒な代物だな」

「……そう。空いてる左腕にフリー・ラウンド・シールドの代わり
に付けて」

「教授 なら楽勝でしょ？ 次の出撃までお願いね」

カグヤに続いてフィーアが気楽に言った。

「簡単に言うがな、左右でバランスが違々と色々と面倒だぞ？」

「そこは 教授 の技術を当てにしてるよ」

「パイロットの技量もか？」

「そこはカグヤを信頼してる。ね、カグヤ？」

「……問題無い」

「判ったよ。こんだけデータがあれば三日で出来る。シラヒメの装備は本当に ジエノブレイカー にしなくていいんだな？」

「……ええ。このままで」

カグヤの返事に 教授 が難しい顔をする。

「なにか問題なの？」

と、フィーアが訊ねる。

「いやな。この装備とスペックだと、もはや ジエノザウラー でも ジエノブレイカー でもなくなる。そうなると便宜的にでも別の機体名を付ける必要がある」

「シラヒメ じゃダメなの？」

「そりゃあ愛称だ。この装備形態の名前が要る」

教授 がひとり難しい顔を続ける。

「…… ジエノフューネラル」

ぽつりと呟いたのは意外にもカグヤだった。

「『フューネラル葬儀』——か。いいんじゃない？ カグヤっぽくて」

「ふむ。了解だ。それで登録しよう」

「じゃあ、作業よろしく」

「ああ。期待しておけ」

そう言つと 教授 はさつさとその場を後にした。恐らく徹夜が続くだろう。

「楽しみだね、カグヤ。新しい シラヒメ」

「……ええ、本当に」

過去など変えられない。

選べる未来など無い。

だから現在を壊す。

それが 魔女 の唯一の——願い。

つづく

第十二話『アウェイクニング』（前書き）

間に第11・5話があります。

よろしければ、そちらもご覧ください。

<http://www.geocities.jp/assaultwave2006/NOVEL/top.html>

第十二話『アウェイクニング』

生きる事に理由は要らないという。

ただ生きたいと願えば、それだけで理由になるから。

ならば生きたいと思わなければ、死ぬのにも理由は必要無いのではないだろうか？

何もかもがどうでもよかったのだと思う。

死への恐怖がないから生の喜びもない。

生への執着がないから死を恐れる事もない。

生きたい？

それとも死にたい？

最近、よく判らなくなった。

ただ現状への不満だけが変わらずある。

だが、世界などそうそう変わらない。

あるべくして世界はこのように形作られている。

それは否定のしょうがない現実。

ならば壊すしかない。

それが一番簡単で判りやすい。

誰もが夢物語だと笑うだろう。

しかし、あたしはそう思わない。

それを為^なすだけの力を得たのだから。

×

×

×

第十二話『アウェイクニング』

眠りに就く度に、このまま目が覚めなければいいと思う。明日な
ど来なければいい。

そして目が覚める度に絶望する。また今日を生きねばならない。

えも言われぬ倦怠（けんたい）感が身体を侵す。

——憂鬱だ。

だから今日も不毛な遊戯に耽^{ふけ}る。

枕元に置かれた、にぶく黒光りする鉄の塊を手取る——銃だ。

手馴れた動作で安全装置^{セーフティ}を外し、激鉄^{ハンマー}を起こす。拳銃ならではの

短い砲身^{バレル}、その銃口を自分のこめかみに当て、静かに目を閉じ——
引き金を引く。^{トリガー}

——カチン。

しかし、弾丸が発射される炸裂音はない。激鉄が降りた渴いた金属音だけがむなく響く。

当然だ。弾倉^{マガジン}が入っていても、遊底^{スライド}を操作して初弾を薬室^{チャンバー}に送り込まねば弾は発射されない。

薬室に弾が込められていないのは判っていた。

だが、どれだけの人間が彼女と同じ行為ができるだろうか。

もし弾が込められていたら（・・・・・・・・・・・・・・・・）？

次の瞬間には頭蓋骨を貫通し、脳漿を撒き散らして死ぬかもしれない。それが想像出来ないほど彼女は愚かではない。

いや、むしろ彼女はそれを望んでいる。

ひよっとしたら死ぬかもしれない——そんな淡い期待を抱いている。

「・・・・・・・・」

愛用の銃 ベレッタ を無造作に床に落とす。

自身のくだらない行為に苛立つ。

「……どうして生きてるの？」

こんなことに意味は無い。

こんな安易な死に意味は無い。

彼女が望んでいるのはこんな死ではない。

「……どうして死ねないの？」

——判らない

何故^{なぜ}生きているのか判らない。

曖昧な存在感。

空虚な現実感。

無力な虚脱感。

こんな思いをしてまで生きなければならぬのであれば、この世界は地獄だ。

「……………」

再び身を横たえる。このまま眠ってしまおうかと彼女が思った時

「——カグヤ！ おはよー」

場の空気を根こそぎ崩すような澆刺^{はつざつ}とした少女の音がスピーカー越しに響いた。部屋の入り口に設置してある来客用のインターホンからだ。

「……………」

カグヤと呼ばれた娘が時計に目をやる——もう正午をいくらか過ぎている。

仕方なくといった表情で、カグヤがインターホンの相手に応えた。

「……ファイア、何？」

『何、じゃないよ。今日の昼過ぎには シラヒメ の再テストをするからって言うておいたでしょ？』

「……………うん、そうだったね。これから整備場へ行く」

『早くね。教授 が徹夜明けでハイになってるから』

言う事だけ言うと少女は通話を切った。

「……………」

薄暗い部屋に、しんとした静寂が戻る。

もしかしたら、この部屋の外の世界はすでに滅んでしまっているのではないか——そんな事を考える。そうであれば、どれだけいいかと。

「……あ、起きないと——」

呟き、カグヤはベッドから立ち上がった。

● ● ●

身支度みじたくを終えたカグヤ・イザヨイは、姿見すがたみに自分の姿を映し、その容姿を確認した。

そこにいるのは二十代前半くらいの若い娘だ。適当に切った様な不揃いな髪はあちこちで長さが違っており、艶つややかな漆黒。瞳の色も同じく黒いが、右目は眼帯に覆われていて見る事は出来ない。肌は白く、身体は病的なまでに痩やせている。

美人だろう。

だがその虚ろな表情と暗い雰囲気、周囲に彼女の美貌を気付かせ難にくいものになっている。

特に感慨もなくカグヤは鏡に映った自分を見つめ続ける。

「……おはよう、あたし」

にこりと微笑む。

だが、鏡に映る自分は笑っていない。

「……………バカみたい」

呟き、部屋を出る。

「おはよう、カグヤ！」

廊下でカグヤを迎えたのは年の頃なら十二、三才。鮮血を思わせる紅い髪と瞳の少女だった。

「……………待ってたの？ フィーア」

フィーア——それが少女の名前だ。

可愛らしい表情と不自然なまでに整った容姿。天真爛漫な笑みには、どこか蟲惑的こわくなものを思わせる。

ちぐはぐな、何かが間違っているのにそれが何か判らない。そんな印象を抱かせる少女だ。

「待ってちゃダメだった？」

少しふて腐れた様にフィーアはカグヤを見上げた。カグヤはそれほど長身と言う訳ではないが、フィーアの小柄な背丈だと、やはり見上げないと視線が合わない。

「……そうは言っていないけど」

何故この少女が自分を事あるごとに構おうとするのか、カグヤには判らない。だが、一方的とも言える好意を自分に寄せてくるフィアうとの存在を疎ましいとは思わなかった。

「ならいいでしょ？ 私とカグヤはパートナーなんだから」
パートナー。

この言葉をフィアは多用する。それが自分達を繋げる絆（きずな）であるかの様に。

「……そうだね。そうかもしれない」

「そうそう」

同意が得られた事が嬉しいのか、満足げに紅い髪と瞳の少女は頷うなずいた。母親に褒められた子供の様に満面の笑みを浮かべた姿は、歳相応の少女に見える。

「あれ？ その服、新しいやつ？」

カグヤの身を包む衣装に気付き、フィアは訊ねた。

「……うん。気分を変えようかと思って」

「でも相変わらずゴスロリなんだ」

フィーアが言うように、カグヤの服装は所謂^{いわゆる}ゴシックロリータを思わせる。黒と白のコントラスト。過剰なまでのフリルとレース。機能性よりビジュアルを優先したデザインはまさにゴスロリだ。少女趣味と呼ばれるファッションの極致。

だが、不思議なまでにそれはカグヤという娘に似合っていた。彼女の一種異様な雰囲気からは、黒い色に喪服を連想する者も居るかもしれない。

「こないだの ジェノブレイカー に乗ってた女の子が言ってた事が気になるの？」

先日の シラヒメ の稼動テストにおいて、テスト・エリアに侵入した真紅の 魔装竜 とそのパイロット——アルフィと名乗った少女との出会いは、カグヤにとって衝撃だった。カグヤを『普通だ』と評価し、忽然と姿を消した少女の意図は判らないが、彼女の言葉には不思議な説得力があった。少なくとも見た目通りの少女ではないのだろう。

（あるいは、彼女もフィーアと同じ……）

ひとつの可能性がカグヤの脳裏に浮かんた時、

「——カグヤ？」

カグヤの思考はフィーアの呼びかけで中断された。

「……ううん。なんでもない」

考えた処^{ところ}で答えは出ない。

ただ、アルフィと名乗った少女の言葉が気になっているのは確かだ。

——壊れているのは世界か、自分か。

それはずっとカグヤが考えていた事だった。もしアルフィの言葉が正しいのなら——自分が普通なのなら、壊れているのはこの世界の方になる。

ならば徹底的に壊す必要がある。壊れかけのこの世界を——

服を変えたのはカグヤなりのスイッチの切り替えだ。

「……ねえ、フィーア。手伝ってくれる？」

「うん？ なにを？」

焦点の定まっていない視線を虚空に向け、無表情に呟く漆黒の娘に、紅い少女は訊き返した。

「……………世界の終わりを——」

ぼつりと、カグヤの口から紡がれた言葉は、フィーアの予想通りのものだった。

だから――

「いいよ。カグヤがそう望むなら」

カグヤの視線がフィアに向いた。やはりその表情には感情というものが感じられない。

だが、それでも――

「だって私は――そういうカグヤが大好きだから」

紅い少女は屈託なく言った。邪気の無い笑みで。

「……そう」

だからカグヤも笑顔を返した。上手く出来ていたかは自信が無かったが。

● ● ●

純白に彩られたティラノサウルス型ゾイド――通称 シラヒメ。

正式名称は ジェノフューネラル という。

ジェノザウラー 虐殺竜 ジェノブレイカー とも 魔装竜 とも違う名前を与えられた理由はその武装にある。 ジェノザウラー の機体に、右腕には ジェノブレイ

カーのフリー・ラウンド・シールド。左腕にはバーサークフューラーのバスター・クロウを装備している。

左右非対称のシルエットは歪^{いびつ}かつ攻撃的な印象を見る者に喚起させる。

シラヒメの白い機体が駆ける。ティラノサウルス型特有のホバ―走行で、地上数十センチ上空を滑る様に突き進む。

「目標はアイアンコング・タイプが五機。制限時間は無し。勝利条件は隊長機の撃破だけ――どうする？」

シラヒメのコクピット、そのサブ・シートに座るフィーアが訊ねた。

「……全機撃破。せつかくの実戦テストだもの」

当然という様にメイン・シートに座るカグヤは応えた。普段どおりの無表情だが、戦闘を前に、やや高揚している様にも感じられる。

「だよね。せつかくリミッターの限定解除許可ももらったし、LDS の能力開放もしてみる？」

「……待機動作状態アイドリングで充分だよ。まだ必要無い」

「りょーかい。もうすぐ敵の射程圏内に入るよ。地対地戦術ミサイルにご用心」

歌う様に楽しげにフィーアが口ずさむ。

やがてその少女の身体から、ぼんやりとした紅い光があふれ出す。

「……………はあ」

カグヤはこの感覚が好きだ。背中に暖かいものを感じると共に、シラヒメにも力が漲^{みなぎ}って来るのが判る。

「……………いくよ——シラヒメ」

——グウオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

シラヒメが吠えた。

カグヤの声に応える様に。その内に秘めた破壊衝動を露^{あらわ}にする様に。

やがてレーダーが、こちらを補足した大型ミサイルを感知した。数は十二基。

「……………荷電粒子砲で撃ち落す」

「了解。迎撃モード、いけるよ」

カグヤの指示にフィアが応える。接近戦での感覚的な操作にはずば抜けたセンスを発揮するカグヤだが、火器管制装置（FCS）や各種レーダーやセンサー、機体状況のチェック等は全てフィア

が担当している。カグヤはただ引き金を引くだけだ。

シラヒメ が両脚のアンカーを下ろし機体を地に固定する。各部の冷却システムが連動し、大きく開かれた口内から荷電粒子砲の砲身が現れる。

まだミサイルは肉眼では点としか認識出来ない距離だが、既にシラヒメ は標的を捉えている。カグヤが荷電粒子砲の引き金を引いた。

青白い光の奔流が虚空へ走る。更に シラヒメ が首を右に振り、扇状に荷電粒子を照射していく。本来、ジェノザウラー・タイプは荷電粒子砲の照射中に向きを変える事は出来ない。荷電粒子砲の反動に機体が耐えられないからだ。

しかし、 シラヒメ は荷電粒子砲の威力の調節と、固体特有の高出力によって、それを可能としていた。

荷電粒子砲の軌跡をなぞる様に、空に爆光が咲いていく。ミサイルが上空で撃破された証拠だ。

「全ミサイル撃破。そろそろ本体も見えてくるよ」

「……もう見えてる。アイアンコング・タイプが五機」

シラヒメ の望遠カメラが捉えた映像には、五つの巨体が映し出されていた。全高十七メートルのゴリラ型ゾイド アイアンコング。

かつてヘリック共和国の象徴ゾイドであった ゴジュラス の無

敵時代を終わらせた、ゼネバス帝国の大型ゾイドである。全天候・地形での活動を可能とし、高い格闘戦能力と砲撃戦能力を持ち、なによりその扱いやすさから、アイアンコングこそ最高傑作ゾイドであるという呼び声も高い。

そんな機体が五機というのは、大戦後である現在では破格の戦力と言える。

五機のアイアンコング・タイプは シラヒメ の荷電粒子砲を警戒してか、広く展開している。二本の足と長い腕を使い、四足獣の様に駆けて来る。こちらを包囲するつもりだろう。

「……赤いのがいる。『PK型』？」

ひととき目立つ赤色に染められた アイアンコング を見つけ、カグヤが シラヒメ のデータバンクを参照した。照合結果は アイアンコングPK とある。

「プロイツェン・ナイツ（PK）の略だよ。昔の戦争で、プロイツェンって人の親衛隊に配備されたエリート専用のスペシャル機。あれが隊長機だね」

フィーアが付け加える。

確かに赤いアイアンコング・タイプ—— アイアンコングPK はカラーリングだけでなく、装備も他の機体と違っている。通常型が右肩に六連装ミサイル・ランチャー、左肩に十連装ロケット弾ランチャーを装備しているのに対し、『PK型』は右肩のビーム・ランチャー、背部のバーニア・スタビライザーを始め、過剰なまでの武装が施されている。

フィーアの言うとおり指揮官機だろう。徐々に距離を縮めてくる
包囲網には加わらず、後方に待機している。

「どっちみち、取り巻きから墜とさないとダメだね」

「……バスター・クロー、使っよ」

「いいよ。トリガー・ヴォイス 激発音声は憶えてる？」

「……もしくは世界の終わり——」

ぼつりとカグヤが呟いた。

激発音声と呼ばれるそれは、強力な武装の暴発を防ぐための安全セーフティ
装置を解除する手段である。

「…… ワールド・エンド——デストラクション」

ガキーン——という金属音と共に、バスター・クローを構成する
三枚の刃が展開し、巨大な三角形を形成する。それらが基部を軸に
回転し、再びドリル状に収束される。

ワールド・エンド——それがバスター・クローに与えられた名
前だ。世界を壊すために与えられた新たな力。破壊の爪。

「全武装オールオッケー。いけるよ、カグヤ」

最終確認を行ったフィーアが言った。

「……了解。 シラヒメ ——」

愛機の名を呼ぶ。

白い 竜葬姫 ジェノフューネラル が吠える。

右腕にはエクス・ブレイカー。

左腕にはバスター・クロー。

頭部にはチャージング・ブレード。

全ての武装を展開して、 シラヒメ が駆けた。

● ● ●

『コング2よりコング1へ、全ミサイル撃破されました。 荷電粒子砲です』

アイアンコングPK のコクピットで、男は静かに部下からの通信を聞いていた。彼がこのアイアンコング・タイプで編成されたチームで、コング1のコール・サインを持つ指揮官だ。

「コング1より全機へ。 荷電粒子砲の連射は無いと思われるが、警戒はしておけ。 予定通り包囲殲滅でしとめる」

『コング2、了解しました』

『コング3、了解』

『コング4、了解』

『コ、コング5……りよ、了解です』

それぞれに返答を返す部下からの応答を聞く。通信機越しでも、彼らがどんな表情をしているかは判る。

「コング1よりコング5へ。焦るな。訓練通りにやればいい」

『——は、はいッ!』

コング5と呼ばれた者が慌てて応えた。彼はこれが初の実戦となる。緊張するなという方が無理だろう。

『フォローはしてやるから、気楽にやろうぜ』

『コング4、お前は少しくらい緊張しろ』

通信に割って入ったコング4を、コング3がたしなめた。

『へいへい。コング4、自重します』

『コング2よりコング5へ。フォーメーションの変更は可能だ。援護に下がってもいいんだぞ』

『だ、大丈夫です。コング5、やれます』

『ならいい。——コング2から3、4、5へ。目標を包囲次第、全弾発射。相手はジェノブレイカー・クラスだ。出し惜しみは無しくていく』

部下達のやり取りを頼もしく思いながら、コング1が最後の指示を出す。

「目標が見えた。全機、戦闘開始だ！」

コング1の号令のもと、4つの『了解』が続く。

彼等の目標はZOEITEC社の新型ゾイド ゾイテック ジェノフューネラルだ。白いジェノザウラー・タイプの機体に、フリー・ラウンド・シールド。そして失われた技術であるバスター・クロウを装備している。頭部にはチャージング・ブレードも確認出来る

「『フューネラル
葬儀』か……縁起の悪い名前だ」

コング1は独りごちた。

勝算はあった。

いかに強力なゾイドとて、相手は一機。しかもこちらの編成はアイアンコング・タイプが五機だ。少なくとも互角には戦えるだろう——と。

しかし、コング1の希望はあっけなく碎かれた。

まず飛び道具が通用しない。

六十発を越えるロケット弾とミサイルによる十字砲火をたやすく回避し、避け切れなかったものもバスター・クローから展開されるEシールドに防がれた。

だがそれでも、コング1のビーム・ランチャーの援護を受けつつ、コング2から5は撃ち尽くした武装を強制排除^{バージ}し、格闘戦を挑んだ。

しかし――

『うわあああああああああああああ――ッ！』

まず最初に響いたのは、コング3の悲鳴だった。

ジェノフューネラルの右側面に飛び込んだコング3のアイアンコングが、一瞬でその両腕を切断され、エクス・ブレイカーで首を挟まれ宙吊りにされた。更にジェノフューネラルは、コング3の機体を背後から迫っていたコング2に投げつけ、動きを封じたその背後に回りこみ、背部からコンバット・システムを撃ちぬいた。

瞬く間に二機が撃破された。

『――ちッ。コング5、同時に仕掛けるぞ。そのまま挟み込め！』

『りよ、了解！』

ジェノフューネラルの左右から、二機のアイアンコングが迫る。格闘兵装でもある太い腕――ハンマー・ナックルを振り下ろす。

だが、アイアンコングのパンチが届くより速く、ジェノフ
ユーネラルが両腕を交差し、身を低く下げた。左右の武装を繋ぐ
支持腕^{アーム}が限界まで伸び、右のエクス・ブレイカーがコング4の機体
の首を切断し、左のバスター・クローがコング2の機体の胸部に突
き刺さった。

一瞬の間を置いて、ほぼ同時に二機のアイアンコングがその
場にくずおれた。

「……まさか、四機のアイアンコングが数秒で——」

愕然とするコング1。

だが、現実逃避する暇すら彼には与えられなかった。ジェノフ
ユーネラルがこちらに向かっている。

「——くッ」

追加された左腕のグレネード・ランチャーとパルス・レーザー・
ガンを撃ち放つ——当たらない。

更にロケット弾とビーム・ランチャーも斉射して弾幕を張るが、
爆煙を突破したジェノフユーネラルには傷ひとつ付いていない。

「バケモノめ……」

コング1は戦慄^{せんりつ}した。

勝てない。本能が告げている——逃げろ、と。

それでも。

「せめて一撃だけでも——！」

外付けの武装をパージし、追加されたバーニアを全力で噴かす。
軽くなった アイアンコングPK の赤い機体が加速する。

その剛腕が ジェノフューネラル の頭部を捉えたかと思った瞬間——

「——！」

ジェノフューネラル の機体が紅く染まった。

●
●
●

「カグヤ、せつかくだから LDS の解放テストもしておこう？」

残る敵機はPK型一機だ。たいした脅威には感じられないが、テスト相手にはちょうどいいかもしれない。フィーアの提案にカグヤはそう考え、

「……了解。 LDS 能力限定開放——アウェイクニング」

ぽつりと呟いた。

次の瞬間、 シラヒメ の機体が紅く輝いた。ファイアの身体から出ている紅い光と同じ粒子を撒き散らしながら、その機体が加速した。

ドクン——と、鼓動が高鳴る音を聴いた気がした。 シラヒメ の破壊衝動が高まり、その感情がカグヤに流れ込む。異物が身体に入り込む不快感と快感が同時に来る。

「……………くう——」

思わず声が漏れる。

「……………いくよ—— シラヒメ」

残像すら残すスピードで、こちらに疾駆する アイアンコング P K のハンマー・ナックルを軽々とかわし、相手の懐に潜り込む。

ワールド・エンド を展開し、 アイアンコング P K の頭部をワシ掴みにし、首吊りの様にその巨体を持ち上げた。

そして シラヒメ の頭部のチャージング・ブレードが青白い^{りん}光をきらめかせる。

「…………… ヴァリアブル・スライサー——」

カグヤの炫く様な^{トリガー・ヴォイス}激発音声と共に シラヒメ が頭を振り下ろすと、眼前の アイアンコング P K の胸部に袈裟^{けさ}斬りの一閃が刻まれた。一瞬遅れて、その下半分が地面に落下する。

ワールド・エンド に掴まれた アイアンコングPK の残った
上半身がだらりとぶら下がり、切断面からは活動を停止したゾイド
コアが覗^{のぞ}いていた。

「……………」

その様を、カグヤは無感情な隻眼^{せきがん}で見つめた。

思う——こんな風に世界も壊せばいいのに。

『——その願い、叶^{かな}えてあげようか?』

突然——『声』が聴こえた。

「……………だれ?」

しかし、カグヤの問いに返事は無い。

幻聴かとも思ったが、その声ははつきりとカグヤの耳に残っていた。

「……………」

もう一度、心の中で問いかける。だがやはり返事は無い。

「どうしたの、カグヤ?」

フィーアには聴こえなかったのだろうか。何事も無かったように小首を傾^{かし}げている。

「……何でもない。機体に異常は？」

「無いよ。LDS の能力解放も問題無し」

「……そう。ならいい」

『声』の事を話そうかとも思ったが、なんとなく躊躇^{ちゅうちゆ}した。

『——おつかれさん。テストの結果は良好だ』

シラヒメ のコクピットに通信が入った。通信映像に映っているのは四十絡みの中年だ。白髪混じりのぼさば頭に、くたびれた白衣。『技術者』という言葉が全てを物語っている。そんな男だ。

教授。

それが、カグヤ達の所属するZOITEC不正規技術開発部門——通称 ミラージュ の最高責任者の呼称だ。本名・出身・経歴は全て不詳。ただ 教授 とだけ呼ばれている。

「教授、良いデータが取れた？」

『ああ。ただ、ちょっと気になる点もある』

フィーアの問いに、教授 は答えを濁らせた。

『バスター・クロー——いや、ワールド・エンドか。なんとい
うか……まだ威力が出るはずなんだよな』

「……どういうこと？」

教授の言葉にカグヤが反応した。

『LDSの能力^{アウェイキング}限定解放時の出力にまだ余裕があるんだよ。そ
れを目一杯ワールド・エンドに回せば、理論上はこれに突破出
来ない防御手段は存在しないだろうな』

ただし、と教授は念を押し、

「ワールド・エンドの材質交換が必要だがな。それこそディオ
ハリコン並みの強度が必要だ」

と、付け加えた。

「今の状態で全力でやったら、ワールド・エンドの方がもたな
いってこと？」

フィーアが要点をまとめる様に言った。

『まあ一回の全力稼動でおしゃかだな』

「……一回なら使えるのね」

カグヤの口調が微妙に変わった。

『逆説的にはそうなるな。それこそ、地殻に影響を与えて惑星破壊

すら可能かもしれん』

教授 の口元が不敵に笑う。

暗に何かを示唆するように。

「……そう」

カグヤは、やはりぽつりと、それだけ呟いた。

つづく

第十三話『魔女の所以』

『何故、生きる』？

『何故、戦う』？

ヒトは不思議だね。

そんな当たり前の事を考え、悩み、苦しむ。

僕には判らないよ。

僕達はそんな事に悩んだりしない。

ただ本能のおもむくままに戦い、そして生きる。

これが『知恵』を持ってしまったヒトと、『鋼の身体』を持った僕達の決定的な差なのかもしれないね。

違うモノ同士は判りあえない。

違っていても故に判りあえず。判りあえないが故に違っているのだから。

けど僕は君と出会った。

君を理解したいと思った。

君の願いを叶えたいと願った。

——君に知って欲しい事があるんだ。

×

×

×

第十三話 『魔女の所以^{ゆえん}』

惑星ZⅡにおけるゾイド関連企業のトップである ZOITEC 社。そこに、表向きには存在しない部隊であるZOITEC不正 規技術開発部門——通称 ミラージュ がある。

責任者である 教授 と数名のスタッフで構成されるそれは、文字通り公には出来ない・存在しない技術の研究・開発を行っている。

いつの世もヒトは高みを目指す。

より高く。より多く。より強く。

『やるべきかどうか』は二の次で、『出来るかどうか』だけが問題視される。

ヒトはそれを重ねることで文明を発達させ、代償に罪を背負ってきた。その最たるものが兵器だ。

いかに効率良くヒトを殺せるか——究極的にはそこに行き着く。

そんな研究を行う者達にまともな道德観念や倫理観など期待出来るようはずもない。判っていても止められない。好奇心という名の知性が理性を殺す。

所詮はヒトも動物でしかない。『進化したサル』——まさにその通りだ。

故に彼等は様々な蔑称で呼ばれる。

『死の探究者』。

『知性あるヒト殺し』。

『マッドサイエンティスト』。

以下、諸々。

そんな不名誉な称号を与えられた彼等の中にあつて、一際異彩を放つ呼び名を持つ娘が居た。

カグヤ・イザヨイ——通称 魔女。

ミラージュ における唯一のゾイド乗りである。

通常、ゾイドと乗り手には相性がある。相性が良ければゾイドはカタログ・スペック以上の能力を叩き出す。逆に言えば、相性の悪い組み合わせだと、基本性能以下の実力しか発揮出来ない。

だが、カグヤにはこの常識が適用されない。彼女はどんなゾイドであろうとその機体を完全に——いや、それ以上に乗りこなす事が出来た。

カグヤが搭乗したゾイドは例外なく凶暴化し、しかし彼女の存在を受け入れる。破壊衝動を露にしながらも、理性を失わないのだ。

故にカグヤはこう呼ばれた。

『ゾイドを惑わす魔性の女』—— 魔女 と。

十 十 十

正式名称 ジェノフューネラル 。

愛称は シラヒメ 。

ジェノザウラー・タイプに分類されるそのゾイドが、あらゆる装甲と武装を外され、野生体に限りなく近い状態で整備場に居た。

周囲にヒトの気配は無く、 ミラージュ のスタッフは全員、別室で状況をモニターしている。

シラヒメ のコクピットに居るのは、ゴシックロータの衣装に身を包んだ娘だ。

年齢は二十代前半。色白の肌に、華奢な肢体。適当に切った様な不揃いな長さの髪は漆黒。左の瞳は黒く、右目を隠す眼帯も黒い。

娘——カグヤ・イザヨイの外見的特徴を表すならこんな処だろう。

美しい娘だ。

だが、その表情は虚ろで、雰囲気も暗い。好き^{この}好んで彼女に声をかける男は、そう居まい。

ぼんやりとした表情のまま、黒い瞳を虚空に向けている。

「……………」

こうしてコクピットに居ると落ち着く。絶対的な力が自分を護つてくれている様な気持ちになる。出来るなら操縦桿^{そうじゅうかん}を握って、機体を暴れさせたいくなる。

だが、それが今は叶わない。

本来ならばカグヤの後ろに居るはずの紅い髪と瞳の少女が、今は居ない。

シラヒメはLDSと呼ばれるシステムに、その存在を依存している。それを制御する少女の存在無くして、シラヒメは本来の力を発揮する事が出来ないのだ。

『——どうだ、カグヤ？ 気分は？』

通信機を介して、男の声と映像がシラヒメのコクピットに伝わる。

年の頃なら四十前後の中年だ。白髪混じりのぼさぼさ頭。よれよれの白衣を身に纏^{まと}っている。

教授。

ミラージュ の最高責任者である彼は、ただそう呼ばれている。

「……特に変わらない。けど、少し背中がさびしい」

教授 の問いかけに対し、無表情にカグヤは応えた。

『そいつはフィア本人に言っ^てやるんだな。喜ぶぞ』

フィア——本来はカグヤの後ろの席に居るはずの少女の名前だ。

四六時中カグヤの側に居る印象が強いため、居ないと、それはそれで物足りないものを感じる。

「……………」

そんな感情を持つ様になったのは何時^{いつ}からだろうか。フィアと初めて出会ってから、まだ半年と経っていない。それが何時の間にか、一緒に居るのが当たり前になっていた。

「……フィアは、どうしてる？」

『眠ってるよ。検査の結果は異常無しだ。お前さんの適合テストが終わる頃には目覚めてるだろうさ』

「……そう」

何故そんな事を訊^きいたのだろう？ 話の流れか。本心からフィー

アを気にかけたのか。自分でもよく判らない。

『さあ、テストを始めよう。まずは通常起動からだ』

「……了解。 シラヒメ 起動開始」

これから行われようとしているのは、なんという事の無い起動実験だ。前述の通り、 シラヒメ はフィーアの存在を前提に調整されている。しかし、先日の ジェノブレイカー の乱入事件や、今回の様にフィーアがコクピットに居られない状況は今後もあり得る。だから、フィーアの存在無しで、カグヤがどこまで シラヒメ を扱えるのか調べておく必要がある。

それが、これから行う適合テストだ。

『 シラヒメ の起動を確認』

『機体・システム共に問題は認められず』

『プログラムB29からD51までクリア』

『パイロットのバイタル確認。こちらも異常無し』

矢継ぎ早に、別室に居るスタッフの状況報告が入るのをカグヤはぼんやりと聞いていた。

『問題は無いようだな。続いて LDS を最低レベルで解放する』

責任者である 教授 が指揮をとる。

「……了解。LDS 能力限定開放——アウェイクニング」

カグヤの抑揚の無い言葉がコクピットに響く。設置された音声入力装置が働き、LDS が開放された——その時。

——ドクン。

鼓動の様な音が聴こえた。

そしてコクピットが真っ赤に染まり、アラート警告音が鳴り響いた。

†
†
†

——グウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

けたたましく鳴る警告音と共に、猛々しいケモノの咆哮が轟いた。

LDSの開放と同時に、シリヒメがすさまじい叫び声を上げたのだ。

「どうなってる！？ 状況を報告しろ！」

別室で状況をモニターしていた 教授 が言った。彼にしては珍しく事態に困惑している。

「判りません！ 完全に状況不明！」

「コクピット内もモニター出来ません！」

「ジェノフューネラル のゾイドコアの異常活性化を確認！」

オペレーター達によって、次々に報告が届くが、状況を判断出来る要素は少ない。

「カグヤのバイタルは！？」

「バイタル確認！ 生きています……しかし——」

報告が不明瞭に途切れる。

「しかし何だ！？」

「カグヤの自我境界面が融解しています。このままでは、彼女の個体生命が維持出来ません！」

「…… シラヒメ がカグヤを取り込もうとしているのか？」

最悪の可能性を口にし、 教授 は息を飲んだ。

＋
＋
＋

どこまでも自分が広がっていく感覚。

自分という存在が拡散し、周囲とひとつになっていく。

——気持ちいい。

なにもかもが満たされていく。

苦痛も不安も憂鬱も——あらゆる事がどうでもよくなってくる。

この上ない全能感が心を支配する。

もう戻りたくない。

「——カグヤ」

ふと自分を呼ぶ声に気付く。

「カグヤ」

不思議な声だ。母性を感じさせる甘い響きと、父性を感じさせる優しさがある。

目を開く。もう戻りたくない。何も見たくなかったはずなのに。

「おはよう、カグヤ」

目を開いたカグヤの前に居たのはヒトだった——いや、正確にはヒトの姿をした何かだ。

「……あなた、だれ？」

カグヤの問いに、目の前の人物が苦笑するように薄く笑った。

その容姿は中性的で、男女の区別がつかない。ただ、どちらであれ美しい事に変わりはない。艶つやのある白い髪は肩にかかる程度の長さ。オレンジ色の瞳は穏やかな色たを湛たえている。

服装はカグヤのものに近いゴシックパンク系で、体格から性別が判断出来ない。

「判らないかな？ 君とは何度も逢っているよ」

声の主が優しく微笑む。その声も男声にしては高く、女声にしては低い。やはり中性的で男女の区別が難しい。

「……あなた、だれ？」

もう一度訊ねる。
たず

カグヤの問いに、目の前の人物は芝居がかった仕草で肩をすくめた。

「こうして逢うのは初めてだからね、無理もない」

そうしてカグヤに恭しく一礼し、言った。

「——僕はシラヒメ。初めまして、愛しの我が主よ（マイ・ロード）」

わずかな沈黙が場を支配した。

「……シラヒメ？ あなた、男だったの？」

やや困惑気味にカグヤは訊ねた。

本能的に判る。『彼』は本当の事を言っている。

「ゾイドに性別は無いよ。だから正確には『男性格』というべきかな」

彼——シラヒメと名乗った青年は、やはり中性的な穏やかな笑みを浮かべたまま言った。

「……ここはあなたの中なの？」

「そう、理解が早いね。僕達ゾイドの記憶装置メモリには、空き領域というデータの余剰空間があるんだ。ここは仮想空間。僕達はそう呼んでいる」

「……………」

「今、こうしている僕は、君と話をするための対人インターフェイス。仮想人格とでも言うのかな。この空間もそうだ。君のために用意したんだよ」

そう言ってシラヒメは両手を広げた。芝居がかった仕草や言い回しは基本仕様らしい。
デフォルテ

周囲を見回すと壁紙から照明、テーブルセットまで、カグヤの好みを知り尽くした様なゴシック調に統一されている。

「気に入ってもらえたかな？」

「……あなたの容姿も、あたしが望んだ結果なの？」

「そうだよ。君が望んだから僕はこうして存在している。君が願う事。君が欲しい物。ここでなら全てが思いのままだ」

慈しむ様な優しい声がカグヤの耳朵じだをくすぐる。官能的なささやきだ。

このまま全てを委ねてしまいたくなる。

しかし――

「……違う」

「ん？」

カグヤの中で何かが叫ぶ。

自分が望んだのは、こんな世界ではない。

「……いつか言ったわね。あたしの願いを叶えてくれるって」

「言ったね。世界を壊してしまいたい――君のその願いを叶えと」

「……あたしは、こんな都合のいい世界が欲しかった訳じゃない。本当の世界を壊したいの。あたしが願うのは、それだけ」

困った子供を見る母親の様な表情をして、シラヒメは何度目かの苦笑を浮かべた。

「ここでならどんな願いも叶う。もう悩む事も、苦しむ事も無い。なのに何故、本当の世界に固執するんだい？」

「……………」

「それは君がまだ、世界に絶望しきっていないからだ。無意識のうちに希望を抱いている。壊してでも何かが変わる事を願っている――違うかい？」

「……だとしたら？」

「君は正しい」

オレンジ色の瞳がカグヤを見つめる

「求め、抗^{あらが}う事こそ、生命の本質だ。君は間違っていない」

「……それが世界の終わりでも？」

「この世界はたくさんの願いや祈りで出来ている。君の思いが強ければ、世界はそれを受け入れる」

「……あたしの、想い」

ぼつりと呟くカグヤに眼差しを向けたまま、シラヒメが続ける。

「君の願いを叶えると言ったのは本当だよ。ほとんどのヒトはまだ気付いていない様だけど、この世界にはとくに限界を迎えているんだ。僕達が バースト・ポイント と呼んでいる場所がある」

「…… バースト・ポイント ？」

「そう。かつて起こった グランド・カタストロフ 大異変 と、半世紀前の 大戦 の傷跡……この惑星はもうボロボロなんだ」

遙か以前の惑星Z・iには三つの月があった。その一つに彗星が衝突し、砕けた月の破片が降り注いだ。

それが 大異変 だ。

当時、決戦を目前にしていた二大大国の戦争はうやむやのまま停戦状態となり、大陸は異常気象に見舞われたという。

それに加えて、半世紀前の 大戦 で使われた大量破壊兵器の存在が決定打となった——シラヒメはそう語った。

「その結果、今の惑星Z・iには地殻が脆もろくなった場所がいくつか存在する。それが バースト・ポイント 。そこに最大出力の ワールド・エンド を撃ちこめば、この惑星Z・iは崩壊する——まさに世界の終わりだ」

美貌の青年はそこで言葉を切った。

「……どうして、そんな事を教えてくれるの？」

世界の終わりが来れば、ゾイドとて生きてはいられない。なのにシラヒメの語り口調には一切の曇りが無い。それがカグヤには不自然に感じられた。

「それはね、君が好きだからだよ——カグヤ」

「……………」

「本当だよ、嘘じゃない。僕は君が愛おしくて仕方が無い。もしも

僕がヒトだったら——そんな事すら夢想するほどにね」

「……どうして？」

「君はゾイドに愛されるヒトなんだよ。君に関わった全てのゾイドが君を好きになる。君の願いを叶えたいと思う。君の『壊してしまいたい』という想いに応えようとする。だから君が乗ったゾイドは凶暴化する——僕を含めてね」

「……………」

「君は 魔女 なんかじゃない。僕らにとっては 女神 なんだよ」

シラヒメの右手が、無言のカグヤの頬をそつとなでる。

「それを君に知って欲しかった。この世界は君を否定なんてしていない。だから——」

だから。

「もう一度考えてみて欲しい。本当に世界の終わりを望むのか」

「……あたしは——」

「おっと、もう時間だ。残念だけど、楽しい時間はこれでお終い。君を待っているヒト達が呼んでいるよ」

「……………」

途切れてしまった言葉。だが、不思議と苛立ちは無い。

「最後にもうひとつだけ——僕は君に相応しいゾイドかな？」

「……あなた以外、だれがあたしの願いを叶えてくれるの？」

遠まわしな回答。素直に認めてしまうのは、何か癪^{じやへ}だった。

「そうだね。じゃあ、これは契約の証だ」

そう言つとシラヒメは、カグヤの白く華奢な手を取り、手の甲に軽く口づけをした。

「本当は唇がよかったんだけど、それは後が怖いからやめておくよ」

少し残念そうに見えるのは、演技ではなさそうだ。

「それじゃあ、そろそろお別れだ。君の幸いを願っているよ」

「……………また会える？」

「君が望んでくれるなら」

「……必ずよ」

「——イエス、マイ・ロード」

出逢った時の様にシラヒメが恭しく一礼した。

＋　　＋　　＋

「――グヤ！　カグヤ！」

ぼんやりとした意識の中、少女のものらしい声が、自分を呼んでいるのに気付いた。

カグヤが目を開くと、泣きそうな顔をした少女が居た。年の頃なら十二、三歳。

鮮血を思わせる紅い髪と瞳の少女だ。

「……ファイア？　どうしたの？」

「――！　カグヤ、大丈夫！？　なんともない！？」

泣きそうだった顔をくしゃくしゃにし、歓喜と驚愕がないまぜになった表情で、ファイアが問いかけてくる。

「……うん、平気」

周囲を見渡せばファイア以外の人間も居た。教授を始めとするミラージュのスタッフ達だ。

ファイアのように、ほっとした表情の者も居れば、信じられないものを見たという顔の者も居る。無論、無関心な者も。

「……あたしは、どうしたの？」

皆を代表するように 教授 が一歩、こちらに歩み寄った。

「お前さんは シラヒメ に呼ばれたんだ。俗に言う精神感応に近い現象なのか、体験した人間にしか判らんが……何を見た？ 精神汚染の心配は無さそうだが」

「……シラヒメに会った。仮想空間とかいう場所で話をした」

ぼつりぼつりと呟くカグヤの言葉を、周囲の人間は黙って聞いた。

仮想人格の事。 バースト・ポイント の存在。そしてカグヤの性質について。

「なるほど。突飛な話ではあるが、考えられなくも無い。カグヤのゾイドに与える影響についても、それなら説明が付く」

珍しく真面目な顔をして 教授 が言った。

「しかし、バースト・ポイント 爆裂地点 とは……面白いじゃないか」

文字通り、新しい研究対象を見つけた科学者の顔をしている。

「……………」

このヒトもやはり、おかしい。

いや、おかしくない人間など、この世界には存在しないのかもしれない。

誰もが、他人に言えない事情を抱えている。

相容^{あいい}れる事の無い価値観、欲求、願^{ねが}いがある。

それらは衝突し、歪み、いつか――壊れる。

それがこの世界をおかしくしている。

やはり壊すしかない。

そのために自分は 魔女 であろう。

女神 になんてなれなくていい。

――『この世界はたくさんの願いや祈りで出来ている』

シラヒメの言った言葉を思い出す。

ならば――

「……あたしの想いが世界を壊す――」

壊す。

自分の想いで。

この壊れかけの世界を――

つづく

第十四話『アカイト』

気付いたら私はそこに居た。

憶えていたのは、私ではない『私』の記憶。

記憶の中の『私』は幸せだった。

『私』の隣には、『私』を愛してくれたヒトがいた。

無愛想で、不器用で、だけど優しいあなた。

あなたとの記憶が私を世界に繋ぎとめた。

あなたとの思い出が私を世界に規定してくれた。

今は記憶の中のあなた。

あなたが恋しい。

あなたが欲しい。

狂おしい程に、あなたが――

だけど、私は変わった。

もう、あなたが居なくても大丈夫。

だって私には最高のパートナーが出来たのだから。

羨ましい？

けどもう遅いよ。

あなたが私を見てくれなかったのが悪いんだから。

×

×

×

第十四話『アカイト』

機体を急旋回させると、慣性の法則に従い、身体が激しい加重（G）に襲われる。歯を食いしばり、フットペダルを押し込み、機体を制御する。積んでいる武装のためか、旋回時の機体の拳動に違和感を感じる。

だが――

（思ったより操作感覚は変わらないな）

アサト・タチバナはそう感じた。

年の頃なら二十代前半の青年だ。伸ばし気味の髪は黒く、瞳の色も黒い。普段は気怠^{けたる}く覇気の無い表情だが、今はコクピットに居るため、多少は引き締まっている。

一言で言えばどこにでも居そうな青年だ。ただし『無気力そうな』という形容詞が付くが。

だが見た目に反して、アサトはゾイド乗りである。彼の置かれて

いる状況が、それを如実に表している。ここはアサトの愛機である
ゾイド—— ヤミヒメ のコクピットであり、現在、彼はシミュレ
ーションによる仮想目標を相手にしている。

「——クノキ、そろそろ仕上げだ」

アサトが声に出して言った

『了解。マルチ・ロックオン起動。全兵装、発射準備完了』

無機質な女声の機械音声が応える。 ヤミヒメ に搭載された自
律型戦術支援人工知能装置。

パイロットの思考と状況を読み、最善の対処法を示す、もうひと
りのパイロットと言える存在——それがクノキだ。

「目標、全機補足——一斉射撃！」

アサトの眼球の動きと連動した複数の照準が目標に重なり、赤く
表示され——

『オール・ウェポン ファイア
全兵装——一斉射撃』

クノキの機械音声と共に、 ヤミヒメ に搭載された複数の武装
が一斉に放たれた。

コクピットの前方を埋め尽くしていた約三十余りの目標に『撃破』
の文字が浮かぶ。シミュレーションによる仮想目標のため、実弾は
発射されず、表示されるのはコンピュータによる判定のみである。

『仮想目標、全機撃破を確認』

「命中率は？」

『八割強——といった処でしょうか』

「ん。こんなもんだろう」

機械音声と肉声のやり取り。ヒトによっては、それを空虚だと感じる者もいるかもしれない。

「……なあ、クノキ」

『はい、マスター』

間を空けたアサトに対し、クノキは即答した。

それがアサトに、続く言葉を躊躇^{ためど}させた。

「……いや、何でもない」

『そうですか』

マスター
主の問いかけに対し、機械音声はやはり淡々と即答した。

十
十
十

クスノセ機獣派遣事務所。

その格納庫に、一機のゾイドが帰還した。

闇よりなお深い漆黒の戦闘機械獣。

コマンドウルフ と呼ばれる巨大なオオカミ型のシルエット。

その名は ヤミヒメ 。

全高七メートルを越す機体に、このタイプとしては破格の武装を積んでいる。背部にはガトリングガンと二連装砲塔キャノン。後脚部にはミサイル・ランチャー。頭部にも近接戦闘用にバルカン砲と二種類のブレイドを装備している。髪飾りを思わせる一對の板はブレード・センサーだ。

ヤミヒメ 火力制圧用装備 。

それが現在の ヤミヒメ の装備形態だ。文字通り、圧倒的な火力で標的を制圧する事を目標に開発された装備である。

「——つと」

ヤミヒメ の頭部に当たるオレンジ色の防護窓キャノピーが開き、パイロットであるう青年がキャットウォークに降り立った。

アサト・タチバナ。

それがこの、『無気力な若者』を絵に描いたような青年の名だ。

クスノセ機獣派遣事務所　の所員であり、唯一のゾイド乗りである。

「おつかれさん、　ヤミヒメ　」

愛機の装甲を軽くなで、おれいの言葉を掛けている。意外と律儀な性格なのかもしれない。

すると――

「おつかれさまでした」

アサトが声のした方に視線を向けると、少女が居た。

年齢は十五、六歳。灰色がかった銀髪を肩口で揃えており、瞳の色は灰色がかった黒。肌の色は白く、東方大陸人には珍しい特徴を備えている。

いや、驚愕すべきはそれらの要素が形作っているのが『美少女』である点だろう。

小柄な体格に、きやうせう華奢な肢体。人形のような無表情さえ、彼女の儚げな雰囲気を演出するのに一役買っている。

カスミ・シノザキ。

それがこの美貌の少女の名前だ。

書類上はアサトと同じ　クスノセ機獣派遣事務所　の所員であり、

見習いのエンジニアでもある。 ヤミヒメ の火力制圧用装備を新たに設計し直したのも彼女だ。

「どうでしたか？」

カスミが訊ねたのは当然、テストを終えた火力制圧用装備の感想だ。

「ん、よくここまで——って感じだな。正直、驚いた」

それはつまり——

「かなり使える」

と、アサトは遠回しに応えた。

＋ ＋ ＋

「？」

アサトの微妙な物言いに、カスミは疑問符を浮かべた。

何か不満があったという訳ではないのだろう。だが、アサトの口調には複雑なニュアンスが感じられた。

「——」

アサトは無言で ヤミヒメ を――いや、新たに装備された武装を見上げていた。その顔には何かを懐かしむ様な表情が浮かんでいる。

そこで気付いた。自分が再設計したその装備が、元々誰の物であつたかに。

「……アヤカさんの事を考えているんですか？」

アヤカ・Ｔ・シュバイツァー。

ヤミヒメ の以前の搭乗者であり、アサトの師に当たる女性。彼女が好んで使用したのが、この火力制圧用装備だとカスミは聞いていた。

「ん？ まあ、な」

苦笑してアサトはカスミに向き直った。

カスミはアサトから視線をそらす様に、少し俯いた。自分は酷く無神経な事してしまったのではないか？ そんな気がした。

「……余計なお世話でしたか？」

ヤミヒメ はアヤカの形見と言える。ただでさえ彼女の匂いが強く残っているものに、当時を再現する様な真似をしてしまった。それがアサトに複雑な想いをさせてしまったのではないかと、カスミは思い至った。

だが――

「ちょっとした感傷だ。気にしないでくれ」

アサトはカスミの不安を一蹴した。

「それに、昔のままじゃないんだろ？」

「あ――はい。 DFC の余剰出力でEシールド・ジェネレーターは稼働できます。なのでサブ・ジェネレーターは装備せず、HTBの使用が可能です」

ハイブリッド・スラスター・バインダー（HTB）とは、ヤミヒメ の左右腰部から突き出ている装備だ。名前の通り推進器とホーミング・レーザー、姿勢制御装置の三つの役割を果たす。

DFC 搭載後――つまり、アサトが搭乗するようになってから追加された装備でもある。

「これにより、火力制圧用装備でも ヤミヒメ の最高時速は二百四十キロまで出せますし、運動性能にも問題はありません」

「すごいじゃないか」

アサトは多少大げさに称賛して見せた。

「――すごい過ぎるんです」

「ん？」

「本来、こんなスペックは コマンドウルフ にはあり得ないんです。 ヤミヒメ が突出した個体である事は認めます。それでも、仮に突然変異だとしても、明らかに異常です」

アサトは黙ってカスミの言葉を聞いた。

「まして、アヤカさんが乗っていた頃には DFC も積んでいなかった……。アサトさん、 ヤミヒメ って何なんですか？」

「……………」

アサトは無言。

カスミはなおも続ける。無口を絵に描いたような少女にしては珍しい事だった。

「クノキにしてもそうです。 あんな高性能な人工知能が、この惑星 Z_iに存在するはずがないんです」

「……………」

「……………」

沈黙。

言葉は無く、互いの視線のみが交差する。

先に根負けしたのはアサトだった。やれやれといった仕草で、視線を ヤミヒメ に向けて言った。

「ヤミヒメは普通の——いや、確かに強い自我と力を持った個体ではあるが、あくまで普通の コマンドウルフ だ」

「じゃあ、クノキは……？」

アサトは一拍置いてカスミの問いに応えた。

「クノキは—— オーガノイド だ」

＋ ＋ ＋

かつて戦争があった。

西方大陸エウロペ戦争。

それは オーガノイド 争奪戦とも呼ばれていた。

戦争中の二大国家が血眼になって求めた、ゾイドコアを異常活性化させる オーガノイド・システム。その大元になるもの——それが オーガノイド と呼ばれる存在だった。

正確な記録は残っていない。凶戦士 と呼ばれたウミサソリ型ゾイドや、かの英雄バン・フライハイトが連れていた獣脚類型の銀色のゾイドがそうだとも言われている。

ただ、確実に言える事がある。それは オーガノイド を手にしたゾイド乗りは、絶対無比の力を得るという事だ。

十 十 十

「……EOS？」

カグヤ・イザヨイは聞きなれない単語を舌の上で転がした。

見た目は二十代前半位の歳の娘だ。適当に切り揃えた様な黒髪は所々で長さが違っていている。瞳の色も同じく黒いが、その右目は眼帯で覆われているために見る事は出来ない。

冷静に観察すればかなりの美人である事が判るが、気付ける者はそう多くない。誰もが彼女の纏う暗い雰囲気当てられ、正視する事が困難だからだ。

「そう。 エミュレーティング・オーガノイド・システム（EOS）、それがフィードだ」

カグヤの問いに応えたのは四十絡みの男だった。特に特徴と言った物はない。ぼさぼさの白髪混じりの髪と、よれよれの白衣、科学者然といった風体から、ただ 教授 と呼ばれている。本名は知らない。

場所はZOITEC不正規技術開発部門 ミラージュ にあてがわれた施設の一室。

ベッドがひとつ置かれており、そこには十二、三歳位の少女が静かに眠っている。

紅い髪と瞳の少女——名をフィアという。

突然倒れたフィアをカグヤが医務室に運び込み、彼女を 教授が診察したのが十数分前だ。とりあえずは落ち着いているフィアを寝かせたまま、 教授 は唐突に話を切り出した。

「……何なの？ EOS って」

フィアに向けていた視線を 教授 に戻す。カグヤの身体の動きと共に、ぞろりとしたゴスロリ衣装が衣擦れの音を立てた。

「何から説明したもんかな……まず オーガノイド・システム からか」

教授 はもったいつけるでもなく、上手い言葉を探している。

「そうだな。まあゾイドコアを異常活性化させるシステムだと思ってくれればいい。ブレードライガー や ストームソーダー、お前さんの シラヒメ の大元でもある ジエノザウラー なんかを搭載して、絶大な戦果を上げた」

「……………」

カグヤはただ無言で話を聞いている。

「だが、オーガノイド・システムには致命的な欠陥があった。極端に乗り手を選ぶ事だ」

言うまでもなくゾイドとパイロットには相性がある。その延長線上にある問題だとカグヤは理解した。

「これが兵器としての信頼性に劣るって言うんで、早々にオーガノイド・システムの研究は打ち切られ、後のゾイドには使われていない」

それはそうだろう。優秀な兵器とは、強力であればいい良いという物ではない。誰が使っても一定の効果が得られる事がまず重要視される。

「だが、表沙汰^{ざた}に出来ない理由もあった。それが 凶戦士事件 だ」
「オーガノイド を巡る戦いとも言われた 西方大陸エウロペ戦争」。

その終盤の陰で起きたひとつの事件——それが 凶戦士事件 である。

真オーガノイド と呼ばれた巨大ウミサソリ型ゾイドの暴走に端を発した事件は、二体の オーガノイド・システム 搭載ゾイドによって終結した。破滅に向かう世界の片隅で起きたひとつの事件と、ひとつの奇跡。それを知る者は、現在ではほとんど居ない。

「でだ、あれやこれやのうちに戦争は新たな局面に突入、オーガノイド の研究は禁断の技術^{タリ}として闇に葬られた——はずだった」

「……『はずだった』？」

思わせ振りの教授の口調に、カグヤはオウム返しに言った。

「オーガノイドにまつわる逸話には続きがある。オーガノイドそのものである真オーガノイドが死の間際に生み出した存在、それが『ヒト型のオーガノイド』だ」

＋　　＋　　＋

「ヒト型のオーガノイド……ですか？」

カスミは半信半疑といった口調で言った。

それはそうだろう。ヒトとゾイドは進化の過程で分岐した存在だ。生身の身体に優れた知性を得たのがヒトであり、金属の身体に優れた戦闘能力を得たのがゾイドである。もしヒトの知性とゾイドの戦闘能力を持った存在があったとすれば、それは究極の生命体と言える。

しかし生命とは何かしらの欠陥を抱えているものだ。それ単体では完璧と呼べず、互いに補完し合う必要がある。ヒトなどはその典型だ。

ゾイドもそうだ。ヒトが乗り込んでこそ、兵器としての威力を発

揮出来る。これはゾイドにとって本意ではないかもしれないが、ゾイドの闘争本能を引き出すのはやはりヒトなのだ。

惑星Z-1の歴史——それはそのままヒトとゾイドの関係性の歴史と呼べる。古くから、あるいは世界の始まりから、ヒトとゾイドは寄り添いあつて生きてきたのだ。

だからこそヒト型の オーガノイド などあり得ない。それは在^あつてはならない。

「……………」

「信じられない話かもしれないが」

カスミの動揺は理解した上でアサトは続ける。

「いくつかそれを匂わせる非公式資料^{アンケラ}もある」

TK と呼ばれる人物によつて書かれた小説『獣王VS魔装竜VS凶戦士』、ドクトルフと呼ばれる科学者によるヒト型 オーガノイド^{カルデ}の診断書、そして幻の禁書と呼ばれる『預言者の回顧録』等がそうだ。

後の二つに至つては『そういうものがあるらしい』としかアサトも知らないが。

「まあ、資料云々（うんぬん）はいいとして——だ。クノキがヒト型の オーガノイド だった事は事実だ」

「『だった』？」

今日は訊き返してばかりだとカスミは思う。

「……今は ヤミヒメ の中で眠ってる。表に出てるのは、わずかに留まった彼女の残滓と、 オーガノイド としての特性だけだ」

『彼女』という単語に、カスミは特別なニュアンスを感じた。アサトの雰囲気が若干変わった事もあるだろう。これ以上は訊いてはいけない気がした。

十 十 十

「紆余曲折あつて ZOITEC 社はヒト型の オーガノイド の存在を知った。それを何とか人工的に再現出来ないかと考えた。後の事は想像出来るだろう？」

教授 は何でもない事の様にカグヤに問いかけた。

恐らくは、まともな倫理観のある者なら顔をしかめる様な実験が行われただろう事は、カグヤにも容易に想像が付いた。

「……その結果が、ファイア？」

「そうだ。計画を知ったヒト型の オーガノイド は、パートナーであったゾイド乗りと共に姿を消した。だが、当時の研究チームは残された『彼女』の体細胞をクローニング技術で培養し、研究を続

けた」

カグヤはただ無言で聞いた。

「計画で生み出された『実験体』は酷い有様だったよ。およそヒトとは呼べない姿をもつて生まれ、即座に『処分』された。当時の私はぞっとしたよ。これが人間のやる事か、ってな。同時に、まだそんな感情が自分にある事にも驚いた」

滔々（とうとう）と語る 教授 の目はカグヤを見ていなかった。

「だから四番目の実験体がヒト型をしていた事に私はほっとした。ヒトには有り得ない綺麗な紅い髪と瞳をしていたが、その子はどう見ても人間の女の子だったからな。だが――」

「オーガノイド としては不完全だった」

いつから起きていたのか、紅い髪と瞳の少女がベッドから身を起こしていた。

「……フィア、大丈夫？」

カグヤの問いかけに、フィアは笑顔で応えた。

「だから私は模倣品。^{エミュレータ}EOS――エミュレーティング・オーガノイド・システム と呼ばれた」

出来損ないの模倣品。

生まれながらに存在を否定された少女。

そう語るフィーア表情には、いつもの蠱惑的な笑みは無かった。

＋　　　＋　　　＋

フィーアの状態を確認すると、『コーヒーでも煎れて来る』と言って、教授　は医務室を出て行った。

あとはフィーアから直接訊けという事なのだろう。

「……………」

カグヤはいつもの様に無言。その表情からは彼女の感情は読めない。

「何も訊かないの、カグヤ？」

フィーアは自らのパートナーに問うた。

「……言いたくない事なら、言わなくていい。けど、フィーアが聞いて欲しいのなら聞くよ」

隻眼の娘の表情はやはり何を考えているのか判らない。しかし、そんな変わらない態度がフィーアは嬉しかった。

「カグヤは優しいね。だから好きだよ」

「……そう」

応えるカグヤの声音はどこまでも透明だ。

「じゃあ、ここからは独り言だと思って聞いて」

「……判った」

紅い髪と瞳の少女は視線を自分の手元に戻した。

「私は生まれた時からこの姿だった。そういう存在として生み出された。だから私には記憶と呼べるものは無いはずだった。けど、私には違う『私』の記憶があった。多分それは私の基になったヒト型オーガノイドのものなんだと思う」

記憶や感情は育ってきた環境によって形成される。だがまれに、臓器移植等によって、以前の持ち主の記憶や感情が引き継がれる現象が起こると言われている。魂が肉体に宿るという宗教的な意見だと、医学的には否定されているが、症例が無い訳ではない。

「記憶の中の『私』は幸せだった。『私』が好きになったヒトは、『私』が人間じゃなくても『私』を愛してくれた。その人がアサトなんだ」

「……アサト・タチバナが？」

アサト・タチバナ—— 漆黒の狂襲姫 と呼ばれるゾイドのパイロット。

「『私』の記憶は多分、アサトと一緒に居たヒト型 オーガノイドのものなんだと思う。けどもう彼女は居ない。だからアサトは私がもらう……そのつもりだったんだけど」

フィーアは言葉を濁した。

「最近ね、そんなことはどうでもよくなってる自分が居るの。今はもう、私を見てくれているヒトが居る。私のパートナーになってくれるヒトが居る——」

わずかに間を空ける

「——カグヤが側に居てくれる」

「……………」

カグヤはただ無言。

「だからもういいの。今は私がカグヤのために何かしてあげたい」

そう言ってフィーアは視線をカグヤに向けた。

「迷惑、かな？」

紅い髪と瞳の少女は真っ直ぐに漆黒に身を包んだ娘に問うた。

「……この吐き気がするような世界が、あたしは嫌い」

「知ってるよ」

「……あたしの願いは、世界の終わり」

「そうだね」

「……あたしの想いが、世界を壊す」

「うん」

「……………」

「手伝わせて。一緒に世界の終わりを迎えよう。カグヤと一緒になら、私はそれでも構わない」

カグヤには救いが必要だ。

自分にカグヤが居るように、カグヤにも自分が必要だ。

そうあって欲しいとフィーアは想う。

だから――

「大好きだよ——カグヤ」

つづく

第十五話『抗う事』

ヒトは生きる限り、何かに抗^{あらが}わなければならない。

例えば、吐き気がする様な嫌悪感に。

例えば、どうしようもない現実に。

例えば、理不尽なこの世界に。

生きるという事は即^{すなわ}ち、抗う事なのだろう。

人間は諦められない事が在るから生きていける。

叶えたい願い。想い。希望。願望。夢。

だが、多くのものは手に入らない。

掴んだと思えば、指の隙間からこぼれ落ちてしまう。

全ては儚い夢物語――

そしてヒトは絶望する。

救いなど有りはしないと。

幸せなど幻想でしかない。

そして残酷な運命を呪い、不条理な世界を憎む。

しかし、それでもヒトは生きる。

運命に抗い、世界に抗いながら。

いつか何かが変わると信じて……。

×

×

×

第十五話『抗う事』

見渡す限り全てが敵だった。数は三十を下らない。鋼鉄の戦闘機械——ゾイドの群。

それが、たった一機の黒い コマンドウルフ を遠巻きに囲んでいる。

その情景を遥か上空から俯瞰^{ふいかん}する様に見える。

（——これは夢だ）

ぼんやりとした意識でアサトはそう確信した。もう何度目になるかも覚えていない。この三年間、忘れた頃に見る夢。

だからこの続きも知っている。

包囲されている黒い コマンドウルフ —— ヤミヒメ のコクピットに視点が切り替わる。

『——ったく！ どうしろっていうんだ……』

黒い髪と瞳の青年が言った——三年前の自分だ。

そして——

『マスター……』

アサトの腕に抱かれている少女が、苦しげに呟いた。

紅い髪と瞳の少女だ。

(……………)

『すまない、クノキ……ここまでだ』

かつての自分が言う。対する少女の言葉をアサトは知っている。

『貴方^{あなた}に……竜の、力を——』

『やめろ！ お前のカタチが保てなくなる！』

『大丈夫……私はずっと……貴方の側にいます』

『クノキ！』

『全リミッター解除。 D F C 完全開放——』

やがて少女の身体が紅くぼんやりと発光していく。

『クノキ……!』

(やめろ)

『やめろ、やめてくれッ!?!』

叫んでいるのが『今の自分』なのか『夢の中の自分』なのか判らなくなる。

『マスター……』

それでも少女は言葉を紡ぐ^{つむ}。

『御自愛ください——……』

無表情だった少女の顔が薄く微笑んだ。

(もういい……やめてくれ!)

そして少女の姿が紅い粒子になって——消えた。

『——ッ!?! くっ、うっう……うわああああああああああああああああああああああああああ——ッ!?!』

夢の中の自分が絶叫する。

他にどうする事も出来なかった。

だから――

目覚めは最悪だった。

この三年間、爽快な気分が目覚めた記憶が無い。

忌々しげに、伸ばし気味の黒い髪をかき上げると、青年が割りと整った顔立ちをしていることが判る。

だが、彼を美形と評する者は居ないだろう。不健康そうな顔色と、無気力そうな表情が全てを台無しにしている。

アサト・タチバナはそういう男だ。

年齢は二十代前半だが、何かに疲れた様な雰囲気は彼にはある。

「……………で？ お前は何をしてるんだ」

すぐ横にヒトの気配を感じ、しかし驚くでもなく、アサトは問い掛けた。

「ふふふ。ようやく起きましたねえ」

アサトが声を掛けた人物は、のんびりとした口調でそう応えた。

やや低めの女性の声だ。

アサトは声の主に視線を向けた。そこに居たのは二十代半ばくらいの若い娘だ。

胸元まで届く黒い艶やかな髪。大きめの黒い瞳はとろんとしていて。薄っすらと微笑を浮かべた清楚な表情と、どこか幼さを感じさせる仕草は、見る者を穏やかな気持ちにさせる。

積極的に訴えかける派手さは無いが、気付けば目で追ってしまう――そんな控えめだが端麗な容姿をしている。

ハルカ・クスノセ。

アサトが所属する　クスノセ機獣派遣事務所　の所長であり、同居を始めてからもう三年になる。

「今日はどう起こそうかと考えていたら、あなたの寝顔に見入ってしまった」

ハルカはやはりのんびりとした口調で言った。

「面白いかね、俺の寝顔なんぞ見て」

「ええ、それはもう。愛しいヒトの無防備な寝顔が見られるなんて、幸せな事でしょう？」

「……………」

恥ずかしげも無く、そんな事を言う黒髪黒瞳のおっとりした娘に、

アサトは返す言葉が見つからなかった。

事実その通りだと思う。

幸せとは本来そんなやさやかな事なのだと。

「うらやましいよ。お前のそういう性格が」

「そうですか？ 自分では難儀なんぎな性格だと思っているんですが」

そう言いつつも、薄っすらと微笑は浮かべたままハル力が続ける。

「カスミちゃんに話したそうですね。クノキさんの事」

クノキ。

アサトの愛機 ヤミヒメ の中で眠っている少女——その正体はヒト型の オーガノイド である。その事をカスミに話したのが昨日の事だ。

「……頃合だろう。それに何が変わる訳でもない」

「変わりますよ。クノキさんが実は女の子だったと知れば、嫌でもあなたとの関係を疑ってしまう。カスミちゃんがあなたをどう想っているか——気付いていない訳ではないのでしょうか？」

少し意地悪そうにハル力は言った。

「あの年頃にはよくある『勘違い』だろう。たまたま近くに居たのが俺だったただけだ」

「そうだとしても、乙女心は傷付きやすいんですから。もう少し気に掛けてあげてください」

やはり微笑は浮かべたまま、少し困った様にハル力は言った。

その表情にアサトは罪悪感の様なものを感じた。

「お前もそうなのか？」

「はい？」

「俺はお前の事も傷付けてるんじゃないのか」

ハル力が自分に好意を持っているのは知っている。それに応えない自分が、彼女と共に居る権利があるのだろうか。それはひどく残酷な行為なのではないか。アサトはそう思う事がある。

「わたしはね、今の生活が楽しいんですよ」

独り言の様にハル力が言う。

「あなたが居て、カスミちゃんが居て、お仕事があつて、ご飯が美味しく食べられて……そんな当たり前の毎日が楽しいんです」

「……………」

「あなたがお仕事に行っている間は心配ですけど、無事に帰ってきてくれる度に、わたしはあなたに感謝するんです。生きていてくれてありがとう——って」

本当に嬉しそうにハルカは滔々（とうとう）と語る。あたかも、子供に物語を聞かせる母親の様に慈愛に満ちた表情で。

「全部わたしの勝手な自己満足かもしれませんが。あなたやカスミちゃんも迷惑に思っているかもしれません。でも、これがわたしの幸せなんです。これが私の世界のなんです。わたしがあなたを好きなのも、そんな自分が好きなだけなのかもしれません。——ね、自己満足でしょう？」

「……いいんじゃないか。ヒトのやることなんぞ、所詮は全部自己満足だ」

ハルカと目は合わせず、アサトは呟くように言葉にした。

「はい。だからわたしは、あなたを好きな自分です。それがわたしの……何でしょう？ 上手く言えませんね」

困った様にハルカは照れ笑いをした。

幸せ。願い。世界。存在意義。生きる理由。

言葉にすれば限りが無い。どれも正解だし、それだけでは足りない気がする。

ふとアサトは思う。自分は何故生きているのだろうか。

師であったアヤカと離れ、クノキを失ってから自分の何を拠り所にして生きてきたのだろうか？

いつだったか シラヒメ のパイロットから問われた。

『どうして生きてるの?』

こつとも言われた。

『いつ死んでもいいと思ってる——死にたがり』

彼女の言うとおりだ。

カグヤ・イザヨイ——確かそんな名前のパイロットだった。

漆黒に彩られた隻眼の娘。その虚ろな瞳——あの目をアサトは知っている。鏡に映る自分の目と同じだ。

そして彼女と共に居た少女。

クノキに良く似た紅い髪と瞳の少女——フィーア。

二人の姿がアサトの脳裏にちらつく。

かつての自分とクノキの姿が重なる。

もう彼女は隣に居ないのに——

「……本当に、何で生きてるんだろうな、俺は」

「アサト?」

アサトの呟きに、ハルカは危ういものを感じた。

気付けば足がそこに向かっていた。

いや、正確には意識だけがここにある状態というのが正しい。

足元には『タタミ』が敷かれ、空間は『ショウジ』で仕切られ、照明は『アンドン』でぼんやりと照らされている。限りなく『和』を意識した部屋にアサトは居た。

「――よ」

とアサトが声を掛けた。

そこに居たのは二十歳前後の若い娘だ。『キモノ』と呼ばれる黒い東方大陸の民族衣装に身を包んでいる。黒い髪はポニーテール状に結っており、鋭い橙色の瞳でアサトと相対している。

凛々しいという表現が良く似合う、美しい娘だ。

だが、ただ単に美人と呼ぶには問題がある。頭の上にはケモノを思わせる三角形の耳、腰から生えている尻尾もそれを思わせる――ヒトではない。

「こうして会う時のお前はいつも不機嫌だな――ヤミヒメ」

ヤミヒメと呼ばれた娘の耳がぴくりと反応した。

ぷいと顔を逸らし「べ——別に、そんなことはない」と否定する。

その表情は不機嫌というより照れ隠しに近い。不器用な性格なのだろう。自分の感情を素直に出すことに抵抗があるのだ。

ヤミヒメ。

アサトの愛機 ヤミヒメ の仮想人格——対人インターフェイスがカタチを為したものだ。それが今ここに居るケモノの特徴を備えた娘の正体である。

ゾイドに性別は無い。だが『彼女』は女性の姿を選択した。それはヤミヒメが女性格である事を意味する。

ここは仮想空間——ヒトとゾイドを繋ぐコミュニケーション手段のための場所だ。

「なあ、ヤミヒメ」

アサトが問う。

「お前は どうして生きてる？」

世間話でもする様に、天気の話でもする様に、気楽な調子で問い掛けた。

「……ヒト特有の愚問だな。生物が生きる事に理由など必要無い。

ゾイドに戦う意味を問う様なものだ」

先ほどの態度とは一変し、当然の如くヤミヒメは答えた。

「生きる事に疑問を持つのはヒトだけだ。過ぎた知恵など持つから、要らぬ思考をする」

コマンドウルフ の化身の娘はきっぱりと言ったのけた。

「手厳しいな。ま、お前の言う通りなんだろうがな」

アサトは苦笑した。

「我が主よ。^{あるじ}私の存在は貴方のためにある。貴方が望むなら、私は全身全霊をもってそれに応えよう。だが――」

ヤミヒメは少し困った様に言う。

「私にも応えられない事はある」

「すまん。お前にする質問じゃ無かったな」

困った表情のヤミヒメに、アサトは苦笑を重ねた。

そして、わずかな間を置いてヤミヒメが口を開いた。

「ただ言える事があるとするなら、生命の本質――それは求め、抗^{あらが}う事だ」

「『求め、抗う事』――」

「そうだ。どんなにみつともなくとも、情けない姿であっても、最後の瞬間まで生きようとする。ヒトもゾイドもそれは変わらない」

確かな口調でヤミヒメは言った。

「そして貴方と共に在る事——それが私の願いであり、生きる理由だ」

まっすぐにこちらを見据え、強い意思を感じさせる橙色の瞳を向ける。その表情には一片の曇りも無い。

「……そうか」

アサトにはそれが眩しかった。同時にひどく愛おしい気持ちになった。

だから——

「——あ……」

アサトに抱きしめられたヤミヒメが、間の抜けた声を上げた。

抵抗はしない。むしろ力を抜き、身を任せるようにした。

「あるじゃないか——生きる理由」

アサトがヤミヒメの耳元で囁やく。

「……うるさい」

頬^{ほお}を赤く染め、ヤミヒメは拗^すねた様に口を尖らせた。

そして――

「私だけではない。クノキの心も、アヤカの遺志も、貴方と共に在る」

だから――

「だから、貴方は生きねばならない。生きていて良いのだ――アサト」

ヤミヒメの言葉は優しい。まるで我が子を想う母親の様であり、弟を気遣う姉の様でもある。

「いつか言ってくれたな。私と貴方は一蓮托生だと」

「ああ」

「その言葉、忘れてくれるな」

「……あいよ」

そう応えてアサトは、ヤミヒメを抱きしめている腕にもう一度だけ力を込めた。

アサトがカスミとの関係に落ち着きを取り戻すきっかけは、すぐに訪れた。

KFD事件。

『ヒト型の オーガノイド に関する情報』に端を発したひとつの事件。結果的に得るものは無かったが、そこで出会った、自身を真オーガノイド だと言った少女との出会いは、何か意味が在った様な気がする。

教団 に提出を依頼された報告書を適当に書き終え、アサトはKFD事件 の顛末^{てんまつ}を思い返した。無論、真オーガノイド の少女の事は報告書には書いていないが。

改めて考える。何故 オーガノイド がヒトの形を採^とる必要があったのか？

「――書き終わりました」

透明な少女の声に、アサトは思考を中断した。

「ご苦労様です、カスミちゃん。アサトも終わりました？」

ハルカの問いに、アサトは「ん」と書き終えた報告書を差し出す。

それを受け取ると、「はい、ご苦労様です」とハルカはそれらを封筒に入れ、宛名を書く作業に移った。

いつも通りの光景。変わらない日常。

そんな益体も無い言葉がアサトの頭を過ぎる^よ。

カスミもすっかり普段の調子に戻っていた。少なくとも表向きにはそう見える。

アサトはなんとなくカスミを観察してみる。

カスミ・シノザキ。

年齢は十六歳だと聞いている。同年代の少女より小柄で華奢な体型^{きよつや}をしている。

灰色がかった銀髪^{アッシュブロンド}を肩口で切り揃えており、瞳の色は灰色がかった黒だ。肌の色は白く、端正な顔つきと相まって、どこに出しても恥ずかしくない美少女を体現している。

これで愛想が良ければ完璧だが、それを彼女に求めるのは酷な話だ。

それでも同年代の男子からは、さぞかし注目的になっていただろう。それが彼女の望まぬ結果を生んでしまったのは皮肉だが。

「……………何ですか？」

カスミと目が合った。それはそうだろう。これだけじっと見られれば誰だって視線に気付く。

「あー……すまん、見惚れてた」

「冗談半分で言ってみる。」

「あらあら。アサト、犯罪ですよ？」

応えたのはハルカだった。微笑は浮かべたままだが、やや非難の色が窺える。

確かに二十歳過ぎの男が、十代半ばの少女に手を出せば犯罪だろう。

しかし――

「バカ言っな――純愛だ」

「そうなんですか？ カスミちゃん、あんな事言ってますよ？」

無論ハルカは冗談だとわかった上でカスミに振ったのだが、

「……ダメ人間――」

アサトのカミングアウトは、ばつさりとカスミに両断された。頬を赤く染め、照れるなり恥ずかしがるなりするかもしれないというアサトの淡い期待ごと。

「振られちゃいましたねえ」とハルカ。

「ああ、ショックだ」と口だけで言うアサト。

「わたしが代わりに慰めてあげましょうか？」

「結構だ」

やはりいつも通りの日常だ。

そして、そんな当たり前の事に満足している自分にアサトは気付いた。

（幸せはなにげない毎日の積み重ね——か）

らしくない。いつから自分はそんな殊勝じゅしょうな人間になったのだろう
か？

（どうして生きてるのか——ね）

そんな事はどうでもいいのかもしれない。

生きる事に意味など無い。こうしている今にこそ意味があるのか
もしれない。

（言葉遊びだな）

だがそれでも——

（俺は生きてるぞ、カグヤ・イザヨイ——）

変わらない現実^{じじつ}に苛立ちながら、どうしようもない世界に抗いながら、それでも生きている。自己満足と自己嫌悪を繰り返しながら、
少しずつでも前に進む。

それでいいのかもしれない。

いつかアヤカが言っていた。

『世界は変わる。変えていける』——と。

だから……。

（俺は生きるよ。どんなにみつともなくても、抗ってやる）

そして紅い髪と瞳の少女の姿を幻視する。

（それでいいよな——クノキ）

記憶の中の少女が、薄く微笑んでくれた様な気がした。

つづく

あとがき

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。

にじファンでの『真説・漆黒の狂襲姫』はここまでとなります。

続きはアサルトのホームページ(<http://www.geocities.jp/assaultwave2006/>)の『小説』ページにてご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0640q/>

真説・漆黒の狂襲姫

2011年11月15日19時59分発行